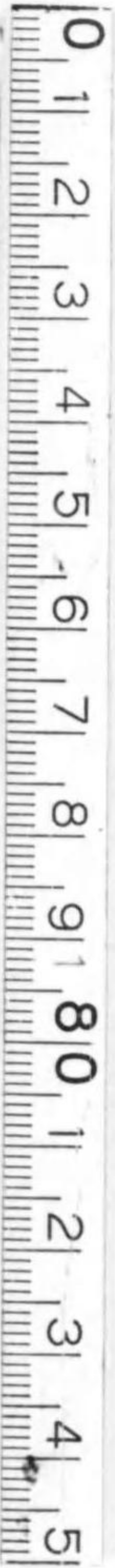


363  
232

幼學綱要少年讀本



始





特232  
854



幼學綱要少年讀本

幼學綱要刊行會發行





### 幼學綱要頒賜ノ勅諭

舜倫道德ハ教育ノ主本我朝支那ノ  
專ラ崇尚スル所歐米各國モ亦修身  
ノ學アソト雖之ヲ本朝ニ採用スル  
未ダ其要ヲ得ス方今學科多端本末  
ヲ誤ル者鮮カラス年少就學最モ當  
ニ忠孝ヲ本トシ仁義ヲ先ニスヘシ  
因テ儒臣ニ命シテ此書ヲ編纂シ群  
下ニ頒賜シ明倫修德ノ要茲ニ在ル  
事ヲ知ラシム

### 序

「幼學綱要」は、長くも明治天皇が幼稚の兒の修身教科書たらしむべく、明治十二年、時の一等侍講元田永孚先生をして編纂に當らしめ、群下に頒賜せられたる寶典であります。

今、その宮内省藏版明治十四年御印行の原本から、本朝の例話のみをとり、これを少年讀物たらしむべく現代語に説述しました。則ちこの「幼學綱要少年讀本」であります。

こゝに納められた例話は、何れも人倫の大義を闡明し、國民道德の發揚に資する、吾ら日常の心の糧であります。説述の方案は、原文に即してこれを簡易平易にし、例話毎に題目を付して興味を以て味讀し得ると共に、その分類、順序を殊更原本に隨つて、その條を傳ふることに力めました。

國民思想混亂の説をさく時、本書を幼童に與へて以てわが國體の精華を知らしめ、教育勅語の御趣旨を徹底せしむることを得ば、本會望外の悦びであります。

昭和十年春



目次

第一孝行……………(一一)

神武天皇の御即位(一) 養老湯(三) 石勝の三子  
(四) 橘逸勢の女(五) 僧と魚(六) 平重盛のなげ  
き(七) 彌作物語(一一)

第二忠節……………(一四)

國に賣る身(一四) 護國の神(一五) 筑紫の哀詩  
(一八) 正成の孤忠(二〇) 四條燈の合戦(二五)

第三和順……………(二八)

善言ヲ獲タリ(二八) 形名の妻(二九) 名馬を買ふ  
話(三〇) 北廳(三三) 阿濃津の城(三五)

第四友愛……………(三七)

億計王と弘計王(三七) 和氣清麻呂の姉(四一) 泰

時と朝時(四二) 毛利元就と子たち(四三)  
第五信義……………(四四)

藤原忠平の信義(四四) 鹽をおくる話(四五) 羽柴  
秀吉と荒木村重(四六) 黄金二百枚(四七) 臣の職  
分(四九) 徳民の徳(五〇)

第六勤學……………(五二)

書物の渉來(五二) 御光明天皇の御勉學(五三) 橘  
皇后の御事(五四) 兵學のお蔭(五五) 火事より讀  
書(五六) 大日本史を編む(五七) 貝原益軒のこと  
(五八) 正月を知らぬ徂徠(五九) 目あきの不便  
(六〇)

第七立志……………(六二)

第十一儉素……………(九三)

金のかざりした車(九八) 松下禪尼と時頼(九四)  
滑川の十錢(九五) 唐糸と三百石(九七) 銀百枚物  
語(九八) 木綿を着る大名(九九)

第十二忍耐……………(一〇〇)

源頼義の苦心(一〇一) 大塔宮の御事蹟(一〇五)  
十八里の新川(一一一) 伊藤仁齋の勉學(一一  
三)

第十三貞操……………(一一四)

二人昔那(一一四) 漢部妹刀自賣(一一四) 四比信  
紗の善行(一二四) 袈裟と盛遠(一二六) 靜御前(一二九)  
宿屋に忘れた五十兩(一二二) 安の貞節(一二三)

第十四廉潔……………(一二三)

坂上當道(一二四) 國を治める道(一二四) 紀夏井

第八誠實……………(七一)

日本武尊(六一) 櫻に書く忠義(六四) 暹羅に輝く  
武威(六五) 丈夫の心(六七) 蕃山の入門(六八)  
新井白石の勉強(六九)

第九仁慈……………(八〇)

埴輪のはじまり(八一) 民の窟(八一) 寒夜御衣を  
脱し給ふ(八三) 朱雀天皇の御仁慈(八四) 加藤嘉  
明の話(八四) 奥貫正郷の善行(八六)

第十禮讓……………(八七)

天智天皇の御事(八八) 藤原良繩(八九) 文を尊ぶ  
三守(九〇) 左右の列を譲る話(九〇) 一本の矢に  
武功ふたつ(九一)



と饒別(一二五) 一萬石より家来ひとつの命(一二六)  
六) 天命を悟る(一二七)

第十五 敏 智……………(一二八)

御宴の日(一二九) 鳥の羽に書いた文字(一二九)  
城壁の修理(一三〇) 石合戦(一三一) 甲賀孫兵衛  
の智略(一三二)

第十六 剛 勇……………(一三五)

熊襲征伐(一三五) 伊企備(一三七) 藤原光頼(一三八)  
奪ひかへした錦の御旗(一三九) 一騎當千  
(一四一) 濱田彌兵衛のこと(一四三)

第十七 公 平……………(一四八)

推古天皇(一四八) 御門の鐘と箱(一四九) 藤原隆  
資の名言(一四九) 板倉父子(一五一)

第十八 度 量……………(一五五)

紅葉を焚く(一五五) 盗んだ賈の絹を届けさせる  
話(一五六) 高松城攻め(一五八) 酒井政親のこと  
(一六〇)

第十九 識 断……………(一六一)

入鹿を誅し給ふ(一六一) 葛野皇子の御識断(一六四)  
藤原長方(一六五) 國難來(一六六) 脇屋義  
助(一六八) 小早川隆景の智略(一六九)

第二十 勉 職……………(一七二)

崇神天皇の御事蹟(一七二) 武内宿禰(一七四) 神  
に祀られた道首名(一七五) 大暴雨について朝參  
(一七六) 源義房の佛(一七六)

—(終)—

# 第一 孝 行

人間として父母の無い者はありません。生んでいただいたいて、成長の後まで、其恩愛教養の深きは父母にまざるものではありません。その恩を思つて、身をつゝしみ、一心になつておつかへ申すのが子としての道であります。ですから孝行は人の道の一ばん大切なものといふたします。

教育勅語「父母ニ孝ニ」「克ク孝ニ」

## 神武天皇の御即位

神武天皇の元年一月一日のこと。天皇には、橿原宮に御即位式をおあげになりました。

正妃を立てて皇后とし、神籬をたて、八柱の神々をおまつりになり、わが日本國をしづめまもらせ給ひました。

まづ天富命がそれぞれの齋部に指圖して、三種の神器たる八坂瓊曲玉、八咫鏡、草薙劍を正殿におかざり申しあげました。

それから天種子命が天神壽詞を奏し、可美真手命が内物部をひきゐ、武装をして儀式を守

ひもろぎとは、上古神祭の時に、古神祭の地をえらなで、常盤木を植ゑ、神居とするも齋部、神祭を司り、或は祭



器を作つた者  
天神の御代に  
天皇即位の日  
臣氏が御代を  
きて大御代を  
奉る御代を祝  
す

仰はに  
まつりのには  
祭地



り道臣命が、來目部をひきゐて、お宮をお守り  
申しあげ、そこで大勢の臣下たちは、お祝ひにお  
うかがひいたしました。  
それから天種子命と天富命にお命じになつて、  
御祭禮のことや、政治向きのことを、おさせにな  
りました。

その後四年(紀元四年)二月に、みことのりを下  
されました、

我が皇祖ノ靈ヤ。天ヨリ降鑑シ。朕ガ躬ヲ光  
助ス。今諸虜已ニ平ギ。海内無事ナリ。以テ  
天神ヲ郊祀シ。用テ大孝ヲ申ブ可シ  
と申されました。そこで、時を鳥見山につくり  
こゝへ皇祖天神をおまつり申しあげました。

### 仁明天皇の御孝心

第五十四代仁明天皇には、嘉祥三年に、太皇太

后におめにかゝりに、冷泉院へ行幸になりました。そして後、階段の下から輦にのりになつ  
ておかへり遊ばされました。

かういふ風に、これまで行幸のたびに、いつも階下まではおあるきになつたのであります。  
すると丁度この日、太皇太后には、「陛下が、輦にのり遊ばすところが、見たい」と、仰せ  
出されたのです。

そこで天皇には、このことについておつきの方々におたづねになりますと、皆々は「さう遊  
ばした方がよろしうございませう」  
と、御返事申しあげました。

やがて輦がずつと階段の上まで持つて來られました。でも天皇には、ずつとお歩きになつて  
階段の下まで行かせられ、そこで始めて、輦にお乗り遊ばしました。

この有様をおがんだ者たちは、誰も彼もみな感動して、  
「天子さまの親を敬はせらるる御心の有がたさよ。本當に、孝道と申すものは、天子さまがお  
手本をお示しになつてこそ、下萬民がそれを悟るのだ。有がたいことだ」  
と、涙を流して、語りあひました。

### 養老瀑



美濃の國常耆郡に、ひとりの樵夫が住んで居りました。

父親にまめまめしく仕へて居りましたが、家が貧乏なので、薪を町へ持つて出ては、それを賣つて暮しを立ててゐたのであります。

ところがこの父親は、大そうお酒が好きだつたものですから、樵夫はいつも瓢箪を腰につけて町に行き、酒を買つて來ては、父親にすすめて居りました。

かうして暮してゐるうちに、ある日のこと、いつものやうに山で薪をとつてゐると、石につまづいてころびました。と、ふと氣づくとき、どうも身近のどこかに酒があるやうなのです。

これは不思議なこともあればあるものだわいと思つて、あたりを見ると、石のあひだから水が涌いてゐて、その色が丸で酒そつくりなのです。そこで、ためしに飲んで見ると、そのかほりといひ、味といひ、實になんともいへません。そこで大へんに喜んで、これからといふものは、毎日これを汲んで持つて歸つては、父親に飲ませました。

靈龜三年〔紀元一三七七年〕の九月、第四十四代元正天皇には、美濃の國に行幸遊ばして、この泉を、養老濕と名づけ、年號を養老と改めになりました。

### 石勝の三子

丈部路祖父麻呂といふ人は、漆部司令史、從八位上、石勝の子であります。

直丁  
番直にあつた  
仕丁

養老四年〔紀元一三八〇年〕のこと、石勝は、直丁秦犬麻呂と一しよに、おかみの漆を盗んだ事に巻きぞへを喰つて、流されました。

この時祖父麻呂は十二、弟の安頭麻呂は九つ、いちばん下の弟乙麻呂は七つでしたが、三人揃つて係りのお役所にまゐり、

「父は、わたくしたち子供を養はうと思つて、おかみの漆を盗み、遠くへ流されようとしてをります。どうぞわたくし共三人を、お役所の下僕としてお使ひ下さいまして、その代りに、父の罪をゆるして下さいませ」と申しあげました。

これをお聞きになりました第四十四代元正天皇は、みことのりを下されまして、

「人五常ヲ稟ク。仁義斯レ重シ。士百行有リ。孝敬ヲ先トス。今祖父麻呂等。身ヲ没シテ奴ト爲リ。父ノ罪ヲ贖フハ。骨肉ヲ存セムト欲スレバナリ。理當サニ懲ムベシ。宜ク請フ所ニ依リ。官奴ト爲スベシ」と、仰せられました。

そこで、石勝の罪は赦され、犬麻呂ひとり流されましたが、やがて間もなく、祖父麻呂も安頭麻呂も官の下僕の役を御免しになり、元通りの身分にかへりました。

五常  
父子ニ親、  
臣ニ義、  
別、朋友ニ  
信

### 橘逸勢の女

橘逸勢といふ人の女は、まことに孝心の深い者でした。逸勢が罪を得て、伊豆國に流され



た時は、ひどくなげき悲んで、その行列と一しよについて伊豆へ下りました。

役人たちが叱つて、追ひ拂ふと、晝間はかくれて居り、夜はこつそり行列を追ふといふ有様でした。丁度逸勢が遠江國まで来た時に病氣になり、たうとうここで死んでしまいました。むすめの悲しみ方は大へんで、そこへ厚く葬り、その墓のそばに假小屋を作つて住み、なくなつた親に十年一日の如く生きてゐる時のやうにまめまめしくつかへました。後で、自分で逸勢の棺を脊負つて京に歸り、厚く葬りました。

### 僧　　ご　　魚

京にひとりの坊さんが住んで居りました。母親に、實にまめまめしく孝行を盡して居りました。

さてこの母親は、大へんに魚が好きで、毎日、これがないと、御飯もいたゞけぬといふ有様でした。家は大そう貧乏でしたが、坊さんは、毎日色々苦勞しては、魚だけは買つて來て食べさせて居りました。

丁度この頃、白河上皇が生物を殺してはならぬといふ、おふれをお出しになりました。そこで、どうにも魚を手に入れることが出來ず、そのお蔭で母親は、丸で三度の食事も食べられぬ有様になり、からだが弱つて來て、もう、ぢきに死んでしまふばかりになりました。たまらな

くなつた坊さんは、たうとうある日桂河に出かけて行つて、小さな魚二尾をつかまへましたが丁度そこを通り合はせた役人に見られ役所へ連れて行かれました。

役人は、色々取りしらべました。すると坊さんは、涙をぼろぼろこぼしながら、

『おふれでいけないと仰せられることは、守り申しあげるのは、當然のことです。ましてわたくしは、坊主の身であり、そのいけないと仰せ出されたことを破つたのですから、決して罪をのがれようとは思つて居りませぬ。が、ただ母は、もう年をとつて居り、その上病氣でありまして、魚でなければ食べることが出來ませぬ。今この魚を、もういち度河へ逃がしてやつたからとて、生きかへる譯のものではございせんから、どうぞこれを母の所へおつかはし下さい。母が、ひと口でも食べたとわかりましたら、いかやうなおとがめを受けましても、決して残念ではござりませぬ』

と、いふその言葉のうちにも、母をおもふ一心ばかりあらはれてゐるので、聞いてゐた役人は、皆貰ひ泣きをいたしました。

やがてこのことが上皇のお耳に達しますと、上皇にも御感心遊ばし、お金やお品を賜はり、罪をゆるされました。

### 平重盛のなげき



平重盛は、忠義の心厚く、しかも武勇のほまれ高い人でありました。藤原成親が、平氏を滅ぼさうと謀をめぐらした時、後白河法皇にも、この企におはいいりあそばしました。平清盛は先づ成親を捕へたが、更に法皇を、おしこめ奉らうとし、大急ぎで兵を集めました。

このことを、重盛に知らせた人があります。重盛は大そう驚いて、すぐに駕をいひつけ、行つて見ると、一門の人たちが、いづれも武装したり、馬に乗つたり、旗をおし立てたりして、(すなわち進軍)といふところ。重盛ひとり、烏帽に直衣といふ姿です。すると弟の宗盛が、重盛の袖を引いて、

『兄上には、なぜ武装なされぬのですか』とたづねました。それを聞くと重盛ははつと睨みつけて、

『おのし等こそ、なぜ武装するのか。敵はどこにゐるといふのか。自分は、大臣大將である。賊が御所を犯さぬ限り、滅多に武装などしてはならぬのぢや』と申しました。

清盛は、この様子を側からさいて、急いで衣を引つけて出て來、重盛に會つてゐる間、何處となく襟を合はせましたが、衣の襟の間から、下に着た鎧が見えて居ります。その時重盛に申しますに。

『成親めの陰謀は、實は法皇のお考へによるのだ。近頃は誰彼となく色々陰謀を企ててばか

四恩の國  
恩の王  
恩の父  
恩の母  
恩の地



り居る。それに對し、君には御輕卒にもかれこれと御加擔あそばすのは誠に困つたこと、思ふので、今あるところへ、お越しを願ふ考だ』この清盛の言葉が、終らぬうちに、重盛は涙をばらはらと流してさて申しました。

『重盛は、今、あなたさまのお顔を見て、つくづく、わが平氏の運も盡きたと存じます。重盛はかねて聞いて居ります。世に四恩があり、而も皇恩はいちばん高いものと申します。わが平氏は、はじめは桓武葛原の尊い出ではあります。が、今は人臣となり、中頃は甚だ衰へて居りまして、平將軍の功があつても、たかが國守に過ぎませんでした。それが、父上となつて太政大臣の地位にのぼり、重盛のやうな者さへ、大臣大將にと任せられて居り、その他一門の者はいづれも重い位にのぼつて居り、領地もあら方



日本國の半分程になつて居ります。この上の御恩とてなく誰れかれに色々陰謀されるのも、あながち無理とは申されませぬ。しかも運はまだ盡きずに、成親を捕へることが出来ました上は、罪のあるところを調べて、夫々に罰すればよく、なにをそのやうに、大騒ぎするにあたりませうや。わたくしはまた聞いて居ります。おかみの御用の爲めには、私事は捨つべきで、私事の爲めに、公のことを捨つべきではないと。しかもこん度は事の善悪ははじめからはつきりして居りますのに。重盛が、皇恩をかうむつてゐることと申したら、仲々はかることは出来ませぬ、重盛のために喜んで死んでくれる者が二百人あまりもござります。以前源義朝は、勅命によつて、自分の父を斬りました。わたくしは、大逆無道、この上ないものと思つて居ります。これは、あなたさまもぢかに御覽になつたのではござりませぬか。君に忠であらうと思へば、親に孝でなく。孝であらうと思へば忠でなくなる。ああ、ただ今の重盛は、どうすることも出来ぬ破目になつてしまいました。なんとしてもお考通りにあそばすお積りならば、どうぞまづこの重盛の首を切つてから、お出かけ下さりませ」と、涙を流して申しましたので、坐にゐた者たちは、何れも感動しました。

その時清盛が申しました。「わしが、この年になつて、こんなことをやるのも、みんな後々の者のことを思へばこそぢや。これがいけぬといふなら、そなた自分でどうにもしたがりやう」と、その儘部屋にはいつてしまひました。そこで重盛は、弟たちに、

「たとへお父君がお年寄でお考なくかうしたことをなさうともそなたたちは、なぜお諫めしないのか」それから將士たちに向つて、

(決して詰まらぬことを、騒ぎ立ててはならぬぞ)とたしなめた上、自分の邸に歸りました。

さて歸つて來ても、なほ心配の餘り、急に使を出して、兵を集めました。

「大事が起つた。すぐに集まれ」そこで、この命令を受けた家來たちは、てんでに、

「ふだんあのやうに落ちついていらせられる、殿からかうしたおふれが出るからには、屹度大へんなわけがあるのだらう」といひ合つて、大急ぎで來たので、たつたひと晩で二萬人あまりも集まりました。

その時重盛は、平家貞と平貞能を父清盛のところへ使にやつて、いふには、

「法皇には、あなたさまのことを聞かせられて震怒し給ひ、重盛にお命じになつて、父を討てと仰せられます。あなたさまにことがあつても大へんと存じますので家貞、貞能のふたりを警備に差しあげます。重盛がかうして居りますからは、この身にかへてもあなたさまの罪のお赦しを乞ひ奉りませうから、どうぞ御安心下さりませ」これを聞いた清盛は、すつかり恐縮してしまひました。

重盛は、この時泣いて申しました。



「自分は、父君のあやまちは救つたが、そのお氣持を傷けてしまった。自分の罪は、この上もなく大きい」

かうして、兵たちの骨折をいたはつた上引きとらせました。

### 彌作物語

常陸の國行方郡玉造村の百姓に、彌作といふ者が居りました。

家が貧乏で、別に田も畑も持つてゐなかつたため、ひとのを借りて居つたのです。父は幼い時分に死んでしまひ、ひとり残つた母はもう年寄つてゐた上に、足腰が立たなかつたのです。

さてこの彌作は、馬鹿に近い程實直な男でしたが、この母親につくす孝行といつたら、大へんで妻と一しよに、せつせと働いては孝養をつくして居りました。

すると、妻が病氣になつて、働けなくなりました。

「妻が働けなくなつたのでは、わしがおつ母さんのお世話をすることが出来なくなるだらう」

といつて、妻と別れて、母親と一しよに居りました。かうして田へ仕事に行く時も、へたつたひとり、家へ残して行つたのでは、何かと不自由だらう」

と、母を脊負つて片手に農具を持ち、片手に母親に食べさせる物を持つて行きました。かうして、夏は涼しい木蔭をえらみ、冬は暖い日向を捜がして坐らせ、耕すあひまあひまには（あ

つ母さん、氣分はどう）と訊いては、色々と食べ物飲み物などの世話をして居りました。

で、この母親は、大そう酒が好きだつたものですから、毎日々々、無理な働きまでしては酒を買つておいて、いつでも母親の欲しいといふ時、間に合ふやうにして居つたのです。

延寶のはじめの頃（延寶元年は紀元二三三三年）領主の徳川光圀がこのことを聞くと、態々彌作の家へ出かけて行き、両手にお金をすくふやうに持つて、彌作のあたまの上からばらばらと撤いた上、その孝行を褒めて金をみんなやりながら、

「この金で、母親に樂をさせてやるがいいぞ。この金は、わしがやるのではなく、天が授けるのぢや」と申されました。その上で村の役人と呼んで、

「聞くところによると、彌作は馬鹿正直過ぎる程の人物ぢやさうな、そこで、うかとするところの金を騙されて盗られてしまふかも知れぬから、おぬしたちでよく相談して、先づ田畑を買はせた上、後々ともよく氣をつけてやれよ」と、いひつけられました。

後になつて、儒臣に命じて、彌作の話を書かせました。



## 第二 忠節

世界各國其の國體は異つてをりますが、その國を、お治めなさる方のあらせられぬ所はありませぬ。人臣はよくその君を敬し、その國を愛し、その務をはげみその分をつくし、以て其の御恩に報ずべきであります。とりわけ萬世一系の天皇をいたゞき千古不易の臣民たるわが國民としては臣の忠節を子の孝行と並べて人の道の最大義といたします。

教育勅語「我が臣民克ク忠ニ」

### 國に賣る身

大伴部博麻といふ人は、筑紫の上陽郡に居つた軍卒でありました。第三十七代齊明天皇の七年〔紀元一三二一年〕朝鮮百濟の國を救ふために唐の國と戦つた時、唐の軍隊に捕へられてしまひました。

第三十八代天智天皇の御代のことですが、土師富杼と、氷老と、筑紫薩夜麻と、弓削元實兒の四人の人たちも、同じやうに唐に居りまして、

（どうぞしてお國へ歸つて、今、唐の者共が目ろんでゐることを、天皇さまに申しあげたいも

今の筑後國八女郡にあたります

のだが、それには旅の支度金がなくて困つた）と、歎いて居りました。

これを知つた博麻は、土師富杼に向つて、

「わたしは、あなた方と御一しよに、日本へ歸ることは出来ません。どうぞわたしを賣つて、そのお金で旅のお支度をなすつて下さい」と申し出ました。

そこで富杼やその他の人たちは、たうとうその言葉通りにして、日本に歸り、はじめの望どほりに、當時唐の國がわが日本國に對して、色々とよからぬ事を準備してゐたのを、天皇に申しあげることが出来ました。

一方身を賣つて、いやしい仕事をするやうになつた博麻は、つらいつとめをして三十年も、唐にゐなくてはならなかつたのであります。やつと、第四十一代持統天皇の御代四年〔紀元一三五〇年〕に、新羅のお使の大奈末金高訓たちと一しよに、筑紫へ歸つて來ることが出来ました。

そこで、天皇には、博麻の忠義をお喜びになり、務大肆を授け、緋五匹、布三十端、稻一千束、水田四町を下されました上に、身内の者たちの課役をゆるして下さいました。

### 護王の神

和氣清麻呂は、備前國の入で、第四十六代孝謙天皇の御時、因幡員外介となりました。まつ





すぐな行ひの方でありました。

天皇には、宇佐の神を御尊敬になり、そのお告げにお従ひあそばさぬことはありませんでした。

天皇のお氣に入りの僧道鏡が、法王になつた時、大宰主神中臣阿曾麻呂といふ者が、道鏡の機嫌をとるため、

「宇佐八幡の神託によると、道鏡に天皇の位をおゆずりあそばすと、國內が實に平穩泰平にならうと申すことをござります」と、奏上いたしました。そこで天皇には、清麻呂にいひつけになつて、

(すぐに宇佐にまゐり伺ひを立て、來るようにと、仰せになりました。

さて出發の日になると、道鏡は大そうな見幕で清麻呂に

「大神は今自分を、天皇の位に即けようと覺召さ

れるのだ。お前がこれから宇佐まで行つて來るのも、その爲めだらう。宇佐へ行つたら、神教を伺つて、わしが位に即けるやうにしてくれい。その時はお前を太政大臣にして、この國の政治をとらせてやるぞ。もしいふ通りにしないと、重い刑罰を與へるから心得よ」と申しました。

さて清麻呂は宇佐の神宮におまゐりして歸り、神の仰せを、天皇に申しあげました。それは、

「わが日本國は、そもそものはじめから君と臣とが、しかと分かれて居り、臣下の者を君としたことは、いち度もない。天津日嗣は、必ず皇室のお血脈のお方でなくてはならぬ。臣下の分ざいで天皇のお位に即かうといふやうな不届至極な者は、すぐに追ひ拂つてしまへ」と、申上りました。

道鏡は大へんに怒つて、清麻呂の役をとりあげ、名を穢麻呂と改めさせ、大隅國へ流したばかりでなく、途中で、殺そうとしました。

ところがさてその命令を下したその時、急に雷が鳴り出し、大雨が降りはじめ、天地が眞の暗になつて來たので、命令を受けた者は、すっかりびくついて、仲々出立しませんでした。そこへ、清麻呂を赦すといふ天皇の御使がみへました。

やがて孝謙天皇はおかくれになりましたが、第四十九代光仁天皇が御位にお即き遊された



時、天皇には道鏡を下野國に追ひはらひ、反對に清麻呂をお呼び出しになつて、以前のお役をお授けになりました。

清麻呂はそれから引きつづき、出世をして、從三位にまでなり、功田二十町を賜はつて、長くそれを子孫に傳へました。年六十七でなくなりましたが、正三位の位を賜はりました。

その後、第百二十一代孝明天皇の嘉永年間〔紀元二五〇八年以後〕には正一位を贈られ、護王大明神といふ神號を賜はりましたが、第百二十二代明治天皇の明治七年〔紀元二五三四年〕には護王神社として、別格官幣社に列せられました。

### 筑紫の哀詩

菅原道真は、第六十代醍醐天皇の御代に右大臣となり、藤原時平ときひらと一しよに、政治をとつて居りました。道真は、徳高く學問があつたので、大勢から尊敬され、自分も一心になつて、國の爲めい、政ごとをとつて居りました。

ところが時平といふ人は、年が若い上に、きかぬ氣だつたので、道真のすることにいつも不満を持つて居りました。丁度その時、宇多法皇には、天皇と御相談の上、道真を關白にしようとおそばし、そのお話がそつと道真までありました。でも道真は、平に御辭退申しあげて、御前を下がりました。

これを聞いた時平は、たうとう、道真のことを色々と悪しざまに申しあげ、太宰権帥にして筑紫に追ひやつてしまひました。

道真は、いざ出立といふ間際に、次ぎのやうな歌を詠んで、法皇さまに差しあげ、自分の氣持をお訴へ申しました。

ながれゆく、わがみもくずとなりぬとも

きみしがらみと、なりてとどめよ

道真は五代の天皇にお仕へ申し、中でも第五十九代宇多天皇、いちばん親任せられ、實によく國家の爲めに働いたのです。配所にある時は、門を閉めて一步も外へ出ず、詩を作つたり歌を詠んだりして、わづかに自分を慰めて居りましたが、片時も忠義の心を忘れたことはありませんでした。

九月十日のこと一首の詩を作りました。

去年今夜侍「清涼」 秋思詩篇獨斷腸 恩賜御衣今在此 捧持毎日拜餘香  
これを聞いた者で、泣かなかつた者はありませんでした。

第六十代醍醐天皇の延長年中〔紀元一五八三年以後〕にもとの位に戻され、正二位の位を贈られました。更に第六十六代一條天皇の正暦年中〔元年は紀元一六五〇年〕に、人たちは祠

配所  
流された土地



を京都の北野に建て、天満天神と申しました。かうして、一條天皇の寛弘の年以來皇室からもお使ひをたまはつて参りましたが、明治四年〔紀元二五三一年〕に、明治天皇はその祠を、官幣中社に列せられました。

### 正成の孤忠

楠正成は河内の人であります。第九十六代後醍醐天皇には、北條氏を滅ぼさうと色々御苦心最中、その謀が漏れたため、笠置におのがれあそばしました。そこで、正成をお召しになり（いかがしたらよろしきや）と、賊を討つてだてをお訊ねになりました。その時正成は、

『天誅加はるところ、賊の斃れぬことはござりませぬ。凡そことをなすには、先づ謀を第一といたしまする、カづくでは、武藏相模の兵には、天下にかなふものはござりませぬが、計略を用ひれば、格別のこともござりませぬ。とは申すもの、勝敗は、いかなる軍にもつきものにござりまする。しかし、いち度敗れたからと申して、その儘参つてしまふやうな者ではござりませぬ故、臣正成が生きて居ります限り、何卒陛下、御安心下さりませ』と申しあげ、すぐに國に歸つて、赤城に立てこもりました。

ところが、その備へのまだ充分でなく、兵もたつた五百ばかりといふ時に、笠置を陥とした賊兵は、すつかり元氣づいて、いち度にどつとばかりに攻め寄せ、城を十重二十重に圍んでし

天誅  
よつて  
殺されること



楠正成父子  
赤城に籠る

まひました。そして、城が小さなのを見てすつかり馬鹿にし、一氣に攻め立てます。

正成は、合戦の度ごとに、色々謀をもつて、いつも勝つて居りましたが、賊兵に氣永に圍まれてゐたため、食糧がなくなつて來ました。しかもよそから救つて貰ふわけには行きません。

かうして、赤城の城も陥つたので、正成は金剛山にかくれました。

元弘二年〔紀元一九九二年〕の二月、北條高時は、後醍醐天皇を、隱岐島にお流し奉りました。その年の四月、金剛山を出た正成は、兵五百で今は敵の立てこもつてゐる赤城を攻め、城を守つてゐた湯淺定佛を降参させてしまひました。この時護良親王には吉野の城にお據りになりました。

元弘三年二月、賊兵は、大軍で、千窟城、赤城それから吉野を攻めて來ました。かうして先づ赤



城が陥り、吉野も同様に落城してしまつたのであります。

そこで賊軍は、ひとかたまりとなつて、どつと千窟城攻撃のため集まつて來ました。その兵數は、八十萬といはれます。それを正成は、たつた千餘人でふせいでゐたのです。

この頃、新田義貞は鎌倉を滅ぼして居りましたし、後醍醐天皇にも、隱岐を出て伯耆國にいらせられました。かうした時勢だつたので、日本國中、あちこちの勤王の兵がたちあがり、お蔭で京都をこちらの手に取りかへした爲め、賊も千窟の城攻めを解いてしまひました。かくて天皇には、京都へお還りあそばしました。

正成は、兵七千をひきゐて兵庫にお出迎へ申しあげ、天皇に拜謁いたしました。すると天皇には色々とお言葉を賜はり、

「大業速ニ成ルハ。皆卿ガカナリ」と仰せになりました。

そこで正成は天皇を伏しをがんで

「あの賊軍の嚴重な圍みを出でて、臣正成が今日かうして居られますのも、ひとへに陛下の威靈によるところにございます」と申しあげ、お行列の先頭に立つて、京都に入りまし

た。さて、延元元年〔紀元一九九六年〕に、足利尊氏が謀叛を起しました。

そこで正成は、また色々計略を用ゐてこれを破つたので、尊氏は西海にのがれましたが、やがて大軍を集めて、のぼつて來ました。その時正成は、

「賊尊氏は、九州の兵を手に入れて攻めのぼつて參りました。その勢ひは、屹度大へんでござりませうから、こちらの戦に疲れた兵では、仲々ふせぎがたいと存ぜられます。何卒陛下には、暫く山門にお移り下さりませ。臣正成は河内にかへつて、畿内の兵をあつめ、敵の食糧を途中で襲ひ、彼らが疲れた頃に義貞と前後からいち度に攻むれば、屹度勝つことゝ存ぜられます」と申しあげました。でも藤原清忠はこの意見に同意せず、正成に京都の外で敵と戦ふようにと申しました。

そこで天皇にも、さう仰せ出だされたのであります。

正成は、御前を退いて來てさて、(こうなつてしまつては、もう、他に仕様はない)

といつて、弟の正季、子の正行たちと一しよに御所をさがり、櫻井の驛にまいりました。

正行はその時十一でしたが、正成はこれを故郷河内國にかへしてやらうと、さて申すには、

『正行よ、そなたは年幼いとはいへ、今父のいふことをよく覚えておけよ。この度の戦は、天下安危のきまるところだが、いかに考へても、もう二度とそなたに會ふことは出來まいぞ。わしが死んだなら、天下は必ず足利の手に收められよう。そなたはよく身をつゝし忘れず、も目前の利慾にはしらず、忠義の一念を捨てるでないぞ。わが楠家の者で、ひとりでも残つ



てゐたなら、そなたはこれをひきいてゐて、千窟の城を守り、身を捨て、きつと君に忠節を盡し奉れこれが私への孝行である』そして、天皇から下された菊作の寶刀を與へて、別れました。

正行は、涙をのんで、河内の國へ歸りました。そこで正成は兵庫に行き、兵七百をひきゐて湊川に陣しました。かうして賊の大軍にあたり、弟正季と一しよに足利直義の陣に突撃數回、あはや敵將直義を捕虜に出來さうでしたが、丁度この時、賊には尊氏が自分の兵を分けてよこした援兵が來ました。

正成正季の兄弟は、この大軍に向ひ、血戦十六合、その兵のあら方は戦死してしまひました。そこで近くの百姓家にはいり、正成は鎧を外づいたら、身には傷が十一ヶ所もありました。その時正季の顔を見て、

『死んだ後、どうする積りか』と訊ねますと、正季はにつこと笑つて、

『七度人間に生れかはつて、國賊を滅ぼしてやりませう』と答へました。

これを聞くと、正成は大そうよろこんで、

『わしの思つてゐた通りにいつてくれたぞ』といはれ、やがて兄弟刺しちがへて死にました。

正成は四十三、正季は三十二です。この時楠家にゆかりの者十六人と、残つた兵五十何人が、夫々に討死したのであります。

天皇には、正成の討死をおききになられますと、大そうおなげきあそばし、正三位右近衛中将をお贈りになりました。

その後明治五年〔紀元二五三二年〕明治天皇には、湊川神社を建てさせられ、これを別格官幣社に列せられ、更に明治十三年〔紀元二五四〇年〕に正一位を贈られました。

#### 四條畷の合戦

楠正行は、父正成から櫻井の驛で申された教訓を奉じ、片時も國賊を滅ぼすことを忘れず遊ぶにもきつと尊氏を斬る眞似をして居つたのであります。

さて、後醍醐天皇には、花山の院をおのがれあそばし、大和へ行幸なされましたので、正行は、いとこの和田正朝たちと一しよに急いで大和に向ひ、天皇のお行列を護つて吉野に入りました。その時正四位下に叙され、父正成のお役をつぎました。

やがて天皇にはおかくれになり、第九十七代後村上天皇が御位にお即きになつたのであります。

正行は時々賊軍と合戦してはこれを破つたので、尊氏は大へん心配し、高師直と師泰に命令してかれらに二十餘州の兵をあたへ、正行を攻めさせました。

正行は弟の正時たちと、吉野の假御所にまゐり、侍臣に申しあげますには、



『先臣正成は、かよわき力ながら敵にむかひ、先帝陛下の御爲めにお盡し申しあげました。その後間もなく、天下はまた亂れ、賊と戦つて淡川に討死になりました。臣正行はその時年十一でございましたが、河内へ歸され、成人の後國賊を滅ぼせと、命ぜられました。臣ももう一人前に相成りました。もしそれ程の大事な仕事のある身が、病氣にでもなりましたならば、不忠の臣となり不幸の子と相成ります。國賊共がまた皇室に對し奉り、不忠の限りをいたし居ります今こそ、父に命ぜられた事を果すべき秋にござります。彼の首をとらなければ、彼にこの首をとられませう。勝つか敗けるか、こん度の合戦にきまります。何卒ただいち度天顔をおがんで戦に参りたる存じます』と、涙を流しました。

天皇には、簾をあげさせて正行たちを御覽あそばし、直々のお言葉を賜はりました。で、正行は有がたさに泣いて御所を退き、兵をひきゐて先帝後醍醐天皇の廟を拜し、家來たち百四十三人の名を、如意輪堂の壁に書きつけてから、そのおはりへ、歌を書きました。

かへらじと、かねておもへばあづさゆみ

なきかずにいるなをぞとどむる

さてそれから四條畷に向ひました。

敵は凡そ八萬で、これを五隊に分け、そのうしろに、高師直が控へて居ります。

正行は、三千の兵をひきゐて、先づ師直の陣に突つかゝりました。

賊は、忽ちに左右、前後ぐるりを取り圍んでしまふ。

正行はそれにも構はず、三百の兵をひきゐてひたむきに突撃し、

(なんとしても師直と一合戦)

とおめき呼んで進み行きました。かうして味方の兵の勇ましかつたことは、本當に我のひとは敵の百人にもあたる程だつたのです。そして合戦の時間は巳から申にもなり、三十度あまりも衝突して、死者や傷者は數千人に及び、わが兵のあら方は討死してしまひました。

正行は、遠く師直を睨みつけながら、兵をはげまし、眞つ先きに立つて攻め立てたので、敵は正行ひとりを目がけて、雨のやうに矢を射かけます。今はもう正行も全身はりねづみのやうに矢がさゝつてしまひました。その時正行は大聲で申しました。

『もはやこれまで、賊に生捕られまいぞ』

そして、兄弟して刺しちがへて斃れました。

正行はこの時年二十三でしたが家來百四十三人も、皆こゝで討死いたしました。

明治天皇には、明治九年〔紀元二五三六年〕正行に従三位の位を賜はりました。



## 第三和順

人には、男女の區別があります。故に必ず夫婦があります。夫婦がありますから、父子があり、兄弟があり、かうしてみなが集まつて、一家をつくるのであります。そして、夫は外で働き、妻は内を修めるもので、夫婦の仲が和順であれば、一家は丸くをさまります。かういふ風に、人のみちは、夫婦にはじまるものですからこれを忠孝とならべて、人のみちの大義といたします。

教育勅語「夫婦相和シ」

### 善言ヲ獲タリ

第二十一代雄略天皇が、葛城山に御獵をあそばした時のこと。

いきなり飛び出した一頭の猪が、物凄しい勢ひで、突つかゝつて來ました。そこで獵夫たちはいづれも怖がつて、樹にのぼるやら、大騒ぎをしました。

その時天皇には、ひとりの舍人とらひに、（射殺すように）とお命じになりました。

ところがこの舍人は、大へんな臆病者でしたから、仲々、矢があたりません。

和順  
おだやかであ  
ること

舍人  
天皇や皇子の  
お身近くに仕  
とめて御役なつ  
とめる者です

さうかうしてゐるうちに、猪は御前近くまで追つて來ましたので、天皇には、御自身に弓を射られ、倒れたところを、おふみ殺しになりましたが、さて御獵が終つた時、こん度は舍人を斬つて捨てようとおそばされました。

皇后が、それをお聞きになると、

（おやめあそばすよう）と仰せられました。そして、天皇さまが、

（なぜ）とお訊ねになつた時、皇后さまには、

「若し獸ノ故ヲ以テ人ヲ斬ラバ、何ゾ豺狼ニ異ナラム」と申されましたので、天皇には、

「人皆獵シテ禽獸ヲ獲、朕は獵シテ善言ヲ獲タリ」とお喜びになりました。

### 形名の妻

第三十四代舒明天皇の御代に、蝦夷がそむいたので、大仁上毛野形名おほにんかみづのなまが命令を受け、將軍となつて平げに向ひました。でも、仲々滅ぼせず、しまひには蝦夷の兵たちに圍まれたため、兵卒共は皆ちりぢりに逃げ去つてしまひました。

そこで形名は、

（もうこれまで）と、自分も逃げ去らうとしたのです。

すると、形名の妻が申すには、



「あなたさまの御先祖方は、遙々海を渡つてよその國で戦ひ、勇ましいお名を、外國まで輝かされました。それなのにあなたさまは、そのやうなお心弱いことで、御先祖のお名をけがし、後の世までも笑ひ草になられてもよろしいのですか」と、まづ酒をすゝめたので、形名は酔つて寝てしまひました。

その時妻は、劍ををび、數人の召使ひの女たちに、弓の弦を、びゆんびゆんと、鳴らさせました。

これを聞いた蝦夷の兵たちは、

(向ふにはまだ兵はかなり多いらしい)  
と思つて、少し陣を引きました。

するとその時形名が起きあがつたので、妻は、自分も武具をとつて、夫をはげまはげまし敵陣に攻め入つた、その勇ましい有様に、今まで逃げ隠れしてゐた味方の兵も段々に集まつて來、たうとう、さんざんに蝦夷の軍を打ち破ることが出来ました。

### 名馬を買ふ話

山内一豊が、織田信長に仕へた頃のこと、ある時、東國から名馬を曳いて來て、  
(賣りたい)といつた者があります。

で。大勢の將士が出かけて行つて見ると、實に立派な馬なので、いづれも、感心してしまひました。でも、その値が高いので、誰ひとり買ふことが出来ません。

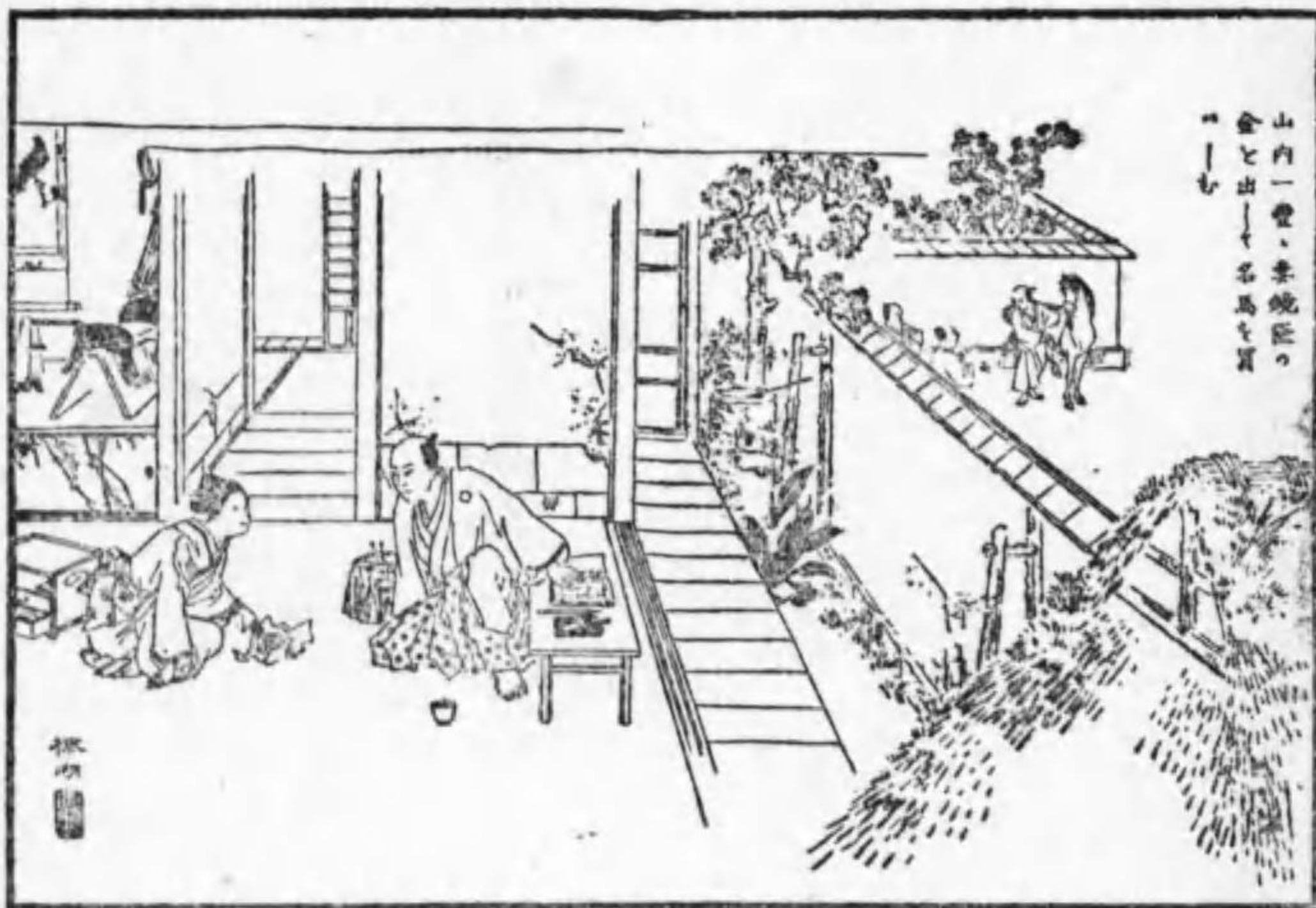
そこで賣りに來た者は、馬を曳いて歸らうとします。

一豊は、家へ歸つて來て、しみじみと歎息しながら申しました。

(貧乏をしてゐるのは、辛いことだ。仕官のはじめにあたつて、あの名馬を自分のものにして、君公にお目通りしたなら、決してわしひとりの名譽ばかりではないのだが)これを聞いた一豊の妻が、その馬の價を訊くと、

「黄金十兩だ」と一豊が答へました。  
すると妻は、

「あなたさまが、どうしてもその馬が欲しいと仰



山内一豊、孝純の  
金と出た名馬を買  
つて



せられますなら、代金を差しあげませう」といつて、金を一豊の前に並べました。  
これを見た一豊は、大そう喜んだが、さて不思議に思つて

「この頃の貧しさと申したら、大へんではないか。それでゐてそなたは、それ程の金を持つてゐたことを、ひと言も申さなんだのは、どうした譯なのか」といふと、妻は、

「さうおつしやるお言葉を、御無理とは存じませぬ。でも、わたくしの嫁入つて参ります時、父がその金を自分からこの鏡函の底深く入れて下されて、嫁く家が貧しいからとて、これを無駄使ひするなよ。この金は、夫の大事といふ時にだけ用ゐよ、と色々と訓されました。伺ひますと、近々に京都で、馬くらべがございます由で、しきりに名馬を手に入れたいと御苦心の御様子、そこで、これこそ父の申した大事のときと存じましたので、差し出たわけにございます」と語りました。

一豊はすつかり感心して、

「そなたの心がけとお父上の御恩によりて、やつと名馬が手に入つたぞ」と、そこでその馬を買ひとりましたが、間もなく馬くらべの時となりました。

一豊は、その馬に乗つて京都に参りましたが、その馬の立派なことといつたら、他に較べられる馬とはありません。信長はそれを見ると、大そう驚いて、

「あの者は一體、どうしてこれ程の名馬を手に入れたのだらう」と申し、そこで一豊が御前に

進んで、妻の心がけや養父の心遣ひをくわしく申しあげますと、感心されて、

「わしに家來も多いが、たつた一頭の馬を買へる者とはなかつたのか。本當に一家の恥ぢやその方は落ちぶれてやつとわしに仕へるやうになつた者だが、よくぞそれ程の事をして、わしの恥をそゝいでくれた。武士にはいつもさうした心がけがなくてはかなはぬ筈」といつて祿高をふやし、いろ／＼と役目を重くいたしました。

北きたの 廳まんなか

豊臣秀吉の奥方は、尾張の人淺野又左衛門といふ人の女でみめかたち美しく、しかも婦徳の高い方でした。

はじめ前田利家は、その婦人の美しいといふことを聞いて、

(ぜひ妻に貰ひたい)と又左衛門に申しこみました。

利家はその頃は犬千代といひ、淺野家とは一門一家のつながりでした。

そこで又左衛門も大そう喜んで、女にそれと話しますと、女は承知しません。でも犬千代はいろ／＼と(承知して貰ひたい)と申しやり、奔走いたしました。

この頃秀吉は、まだ木下藤吉郎といつて、織田氏の家來で、又左衛門と同じ長屋に住んで居りました。

婦徳  
人たるもの  
守るべき徳  
義



又左衛門は、藤吉郎がなか／＼の人物で、その上犬千代と仲よしなので、その藤吉郎の所へ行つて、どうしたらいいかと相談しました。

相談された藤吉郎は、すぐに犬千代の所へ行き、理を説いて聞かせると、犬千代は、『それなれば、おのしが貰へ』といひ出しました。

藤吉郎は猿に似てゐるといはれる程、醜い男だつたので、犬千代にして見れば、ひとつにはかうして女を困らせてやらうとしたのであります。

話がかう纏れて來たので、又左衛門は、改めて女に向ひ、

『どうぞ藤吉郎のところへ嫁入つてくれ。さうでない、いろ／＼面倒なことが起りさうだ。

藤吉郎は、今こそあゝした卑しい職分にゐるが、長く人に使はれてゐる者ではないぞ』と申しました。

さてその婚禮の日となりましたが、貧しい藤吉郎の家故壘は破れて居り盃は缺けてゐるといふ具合に、大そうみすばらしいものです。

この時犬千代は、こつそりと考へて、

（ああしてふたりが結婚したのも、實はわしのことがあるからだ。それにああまで貧しい暮らしでは、すぐに別れるに違ひない。さうしたら、その時こそ、うんと文句をいつてやらう）

と、その時を待つて居りますと、どうしてどうして、藤吉郎夫妻は、實に美しく仲よく暮して行きます。そこで犬千代も始めてふたりの氣持が分り、しまひにはふたりに、自分の醜い心持を話して、わびを申しました。

藤吉郎はそれから大へんな出世をして秀吉となると、この奥方を北きたのまんどら廳と呼ばせました。

秀吉はそれから後淀君を愛しましたが、それでも淀君は別のところにをき、奥方に對しては始終、かはらぬ愛情を持ち續けたのであります。そして北廳もいろいろと秀吉の爲め一家のことを計り、いつも秀吉に、

『どうぞ、貧しい頃のことをお忘れあそばさぬよう』といひいひしました。

秀吉が薨じると、髪をきつてその菩提をともらひ、また秀頼は淀君の子でしたが、まるで自分の子のやうに可愛がり、家來たちにもいろいろと指圖して、よく仕へさせました。

## 阿濃津の城

阿濃津の城を、富田信高のぶたかが守つてゐると、毛利秀元や吉川廣家ひろけが攻めて來ました。

この時城の者は、城の隅にあつた堂を焼き捨てましたところ、風向きが急に變つて、城いっばいが煙で包まれました。



敵はこの有様を見て、それつ、とばかりに、攻めかけて来ました。そこで信高は、城を出で、槍をふるつて、さんざんに戦ひましたが、と見ると、みめかたちの美しいひとりの男が、鎧かぶとはでやかに着こなし、槍をさげてやつて来て、信高の前に立つて、こちへ向つて来る敵兵を、刺し殺しました。

この時の戦は、やつと味方の勝ちとなつたので、信高が城の門を入らうとすると、その者がやつて来て、

「御前には、御無事でございましたか。わらはは、御前が討死あそばしたと聞きましたので、急いで出て参つたのでございます。わらはは女ではありませんが、なんで男の方に劣りませうや」と申しました。よく見ると、その者こそ信高の奥方だったのであります。

信高は大そう喜んで、共々城に入り、さて

『けふの勝は、みなそなたのお蔭ぞ』といひました。

信高はその後毛利方と和睦し、やがて徳川氏が天下をおさめるやうになつた時、伊豫の宇和島の藩主にされたのであります。

## 第四友愛

惠順  
弟は兄に従ひ  
くしむ

兄弟は、ひとつの體、ひとつの手足であります。年上年下の順序や、惠順の區別はあつても、お互ひに仲よくむつまじくし合ふ理にかはりはありません。この理をおもひ、この情合を考へて、一生仲よく暮しあふのを兄弟の道とし、夫婦の仲むつまじいことの次ぎに、これを人のみちの大義といたします。

教育勅語「兄弟ニ友ニ」

### 億計王と弘計王

第二十三代顯宗天皇は、はじめ弘計王と申されました。

第二十四代仁賢天皇は、はじめ億計王と申された。そしてこのおふた方はいづれも、第十七代履中天皇の御孫、市邊押盤皇子の御子たちで、億計王は兄君、弘計王は弟君であります。

さて、第二十一代雄略天皇には、押盤皇子を殺されたので、御兄弟には、播磨國にお逃げになり赤石郡の縮見屯倉首忍海部細目といふ者の家の、召使に身をやつし、おふた方ともに、丹波小子と名乗つていられました。



やがてのこと、第二十二代清寧天皇には、御位をおゆづりあそばす御儲嗣のあらせられぬことを御心配になつて居られました。その時、播磨國司伊與來目部小楯が、新嘗の供物をあつめに、赤石郡に来て、細目の家に泊りました。

この時弘計王が、億計王に向つて申されるには、

「自分たちが、難をさけてここに來てから、もう數年経つてしまひました。身分をあかし、名のつて出るのは、今夜が丁度よろしうございませう」と。すると億計王には、非常に悲しげな面持で、

「名乗り出て殺されてしまふのと、かうして身を忍ばせて無事にゐると、どちらがよからう」と仰せられました。

この時弘計王には、

「自分たちは、去來穗別天皇の孫でありながら、長いあひだかうして召使となつて居りました。この上は立派に名乗り出て、殺されるものなら、殺された方がよろしいでせう」とお答へになり、御兄弟互に抱きあつて、泣かれました。やがて億計王には、

「それは、そなたでなくては出來まい」と申されましたが、弟君の弘計王は、何度となくお断はりになり、それでも御兄君からすゝめられた時、やつと御承知あそばしたのであります。

さて、細目はあふた方に（燭をつけるように）と命じ、かうして夜おそくまで酒盛がつづきました。やがて家人にいひつけて、舞など舞はせました。

この舞が終つた時、細目は、その夜の客人小楯に申すやう。

「ただ今燭をつけた者の様子を見て居りますと、立居振舞に決して出過ぎたところがなく、誠に君子と申しても恥かしくないものであります」と。これを聞いた小楯は、絃をとつて彈じ、あふた方に舞ふやうにと命じました。

御兄弟はしばらくのあひだお互ひにお譲りあひになつて居られました。

それと見た小楯は、

「なぜ早く舞はぬのか」と、叱りつけました。そこでまづ御兄君の億計王がお舞ひになり、ついで御弟君の弘計王が舞はせられましたが、この舞は宮中の特別のもで、そして、

「われらは皇孫ぞ」と仰せ出されたので、小楯はびつくりして、急いで席をすべり下りてあふた方を拜し、家來たちにいひつけて、いろいろとお仕へ申しました。それから、郡民に命じて宮を建ててそこにお移し申しあげ、急いでそのことを天皇に奏上いたしました。

天皇には、大へんにお喜びあそばし、

「天博愛ヲ垂レ、賜フニ二兒ヲ以テス」

と仰せられ、大臣大連たちに御相談の上、あふた方を迎へて宮中に入れ、御兄君億計王を皇



太子、御弟君弘計王を皇子になされました。その後天皇が崩御になると、億計王には弘計王に皇太子の位をお譲りあそばしましたが、弘計王には、ひたすらこれをおことはりあそばしました。

そこで飯豊青皇女が、忍海角刺宮で政治をおとりになりましたが、やがておかくれあそばしました。

さてその時大勢の官人が集まり、いろいろと御相談申しましたが、皇太子には、璽をとつて皇子の御前に置き、禮拜の後、臣下の座にをさがりになった上、

『天子の位には、功のある者が即かねばならぬ。今日からして居られるのも、みな弟の功によりてである』

と申されました。でも皇子には、ひとへに御辭退あそばして、

『先帝には、御位を見宮にお傳へんとおぼし召され、立てて皇太子となされたのです。わが今までにして来たことは、みな見宮の御爲めでありました。兄弟の順をなくし、弟の道を破るのは、弘計には出来ぬこととござりまする』と申されました。

皇太子にはこれに對して、

『先帝の自分を皇太子となされたのは、自分が兄だからである。弟宮こそいろいろと今日のあ

るやうに功をたてられ今日では誰も彼も、みな尊敬し、なつてゐる。自分が兄だからとて功のないからには位を即ぐべきではない。さうしたら、必ず後悔することとならう。天子の位を長くあけてをいたり、また天命を拒んだりすることは出来ぬと聞いてゐる。この上は一

刻も早く皇位について、國家を安らかにしてくれやすやう』と、涙を流して申されたので、皇子にはやうやくに天皇の御位におつきになりました。第二十三代顯宗天皇であります。

そして、この天皇が崩御になつた時、億計王には、はじめてその後をついで天皇の御位におつきになりました。第二十四代仁賢天皇であります。

### 和氣清麻呂の姉

和殿廣蟲は、備前國藤野郡の人で、清麻呂の姉です。貞節順良なところ、申分のない人で第四十六代孝謙天皇に仕へて、厚い御恩をかうむつて居ました。

天皇が御出家あそばした時、廣蟲も髪ををろして、法均と名乗つたのです。

清麻呂か道鏡にさからつて、流された時、法均も備後に流されましたが第四十九代光仁天皇が御位にお即きあそばした時、召しかへされて、正四位上のお位をいただき、典侍となりました。

典侍  
天皇に供奉し  
て、いろいろ  
宮中の儀式そ  
の他のつかさ  
さしともしふ  
さいともしふ



法均の弟清麻呂に對する友愛はその頃天下の人みなが、褒めたたへました。

## 泰時と朝時

北條泰時は、友愛の情厚い人でした。

ある時評定所で事務をとつてゐたところ、弟朝時の屋敷が、敵に囲まれたと聞いたので、すぐに出向いて、弟に加勢し、これを救ひました。

そして歸つて來ると、平盛綱が諫めていふには、

『あなたさまは、天下の爲めに、もつと御自分の御身を大事にあそばさなくてはなりませんね。輕々しく戦にお出向きになるなど、よろしくありません。賊が起つたとしても、まづよく考へて、その滅ぼすてだてをなすべきで、御命令を下されたら、わたくし盛綱たちが出かけて、屹度も間に合はせいたします。今日のやうですと、またいろいろと非難を受け、大へんな禍が來ませうぞ』

その時泰時が答へて、

『人にとつて、親身は實に大切なものだ。弟を殺さうとする者があるのに、その弟をぢつと救はずにゐたら、それこそ世間はなんといふだらう。これこそ非難を受けることではないか。朝時が賊に圍まれたからとて、他人にとつてはなんのこともなからう。でも自分として、こ

れ程の大事はないのだ』

この話を聞いた朝時は、一そう兄を敬愛いたしました。

## 毛利元就と子たち

元龜二年〔紀元二二三一年〕の六月のこと。

毛利元就は、病がおもひ、もう死を待つばかりになりました。するとその時、子どもたちを枕邊に集め、まづその數だけの矢を持つて來させました。それからその矢をひとつに集めて後折らせましたが、なかなか折れません。

そこで今度は、一本ぬいて折らせると、すぐに折れてしまひました。その時申しますには、

『兄弟といふものは、丁度この矢のやうなものだ。一つしよになれば互ひが強くなれるが、ひとりひとりに離れば、こんどは實に弱い。お前らこのことを忘るるでないぞ』

この時、二番目の子小早川隆景が進み出て申しました。

『兄弟の中の争ひと申すものは、とかく慾から起ります。ですから、慾を捨て、義を思ふなら決して争ひなど起らぬと存ぜられます』

すると元就は大そう喜んで、他の子供たちを見ながら、

『その通りである。忘れるでないぞ』といつて、やがて死にました。



その跡を孫の輝光がついだ時、吉川元春と隆景は仲よく心をあはせ、一心に輝光を助けて大敵を破つたので、このふたりが死ぬまでは山陰道、山陽道の十三ヶ國にまたがつてゐた領地はすこしも敵に犯されませんでした。

吉川元春は、小早川隆景の兄であります。

## 第五信義

人が、身を立て道を行ふには、どうしても友だちのたすけがなくてはなりません。故に、いち度友だちとなつたからには、お互に肚のそこまで明かし合つて、忠告し、いゝ方へ導き合ひ、苦しい時は助け、損得づくで仲たがひなぞせず、はじめから終りまで同じやうでなくてはなりません。これを友だち仲の信義といつて、五倫の中の大切なひとつで、ひとと交はる道であります。

教育勅語「朋友相信ジ」

### 藤原忠平の信義

藤原忠平は時平の弟であります。大そう慈悲厚くまた友だち思ひの人で、とりわけ菅原道真

と仲よくして居りました。

道真が、時平のため遠く筑紫の太宰府に追ひやられてしまひました時、

忠平だけは、始終遠く筑紫まで使を送つて、道真を慰めて居り、

(兄と仲の悪い人だから)

といふやうなことで、友だちにそむくことはありませんでしたので、人々はみなそれを褒めたたへました。

### 鹽をおくる話

武田信玄の領してゐた甲斐國では、始終鹽を海沿ひの東海道方面の國々から、買つて居りました。

さうかうするうちに、今川氏真や北條氏康と戦ふことになると、氏真と氏康は相談して、少しも鹽を送らぬやうにしてしまつたので、甲斐の人たちは、大そう困つてしまひました。

この時上杉謙信も信玄と戦つてゐたのですが、早速書を送つて、

『氏真や氏康が、貴國に鹽が送れぬやうにして、貴公を苦しめてゐる由ききました。これは實に卑怯なやり方であります。自分は貴公と戦つてゐるが、それは弓矢の上の勝負で、決して食糧の道を絶つて、相手方を苦しめようとは思ひません。だからこれからは、鹽はわが國



から買はれたがよろしい。いか程でも御用立いたしませう』  
と申し入れ、そして商人に命じて、決して値をふだんよりあげぬやうにさせました。

### 羽柴秀吉と荒木村重

羽柴秀吉は、荒木村重と大そう仲よしでした。たまたま、織田信長は讒言を信じて、村重を殺さうとしたので村重はたうとう謀叛するやうな破目に陥つたのです。

その時秀吉は、(事はみなある者の讒言から起つたのだ)と知つてゐたので、信長に願つて村重のところに行き、

(謀叛の企をやめるように)としきりに説きすゝめました。それでも荒木方はもう、止めるにも止められぬこととなつて居つたのです。

するとその時、村重の家來河原林越後といふ者が、

『この際秀吉を殺して、信長の力を弱めませう』と申し出しました。でも村重は、

『そなたのいふ通りにすれば、たしかにわが軍の利益とならう。だが、秀吉と自分とはもう長いあひだ互ひに信じ合つて來たのだ。今後は、わが荒木家がちよつとのところで亡びようとするのを悲しみ、その上ならず、わしが決してそんなことをする筈がないと信じて、態々諒めに來てくれたのだ。むかしから、窺鳥懐に入る、之を殺すに忍びずといふ。ましてや友だ

ちの信義を重んじて來てくれた者を、驅し討に出来るものか。若しこれを殺すやうなら、鳥獸とりひものにも劣ることにならう』

と答へて承知せず、秀吉と酒盛して仲よく語りあひ、秀吉が歸る時は、手をとり合つて遠くまで見送り、お互ひに別れを惜しみました。

### 黄金二百枚

豊臣秀次は、大名の中に金がなくて困つてゐる者があると、そつと貸してやり、これで大名たちを味方にしてをさいざといふ時には、加勢して貰はうと心がけて居りました。

細川忠興もかうして、この人から黄金二百枚を借りたのであります。

秀次はその後罪を得て、自殺してしまひましたが、いろいろと調べてゐるうちに、秀次から金を借りた者まで、罰せられることになりました。そこで、秀次の會計の役人が、細川家に来て、

『どうぞすぐに金をお返へし下されたい。さすれば、請取の證書を破りすてませう。萬一お返へし下さらぬと太閤の奉行に申しあげるより他はございません』と申しました。

太閤とは、御承知の通り秀吉のことでありませう。

さあ、細川忠興も、はたと困つてしまひました。そこで、主だつた家來たちを集めて、いろ

秀吉の姉の子  
で後に秀吉の  
養子になりま  
した



いろと相談をすると、家來のひとり松井康之が進み出て、

「わたくしは、徳川内府の御家來本多正信と親しくして居ります。よつて本多に頼んで、内府に御相談いたしませう。内府は信義に厚いお方ですから、まさか見殺しにはなされないと思はれます」と申しましたので、忠興も同意しました。

(内府とは、徳川家康のことです)

さて、家康はお傍の者を遠去けてから、いろいろと譯をきき、やがて本多正信に辛櫃をふたつ開けさせました。櫃の中には、それぞれに黄金百枚づつ入つて居つたのです。

そこで家康が申されました。

「櫃になんと書いてあるか、見るがよい」と。正信が答へました。

「二十年前に、わが君が三河におらせられる頃、貯へられた旨、書いてござります」と家康は、

「凡そ金錢を扱ふには夫々會計の係があるが、わしはこれを、長いあひだ自分の手許にしまつてをき、何か内密で入用の時用立てようと思つてゐた。それが今やつと役立つて、このやうに喜ばしいことはない」と、自分自身でその二百枚を康之に下されました。

康之は大へんに喜んで、

「これでやうやく、滅びようとした主家も助かりました。この御恩を、どうして忘れませう。早速金を本國から取り寄せて、お返し仕ります」と申しあげると、家康は、

「それは、やめた方がよからう。今度のことが世間へ漏れたら、細川家にも徳川家にも、禍とならうと」おとめになつたので、康之は厚く御禮を申しあげ、伏し拜んでから退出いたしました。

## 臣の職分

徳川秀忠は、いつも行ひをつつしみ、いち度法令を出した以上は、まづ自分から固くこれを守るといふ人でした。

鷹狩に出る度に、休みの時間が切れるとそれがお食事最中でも箸をおいて、すぐに立ちあが





るといふ風だったので、ある時仕へてゐる者がお食事の終つたのを見てから時を知らせることにいたしました。

それを聞いた伊井直孝は、その近侍を呼んで、次ぎのやうに訓へました。

『お身たちは、御奉公の道をわきまへぬ者じや。君に人道をおすすめるのは、臣たる者の職分ぢやぞ。このたびのことは、君をお喜ばせ申さうが爲め、わざと偽をなした譯で、その罪は實に大きい。凡そ法令と申すものは、いち度それが定まつたからには、山が崩ればとて勝手に動かしてはならぬ。信が重いからぢや。一體民共は、君とは離れて居るもの故、若しお傍近く仕へる者が君をお騙し申したとしたら、人民共はその偽が君のお心であると思ひこみ、決して、君の正しい行を御好みの事は分からね。このやうなことを相成つたなら、君と民の心は放ればなれになり、その隙によからぬ奴が陰謀を企てることと相成る。これからは、よくつつしみますよう』にと家來共にいひきかせました。

## 徳民の徳

細井徳民は、尾張に生れ、ひとに盡す志の厚かつた人であります。

江戸に來るやうになつた時、友だちの小河、飛鳥のふたりが、いづれも妻子をつれて一しよに住むこととなつて、丁度四年間も、三つの家族が暮りましたが、小河の者も飛鳥の者も、徳

民の父君、正長につかへること丸で自分たちの父のやうであり、徳民とも兄弟のやうでした。

その上、三つの家族の妻たちも、お互ひに姉妹のやうに仲よくして居りましたので、近所の人々は、てんでが他人同士だとは夢にも思はず、正長のことを、

（三人の賢い子ども、三人の淑やかな嫁、三人のをとなしい孫たちにあのやうに、大事がられてゐる御老人は、なんとといふ幸な方だらう）と評判し合ひました。

小河、飛鳥が別居してから、まづ小河の主人が死にましたが、徳民はこれをまつること、丁度家の者のやうでした。

飛鳥の主人も死にましたが、矢はり小河の時のやうでした。そして、遺族の行くところがなかつたので、家に引きとつて養ひましたが、後になつて、その女のためにいろいろと道具を買ひととのへて、嫁にやりました。

小河の子どもも徳民の家で育ちましたが、成人した時、尾張藩の儒官にすすめました。

この他、遠方から來てゐる塾生で、死ぬ者があると、長いあひだにはその墓が分からなくなるといけぬと思ひ、お金をあつめて石碑を立て、それへ死んだ者たちの名を彫りつけさせましたが、その名は數十人に及んださうであります。



## 第六勤學

人には夫々に、天から授けられた徳性といふものがあります。でも、學問をせずには自分から人の道がわかるものではありません。必ず、先生や先輩について學問をし道を知り行ををさめ、その徳をみがかねばなりません。先生につかずに、自分の才分だけをたのみにしてゐると、徳をそこなひ、事に失敗をしてしまひます。これでは、どんな小さな事柄でもなし遂げることは出来ません。ですから、學問の道にはげむのは、自分を立派なものにし、事業をしとげる基となります。

教育勅語「學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ知能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ」

### 書物の渡來

第十五代應神天皇の十五年（紀元九四四年）の八月、百濟の國王は、阿直岐といふ人に、良馬二匹を持たせてわが國によこしました。

この人は偉い學者だつたので、皇子稚郎子には、この人に就いて御勉強あそばしました。その時天皇は、阿直岐に向はれて、

孔子とその弟子たちのことか書いた書

違つた字一千二百四十四の句本てある支那の

支那宋時代の大學者朱子の學問處士に仕へずらるるむら官に仕へずらるるむら家に仕へずらるるむら

「汝が國ノ博士汝ヨリ賢レル者アリヤ」とお訊ねになりました。すると「王仁と申す者が居りますが、國第一の學者にござります」とお答へ申しあげたので、天皇には、荒田別をわざわざ百濟の國へ王仁を迎へにおつかはしになりました。すると翌る年に王仁が來て、論語十卷と千字文一卷を献上いたしました。そこで皇子が、これらの御本で御勉強をおつづけになりました。わが國の學問は、この時からはじまつたのであります。それから後にも百濟は、たびたび學者をわが國によこしました。

### 後光明天皇の御勉強

第一百代後光明天皇は、御賢明でいろいろのことを知つておはしまし、深く程朱の學をおさめ、始終、處士朝山素心をお召しになり、その講義をおききになられました。

また、文章にお達者で、藤原肅の文集に、御序文をお書きあそばしました。文學の道に功勞のある者を、おほめ下さる有がたい大御心からであります。

さて、天皇は、雷が大そうお嫌ひであらせられました。いち度謝良佐の書いた「性偏ニシテ克チ難キ所ヨリ、克チ將チ去ルベシ」といふ文を御讀みになつて（あのれの私情にうちかつ法はここにある）







伏兵にさとられぬやうに隠してなく軍勢

つて居られぬ」と申しました。

供の者がこれを聞くと、大そう怒つて、このことを義家に知らせました。すると義家は、(それが本當のことかも知れぬよ)といつて、匡房が屋敷から出て来るのを見ると、まづ丁寧に敬禮してから、弟子となつて一心に學問をいたしました。

それから後、清原武衡が金澤の柵にこもつて謀叛した時、それを攻めに向ひましたところ、柵へ數里といふところで、折しも空を渡つてゐた雁の列が、急に亂れるのを見ました。その時義家は、

『屹度伏兵がゐるに違ひな』

といつて、そこらを搜がさせると、果たして隠れてゐたので、討つてとりました。

この時義家は他の者に向つて、

『兵法に、「鳥亂ルル者ハ伏ナリ」とあるから分かつたので、若し學問をしてをかなかつたなら本當に危いことであつたよ』と申しました。

### 火事より讀書

林忠は、一名を信勝といひ、羅山と號して居りました。京都の人であります。

幼い頃から伶俐な人で、學問に熱心でありました。年十八の時、人たちを集めて程朱の學を

講義して聞かせた程ですが、その後藤原肅について勉強をし、一そう學問が進みました。そしてやがて幕府に仕へました。

年とつてからも、眼も耳も決して衰へず、その勉強の仕かたといつたら、若い者そつくりでありました。

七十を越してから、二十一史に解釋をつけようとしたが、その仕事が終わらぬうちに死なれました。

その死ぬ五日前のこと、近所に火事が起つて、羅山の家に燃えうつりさうになりました。そこで弟子が、そのことを知らせると、羅山は、書を読んで居りましたが、ただ頷くばかりで、讀むのをやめようともいたしません。

やがて弟子が、

『火は一そう近くなりました』と知らせた時、讀みかけてゐた書を持つて、始めて駕籠にのり別荘に避難いたしました。しかもすぐに讀みつづきを讀む様子が、ふだんと少しも變つて居りませんでした。

### 大日本史を編む

徳川光圀は、頼房の子であります。生まれつき氣性するどく、學問が好きでした。

支那の書で、その名をあげると、史記、漢書、後漢書、三國志、晉書、宋書、南齊書、陳書、魏書、北齊書、周書、隋書、南史、北史、唐書、五代史、宋史、七史といひ、これを金史、元史、明史、清史といひ、加へると、二十一史といひます。



昔から残る歴史の書物の文章の中にいろいろとかけた文句のあるのを歎き、彰考館といふのを設け、名高い學者をまねいたり、朝廷に奏聞して御裁可を請ひ奉つて、御所の尊い御本をお借り申したり、天下の偉れた書籍を集めたりして、代々の御代の歴史をあみましました。

かうして出来あがつたのが『大日本史』で第一代神武天皇から第百代後小松天皇までの御事蹟が、書かれてあります。

文化年間〔紀元二四七〇年頃〕に子孫治紀が、これを献上いたしましたところ、お褒めの言葉を下されました。

その治紀の孫の齊昭が始めて印刷して世間にひろめました。

光圀がこの書をあみはじめてから、代々の子孫が、その仕事をつつけたのであります。

### 貝原益軒のこゝろ

貝原篤信は號を益軒といひ、筑前の産れで決してえらがらぬ、徳の高い人でありました。

年若い頃京都に行つて學問を積み、その物しりなことで、名高くなりました。本を著すことが好きで、年とつてからも一そう勉強し、その著書は、百冊以上になつて居ります。

この人の本は、大ていやさしく書いてあるので、子どもや、婦女たちにもよく分かつて、喜ばれて居ります。

著書の中の『慎思録』といふのに、魏の胡昭といふ人が、年八十になつても、まだ勉強をつづけてゐた話をのせて、

「吾雖老耄亦日夕手不釋卷矣。是爲可企及」と書いて居ります。

本當の氣持であります。

### 正月を知らぬ徂徠

萩生茂郷は總右衛門といふ名で、號を徂徠と申しました。

江戸の人で、負けぬ氣の幼い頃から大望を抱いて居りました。

父君の方菴といふ方が、醫者で、幕府に仕へて居られましたが、延寶年間〔紀元二三三三年以後〕にふとしたことで上總に流されました。

そこで、茂郷も一しよに上總に行つて、十三年間といふもの、田舎家に育ちました。かうした土地だけに、書物もなく、先生もありませんでしたが、荷物の中にただ一冊あつた『大學諺解』によつて色々勉強し、その後父君が赦されたので一しよに江戸へ歸つて來た時は、その學問は大へん進んで居りました。

それから後、柳澤家に仕へて、祿五百石をいただくまでになられました。その學問上の知



識は實に立派なもので、議論といひ文章といひ、世の人たちから、あがめ尊まれました。  
若い頃兵學を學び、柳澤家に仕へたのも、その兵學によつてで、決して學者としてではありません。

ふだん書物を讀んで夕方になると、縁さきに出て讀み、やがて讀めぬほど暗くなると、家にはいつて燈の下で讀みつづけました。このやうにちよつとの時間も惜しんで、勉強しました。  
ある時、弟子の服部元喬が、一月一日なのでお伺ひすると、茂郷は丁度机に向つて孫子を讀んで居りましたが、その様子といへば、肌は垢だらけ髪は伸び放題で、てんでお正月だといふことを、知らぬやうでした。そして元喬を見ると、盛んに兵學のことを話すので、元喬はたうとう、新年のお祝ひを申しあげずに、歸りました。

### 目あきの不便

瑞保己一は、武藏の國兒玉郡保木野村の人であります。

幼少の頃眼の病氣で盲になつてしまひました。十五年の時江戸へ出て來て、兩富といふ人の家にゐて、三味線や歌と一しよに鍼の治療などをならひましたが、この方はあまり上手にならなせんでした。

大好きなのは、昔の本を讀むことで、手にはいる毎に人に讀んで貰ひ、ひとつのことを聞くと、人に頼んで調べて貰ひました。かうして聞いたことはすべて暗記し、たうとう、文字がわかるやうになりました。

そこで萩原、川島、山岡といふやうな多くの先生について、支那の本を習ふやら、わが國の書を學ぶやうにいたしました。さうしてゐるあひだに、一心になつて律令を調べました。

二十四の時、加茂真淵の弟子となつて、一そう熱心に、わが國の學問にはげみ、およそわが國の歴史、律令、格式から、歌書や物語やその他のいろいろな書物まで、あらゆる暗記してゐないのではない位でした。そこでやがて、和學講談所といふのを開いて、人たちに教へはじめると澤山の弟子が參りました。

保己一は、若いころから、『群書類從』を編んで居りましたが、四十五年間かかつて、一千二百七十部、六百七十巻を印行し、續篇の一千八百部も、つづいて出來あがりました。兩方で三千七十部であり、わが國の古書を、夫々の區分した部類にわけたものであります。

ある夜保己一は、『源氏物語』をある人に講義してゐると、風が吹いて來て、あかりを消してしまひました。

そこで講義をさいてゐた人が、

『どうぞ暫く、お講義をお待ち下さい』と申しました。

『どうしたのですか』と、保己一が訊ねますと。

律令の格式  
規期  
むかし  
格式  
人たちの身分  
そのほかの  
められた儀式  
物語  
ものがたりを  
書いた草紙

この巻の「後  
光明天皇の御  
勉強」を御覽  
下さい



「風であかりが消えてしまつたのでございます。ただ今、點けますから」といふと、保己一は笑つて、

「はてさて、眼のあるお方は、不便なものだ」と申しました。

## 第七立志

およそ人の徳をあげ、事業をなさうといふには、まづ志を立てなくてはなりません。志をしつかりと立て、途中でかへたりなどせず、つとめてはげめば、はじめは大きな望と思はれることでも、達せられるものであります。志がふわふわしてゐて、徒に成功しようといふのは、丁度、種を撒かずにとりいれをしようとするやうなもので、出来る筈がありません。故に志を立てることは、徳をみがき事業をなし遂げる大本であります。

## 日本武尊

第十二代景行天皇の四十年〔紀元七七〇年〕の六月に、東夷が叛きました。

そこで天皇には、大勢の臣下をお呼び集めになつて、

「孰カ能ク之ヲ平グル者ゾ」と仰せ出だされました。

でも、誰ひとり、お答へ申しあげる者もございません。

その時、日本武尊には、

「臣は、先ごろ西方の賊を平げて参りました。この度の征伐には、きつと大碓皇子がお出でになられるであります」とお答へあそばしました。でも、大碓皇子には、これを聞かれると、驚いて隠れておしまひになつたので、日本武尊には、元氣よく、かう仰せになりました。『熊襲が平らげてまだ何年も経たぬのに、またしても東夷が叛きました。これでは、いつになつて天下が太平になるのか分かりませぬ。臣は、決して骨をしみはいたしませぬ。どうぞ、臣をおつかはし下さりませ』

そこで、天皇には、親しく御言葉を賜はつて、日本武尊をおつかはしあそばされました。

かうして尊はお出立になりやがて東夷を平らげてのおかへり道で、近江國の膳吹山に差しかかる毒霧にあたり、おからだに痛みをお感じになられました。そこで、しみじみと

「自分はいつも、空でも平氣で飛べる程の氣持でゐたのだが、今は歩むことも出来ずなつた』

と仰せられ、杖をついてやつと歩まれ、伊勢の能褒野まで來られたが、御病氣がますますひどくなられたので、連れて來た捕虜を伊勢神宮に獻じ奉り、それから吉備武彦をみやこにつかはして勝利を告げさせられて後、間もなく薨せられました。

近江と美濃の二國にまたがる高山

伊勢國鈴鹿郡の伊勢川の北岸の鈴鹿の名



## 櫻に書く忠義

兒島高德は、後醍醐天皇が、笠置におはします頃、

(どうぞ兵を起して、天皇の御爲めにおつくし申しあげたいものだ)と思つて居りました。

そのうちに、笠置の假宮も賊兵に攻めとられたので、天皇には、西の國に落ちさせ給ふこととなつたのであります。

高德は、一族をあつめて、天皇が西に落ちさせられる途中、御駕を迎へ奉り、その上で義兵をあげようと舟坂山ふねさかにのぼつて、御行列を相待ち申しあげてゐると、

船坂國赤穂郡  
山坂村にある

(お行列は山陰道の方に向はせられる)

と聞いたので、近路を、急いで美作國杉坂すぎざかに行くと、お行列はもう、お通りになつてしまひました。

これを知つた兵たちは、ちりぢりばらばらに、散つてしまひました。

高德は、

(どうぞして自分のこの氣持を、天皇のお傍近くに、お傳へ申しあげたい)

と思つて、姿をかへて、數日のあひだお行列の後を追ひまゐらせたが、なかなかいい折が得られません。

そこである夜のこと、そつと、御館に忍び入り、櫻の木を削つて白くし、そこへ、

天莫アマ空ス勾踐コトツツ時非トキ無ニ范蠡ハシ

と書きつけました。

ですが、番兵たちには、この意味の分かる者が居りませんので、天皇に申しあげると、その意味をお汲みとりになつて、天皇にはひそかに喜びあそばしました。

かうして、天皇が伯耆國の船上山ふねのうへにいらせられる時、高德は父の範長のりながと一しよに、身内の者をひきゐて、御加勢に參じたのであります。

## 暹羅に輝く武威

山田長正ながまさは仁左衛門と申し、伊勢の神主の小者とも、尾張の國の人ともいはれます。

家業をさらつて、戦の眞似ごとばかりして居り、かうして成人した時は、大そう零落してしまつて、やがて駿府に住むやうになつたのです。

これは元和のはじめ頃(紀元二二七五年頃)のことで、もう天下はおさまつてしまひ、侍となつて主どりをしようにも、あたまを下げぬとなかなかいい雇ひ主が見つからぬといふ有様でした。



長正には、さうした真似は出来なかつたので、

(もう、日本の國內では、功名を立てることは出来ぬ。でも外國へ出かけて行つたら、きつと面白いことがあるだらう)と思ひました。

その頃はまだ、外國へ勝手に行けたものですか  
らまづ、長正は、商人の船に乗つてはじめは臺灣  
に行き、それから更に西方の、暹羅に渡りました。

すると丁度この時、暹羅はまわりの國々と戦争  
の最中でしたが、六昆といふ國がいちばん強く、  
暹羅の國王は、軍隊を出しては、いろいろと苦心  
して防いで居りました。

長正が、暹羅の軍隊をひと目見ると、少しも規  
律といふものがないので、

(この軍隊は、きつと負けるぞ)と申しました。  
果してその通りでした。

暹羅の國王は、長正が先きにそのことをいひ當



てたのを、大そう不思議に思ひ、長正を招いて、六昆軍を防ぐ軍隊の大將としました。そこで  
長正は、計略を用ゐて戦ひ、敵をさんざんに打ち敗つたばかりでなく、にげるのを追つて、ひ  
と息に六昆の都まで征め入り、たうとう六昆王を生捕りにして凱旋いたしました。

さあ、長正の名は、そこら中に響きわたりました。そこで今まで暹羅と戦争をしてゐた國々  
は、われもわれもと暹羅の機嫌をとりはじめるやうになつたのであります。

そこで、國王は大そう喜び、たうとう長正と自分の王女とを結婚させ、長正に六昆と匹家留  
の地を與へた上に、唵普良アンプラといりました。唵普良といふのは、諸侯王といふ意味でありま  
す。

さうしてゐるうちに、國王は年をとられて政治をとるのに骨が折れて來たので長正をその代  
りといいたしました。

## 丈夫の心

細川忠利が十五になつた時、父忠興は、

「男子が十五になると、はじめて丈夫といふのだ。そなたは今丁度さうなつたのだが、その丈  
夫とはどういふのか、存じ居るか」と訊ねました。

「丈夫は、病氣で死ぬようなことのないものであります」



『では、士卒のかしらとなつたら、どうする』

『士卒の先きに立つて、進みまする』

『國の領主となつたらどうする』

『民に衣食住の苦勞をさせぬようしてつかはしまする』

この時、忠興は、思はず感心して、

『わが見ながら、これはわしよりもよく出来て居るわ』  
と、つぶやきました。

忠利は、後に細川家をつぎ、肥後國の領主となりましたが、自分の領主加藤清正の残した業をうけついで、いろいろ農業をさかんにしたり、すぐれた侍たちを呼んで、強い國にいたしました。

そうして鳥原で、戦亂がおこり、それを攻めるように申しつかつた時は、士卒のまつさきに立つて、賊兵どもを攻めたてました。

かうして、死ぬ時まで、十五で父にいつた言葉通りに、ふるまつたのであります。

## 蕃山の入門

熊澤伯繼は、助右衛門といひ、號を蕃山と稱しました。京都の人であります。

中江原の學問と人徳を慕つて、なんとかして弟子入りをしようとしたが、藤樹は、

（自分は決して、ひとの先生になるほどの人間ではないから）といつて、どうしても、弟子入りを許しません。

それでも蕃山は、仲々あきらめず、そのまま、ふた晩も藤樹の家の軒下に寝て、弟子入りを頼みました。

それを御覽になつた藤樹の母君が、

『はるばる遠くからおいでになつて、ああまで頼んでいられるのぢや。そなたにしたら、今まで自分のならつて来たことを、ひとにお傳へするまでのことだから、何もそなたがひとの先生になり、ひとにものを教へてゐるといはれることもありませう。兎にかくいち度、會つてあげなれ』

と申されたので、藤樹はやつと、蕃山に會つたのであります。

かうして、蕃山は藤樹の弟子となり、大學者となりました。

## 新井白石の勉強

新井君美は、白石と號します。江戸の人で、幼少の頃から、大それた伶俐でありました。



はじめ父君と一しよに、土屋家に仕へて居りましたが、二十二の時に、父君のふとした罪を犯されたのに捲きぞへを喰つて、土屋家を追はれてしまひました。

その時、しみじみ、(男と生まれて。浪人で一生を終つてしまふ程なら、死んで地獄の鬼となつた方がましだ)と考へ、それからといふもの、一心に學問をはげみました。

そのうちに、河村といふお金持が、白石を見込んで自分の娘を嫁入らせようといたましたがつが、どうしても承知しないで、貧しいことなど平氣で、苦學して居りましたので、大へん物しりになりました。

そこで堀田家に仕へるやうになり、その後木下貞幹の弟子となつて相變らず勉強をつづけて居りましたので、段々に有名になつて來ました。それでも、わけあつて堀田家をやめる時は、家にはわづかに、錢三百文と米が三斗ある切りといふ、貧乏ぶりでした。それでも平氣だつたのです。

たうとう幕府に認められ、召し出されて従五位下に叙され、筑後守とまでなられました。幕府に、政治向きのことでもいいことを申しあげて居られます。

著書の數は、書き終らなかつた分も加へると、百六十餘種にもものぼつて居ります。これでも、白石の勉強ぶりが分かるではありませんか。

## 第八 誠實

物ごとに對し偽のないことは、人の心の根本で、あらゆる行はここからはじまります。かりにも嘘いつはりをいふ時は、その人にどれ程の才分や智慧があつても、なんの足しにもなりません。故に一言一行、自ら自身にやましくないやうに、そして身持を正しくしないでなりません。誠實といふことを片時も忘れてはいけないわけであります。

### 北斗に祈る

第七十一代後三條天皇が、まだ皇太弟でおはしました時、威尊と申す坊さんが、

『殿下には、いつも北斗を拜してゐらせられますが、どういふわけでございますか』とお訊ね申しあげました。

その時皇太弟には、

『自分は、月にいち度は、きつと北斗をおがむ。でもこれは、早く皇位につくやうにと祈るのではない。でも時々、位に即いたならああもしよう、かうもやらうと思ふことが、なくもない。そしてさうしたことを思ふこそ、この上もなく不忠であるから、北斗をおがんで、そ

天皇の御弟で  
皇位につが  
給ふべき御方  
星座の支那名  
で、北の天に  
丁度斗のやう  
な形してゐる  
ひまつ星をい  
ひます







その目代の荒した仰勢沼田御厨は、召しあげてしまひました。

さて重忠は武藏に歸りました。

すると梶原景時が、そのひまに、いろいろと讒言して、

「重忠は、この間のことを怨みに思つて、自分の國に歸りましたが、あそこで謀叛を起す積りにござりまする」と申しました。

頼朝は、結城朝光、下河邊行平を召して御相談になりました。その時行平は、

「先頃重忠は、悪い目代のせゐで、わが君のお叱りを受けましたが、あの時もただただ自分の手ぬかりであつたと後悔いたし、君をお怨み申すやうなところは、すこしもございませぬでした。あの人は、忠義の志厚く、その上正直一方の友人でござりまする。神を敬ひ、義を慕つて居り、決して謀叛の心を抱くやうな人物ではござりませぬ。どうぞお召しかへし下さいまして、お取りしらべ下さりませ」

そこで頼朝は、(ではさうしよう)

と、丁度行平が重忠と大へん仲のよい友だちなのを幸ひ、行平をつかはして重忠を召しよせました。

さて、行平が武藏へ行つて、今までの様子を話しますと、重忠は大そう怒つて、

「わしになんの不満があつて、今までの勳功を棒にふつてまで、謀叛を起さう。わしのただひと筋に忠義をおつくし申す氣持は、わが君のよく御存知の筈ぢや。それなのに讒言によつて陥れられてしまつたとは、もはや身の潔白を申しひらきする方法はなくなつた。あなたが命令を帯びてかうして來られたのも、つまりはわしのこの命が欲しいからであらう」といひながら、刀を抜いて自殺しようとした。

行平は、あはててその手を止めて、

「あなたはいつでも、自分にはやましい所はないといつてゐられた。それだのになぜ今になつてそのやうなことをいひ出されたのか、信をもつて人とつきあふといふことでは、わしは決してあなたに負けはしない。あなたは、將軍であつた方の子孫である。さういふわしも、四代將軍の末であるから、話の次第によつては、堂々とたたかふだけの武士と武士だ。何で騙ましてあなたを陥れようぞ」と申しました。

これで重忠の氣持はすつかりとけたので、一しよに酒盛をして、楽しく語りあひました。

さて重忠は、行平と一しよに鎌倉に行き、頼朝にお詫びの言葉を取りついで貰ふように、景時に頼みました。

すると景時は、



「貴殿に本當に謀叛の心がないといふなら、そのことを書きつけにして差し出されたがよからう」と申しました。

その時重忠は答へて、

「若し力づくで財をぬすんだといはれたら、この上の恥はないでせう、こん度謀叛心をいだいたといはれたのは、日比の勇があらはれたに過ぎません。拙者は始め平家に仕へたものだが源家がさかんになつてからこれに仕へ、まだふた心を抱いたことはござらぬ。それなのにこん度のやうな讒言をされるなど、實に不仕あはせなことです。でも元々ふた心のない拙者故何も書きつけまで出して、正直なことを賣りものにすることはないでせう。この心持は、わが君のよくご承知のことですから、どうぞその通りに申しあげていただきたい」

そこで景時がその通り申しあげると、頼朝はだまつてそれを聞いて居りましたが、まもなく重忠を呼ぶと、時候のことをいつたばかりで、てんで謀叛のことには觸れず、話はそのまゝに済みました。

### 加藤清正の髻

慶長五年〔紀元二二六〇年〕徳川家康は、石田三成を滅ぼし、天下に大勢力を得られましたこの時豊臣秀頼は七歳で、全くひとりぼつちの形になつてしまつたのです。

諸國の大名たちは、いづれも江戸に集まりましたが、夫々に子どもたちを江戸に残して、これを徳川幕府への人質としたのであります。

加藤清正は、江戸に行く度に大勢の兵を連れ、その度に秀頼に御機嫌伺ひを申しあげ、元通りに大阪に屋敷をきました。

さて、わが國のならばしとして、男子はひげを剃る風がありますが、ただひとり清正は、長い髻を自慢にして居りました。そこで家康が清正に使を送つて、

（その長いひげを剃ること、大阪の屋敷を毀してしまふこと、江戸へは大勢の兵をひき連れずに来ること）

この三つを行ふように申してやりました。でも清正は承知しないで、さていふには、

「いくさ仕たくをして銅面をかむる時、ひげがあるとびつたり動かぬやうにかむれて都合がよろしうござる。大阪の屋敷は太閤殿下にいただいたのですから、毀せませぬ。大勢の兵を連れて歩くのは、途中で、いつ何時間違ひが起つても、すぐ間に合ふ爲めでござる」と申しました。

さて家康は、京都に居られた時、大阪の秀頼に、（當地へお越しなされるよう）と申してやりました。

すると淀君は、（若し出かけて行つて、秀頼の身に間違ひでもあつたら大へんだから）



と考へて、仲々承知しません。家康は、また催促の使をよこしましたが、それでも淀君は承知せずに居りました。

そこで家康は、こん度は、北きたのまんどころ應と清正と淺野幸長ゆきながに（淀君に承知させるように）と申されました。

その時清正と幸長は、淀君に向つて、

『わたくしらふたりが、命を以てお護り申しあげますから、決してご心配はございませぬ』と申したので、淀君はやつと承知をし、秀頼を京都へ行かせました。

すると清正と幸長は、自分自身で武具をとつて、秀頼の輿のそばを歩いてお伴をし、二條城に參りました。行つて見ると家康は南向きに坐り、關東の侍たちが大勢、その側に並んで居ります。

秀頼はそれに對して、北向きに坐りました。清正と幸長は、そのすぐのうしろに寄りそつて居ります。

さてそれから、立派な刀だとか、名馬だとか、黄金とか錦帛とかをお互ひに送つたりいただいたりし、酒盛りが終りました。すると清正は、

『淀さまには、わが君のお歸りをお待ちかねでございます、よつてこれでお暇を申しあげます』

と申し、秀頼の側にひつついて、退出してしまひました。つづいて北應にお目にかかり、豊國廟とよくにのみやにおまわりをしてから、伏見から舟で無事に大阪に歸りました。そして、歸つて來ると清正はお酒をさしあげて、その無事のお歸へりをお祝ひ申しあげました。

かうしてやがて自分の屋敷に歸つて來ると、懐にかくし持つてゐた短刀を出して、涙をこぼしながら、

『けふといふけふは、太閤殿下の御恩に對し、少しながら報ずることが出來た』と申しましたそれから、ある時は

『ある時わしは前田利家と一しよに、論語の中に出てゐる「託孤寄命」といふ言葉について、いろいろと話したことがあるが、その時分は、どういふ意味か、わからなんだ。しかし近頃になつて、少しわかつて來た。このことを考へぬ者は、本當の忠臣義士ではない』  
といはれたことがあります。

## 八兵衛の誠心

第四十一代持統天皇のおかくれあそばした時に、始めて火葬といふことが起り、それからずつとこの風がつづきました。

第一百十代後光明天皇には、このことを大そうお歎きあそばして、おやめになりたいお心持で



わらせられたままで、崩御あそばしました。

この時京都に八兵衛といふ魚御用の者が居つて、宮中に魚をお納め申しあげて居りましたが天皇がおかくれあそばしたことを聞くと、大そう悲しんで、

「ああ、ああ。天子さまには、なせもつと御長命あそばして、火葬をやめるといふことに、あそばさなかつたのだらう」と申しました。

一方朝廷におかせられては、ずつと例がありますので、御火葬にし奉ることとなりました。するとこれを聞いた八兵衛は、早速あちこちと、偉い役人たちをおたづねして、

「どうぞ火葬にし奉ることだけはおやめ下さりませ。それが天子さまのお氣持なのです。もし御承知なくば、わたくしは生きては居らぬ積りでござりまする」

と、何日も何日も、泣き叫んで申しましたので、朝廷におかせられても、いろいろ御相談の上御火葬申しあげることをおやめになりました。

## 第九 仁慈

天地は、生物をもつてその心といたします。人といふものは、この理をうけて生まれ来たつたものですから、天地の心を心とせねばなりません。つまり他をあはれむ心であります

この心持で物事に對するを仁慈の道といひます。人が少しでも此の心を失つて理にそむいたり。道に違つたりしてはならぬのであります。誠實にしかも仁慈であつてこそはじめて人といはれます。故に「仁は人なり」と申します。

教育勅語「博愛衆ニ及ホシ」

### 埴輪のはじまり

第十一代垂仁天皇の二十八年〔紀元六五九年〕に倭彦命やまとひこのみことが薨なごぜられましたので、あそばつかへに殉死をさせられることとなりました。

天皇にはこれを聞いて不憫におぼし召され、人々を召して、

「生テ愛スル所、死シテ殉ト爲スハ、亦慘ナラズヤ。古ノ遺風ト雖モ、曷ゾ遵用ス可ケム。今ヨリ之ヲ止メヨ」ト仰せ出だされました。

その後皇后が崩ぜられた時、野見宿禰の申しあげたことをお取りあげになつて、土で物の形を作り、それを殉死する者の代りに立てるのを制度となされました。

そして、野見を、土部職はしづべとなされましたのであります。

### 民の竈

土部職  
大昔朝廷に仕  
へて、埴輪に  
器などを作る



第十六代仁德天皇には、難波に都をお定めになりました。

その御即位の四年〔紀元九七六年〕に御殿にのぼつて四方を御覽あそばすと、方々の家の屋根から、烟が立ち并つてをりません。そこで天皇には、米や麥などが實らぬため、百姓たちが困つて居り、家ではもう御飯を炊く者もないとお悟りになつたところから、御自身にまづ、大そう御節儉をあそばしました。

かうしたわけですから、宮殿は荒れ次第といふ有様です。

一方百姓たちは、その後天氣具合がよかつた爲め豊年になつて、三年目には大そう富有になり、あちこちで、お祝ひをするやうになりました。

七年〔紀元九七九年〕の夏に、天皇はふたたび御殿にお登りになり、あちこちの家から烟の立つ有様を御覽あそばすと、皇后に仰せ給ひ

「朕既ニ富メリ、復何ゾ憂ヘム」と仰せ出たされました。

すると皇后は、

「今ヤ宮室朽廢シテ、暴露ヲ免レズ、何ゾ富メリトヤ謂ハム」とお尋ねあそばしました。

これに對し天皇には、

「君ハ百姓ヲ以テ本ト爲ス。百姓貧シケレバ、則朕貧シキナリ百姓富メバ則朕富ムナリ」とお答へになりました。

かうしてこの年の秋から、諸國に税を申しつけ、これで宮殿を修理することを願ひあげましたが、天皇には、仲々おゆるしになりませんでした。そして十年〔紀元九八二年〕の冬になつてはじめて課役を科し、御殿を造られました。

そこで、人民共は大そう喜んで、老人も手だすけをし、子どももお仲間入りをするといふやうに、われ先きにと、夜ひるかまはず働きましたので、おきに立派に出来あがりました。

### 寒夜御衣を脱し給ふ

第六十代醍醐天皇は、人民をおあはれみのお心深くましまし、始終おいつくしみ下されました。

ある時は、寒い夜に、わざわざお召しあそばした御衣を脱がせ給ひ、人民たちの寒さをおしのび下さいました。

また、役人たちが奏上の爲め、御前に進みます度に、いつもおやさしいお眼ざしを下だし給はりました。かうしてある時、

「威嚴外ニ見ハルレバ、盡言ヲ爲シ難シ。朕人ヲ待ツ毎ニ、必辭色ヲ假シ、以テ啓沃ヲ求ム」と仰せられました。



## 朱雀天皇の御仁慈

第六十一代朱雀天皇には、政をおとりになるいつも、ゆるやかなやうにあそばしました。そして、役人たちは、(少しゆるやかに過ぎる)と思つて居りました。

そこである時藤原忠平が、そのことを申しあげると、天皇には、

「朕之ヲ先帝ニ聞ケリ。公ノ先人曾テ言フ、政ハ琴ヲ張ルガ如シ、大絃急ナレバ小絃絶ユト朕若シ嚴急ナラバ下民何ゾ堪ヘム」と仰せられました。

## 加藤嘉明の話

加藤嘉明は、學問もあり、勇氣もある武士で、下の者にも、丁寧でした。

ある時のこと、客に御馳走をすることとなつた時、まづ自分の大事にしてゐる杯十個を出したところ、侍臣のひとりが、ふとその一個をこわしてしまいました。

さあその男は、どんな罰が下されるかと、大そう心配して居りますと、そのことを聞いた嘉明はまづその侍臣を呼び出して、

「人間、誰にせよあやまちといふものはある。こん度のことも、決して罪を犯したと思はなくてよろしいぞ」といひ、残りの九個の杯を出させて、みんな打ちこわしながら、

「怒つてこのやうなことをすると思ふなよ。この杯の残つてゐるあひだは、見る度毎に、いつの年いつの月いつの日に、誰々と申す者が、この中のひとつをこわしたと、いふだらう。この杯があつたばかりに、ひとにあやまちをさせたので、そして、その者の名が後々まで残るのは、まことに怪しからぬことだ。そこで今、かうして後にあやまちの起らぬやうにするのぢやよ」といつて、二度と、道具類を見て楽しむといふやうなことを、なさいませんでした。

## 奥貫正郷の善行

奥貫正郷は、正助といふ名で、友山と號して居つた、武藏國久下戸村の、大百姓であります。

幼少の頃から學問が好きで、江戸で勉強をした後村に歸ると、生徒を集めて、教へて居りました





寛保年間〔紀元二四〇一年以後〕に關東地方に大水が出て、その中でも武藏國の入間郡がいちばんひどく、數十里のひろさに亘つて、方々の家が流される有様でした。

そこで正卿は、食物を舟にのせて方々を漕ぎまわりおなかのすいた人たちを救ひましたが、病氣をしてゐる者が見つかるのと、その儘舟にのせて連れ歸り、手當をしてやり、その人數が數百人にもなりました。

それから父に願つて、

『父上には、常日ごろからわたくしに、儉約をせよとお訓へになり、無駄なつひえは皆、溜めてをられました。あれは、きつとけふのやうなことが起る時の御用意であつたと存じます。』

どうぞ貯へてある米や麥で、困つてゐる人たちをお救ひ下さい』

と、まづ倉をあけて、飢えてゐる人たちを救ひはじめました。それを聞いた人たちは、後から後からと、大勢押しかけて參りました。

正卿は、澤山のお粥をこしらへてをき召使の中でも至つて行儀のいい者をえらんで、

『おなかの空いてゐる方々として、何も始めから貧しいのではないから、決しておさげすみ申すことはなりませぬぞ』

とおしへ、自分も、丸で大事なお客さまに對するやうに迎へました。それから、若者でも子どもでも、誰彼の別なく、ひとりに米四升づつをやりましたが、そのうちに倉の米がなくなる

と、方々から、麥や粟を買ひ集めてこれをめぐみ、そのお金がなくなると、こん度は、また父に願つて、田宅を質入れしてそのお金で色々救ひました。

かうして、救つた人數は、凡そ四十八村十萬六千人あまりもあつたと申します。

このことを知つた幕府は、いろいろと御褒美を下された上、その善行を方々へ書いて大勢に知らせました。

## 第十禮讓

禮は天然の道理に對するをきてであります。人のなすべき事柄に對するきそくであります。讓はつまりその禮の實であります。禮讓があつてはじめて天理は完全になり人事は圓く行くのです。かうして家も國家も治まるので、ただの一日でもこれを失くしたら、人々が我慾だけを考へるからすぐに喧嘩がはじまります。かうなつたら、烏やけものと較べ、違ふことがありますか。ふだんから皆うやうやくへりくだり、進退動作片時も禮讓といふことを忘れてはなりません。かうしてこそはじめて「萬物の靈長」だといへるのであります。

教育勅語「恭儉己ヲ持シ」



## 天智天皇の御事

第三十八代天智天皇は、はじめ葛城皇子と稱せられた頃、蘇我入鹿を誅せられました。

第三十五代皇極天皇には、そのお手柄の大きいことをお喜びあそばし御位を、譲らせ給はんと仰せられました。ところが、葛城皇子には、ひそかに奏上して、第三十六代孝徳天皇を御位におつけ申しあげたのであります。

そこで皇極天皇は、葛城皇子を皇太子に立てさせ給ひ、いろいろと孝徳天皇のまつりごとを執らせ給ふ時の御相談相手とあそばしました。

孝徳天皇が崩せられると、皇極天皇には、再び御位におつきあそばしました。これが第三十七代齊明天皇にわたらせられます。

やがて齊明天皇の崩じさせ給ふや、皇太子には梓宮をかりに、をさめてをくこと六年にも及びやがて葬り奉つてから、はじめて御位におのぼりあそばしました。

天皇の御事を、

「その御孝心や、へりくだらせ給ふ御心のあついことよ。おいであそばしながらさうでないやうであり、立派なお仕事をとおとげあそばしながら、むやみと目にお立ちなされぬ有様こそ、實に偉大な大御心である」

梓宮  
天子の御帳

と書いてゐる本もあります。

## 藤原良繩

藤原良繩は、心ひろく、その忠孝を知られた方でありました。

貞觀のはじめ頃（紀元一五一九年）に、正四位下左大辨となりましたが、この時、右大辨南淵年名・左中辨大江音人といふ人たちが、みな良繩の下に居りました。

その時良繩が、ある人に、そつといふには、

「おふたりは、いづれも學問はあり、國家に功のある方々であります。しかもわたくしはあの方々より年少でゐて、職が上に居りますので、お目にかかる度に、いつも申わけないと思ふ心がいつばいであります。左近少將基經さまには、お年若ながらおえらい方で、世の人たちも、そのことを申して居ります。先帝にも、大そう御寵愛あそばされました。そのお方さへも、わたくしと同じ四位の位におられます。凡そ少將が四位にいらせられる時は、中將は職をおやめ申すもので、今までにおえらい方々も、さうされました。わたくしは、決してむかしのおえらい方々と較べられませぬが、どうぞしてその真似だけでもいたしたいと思つて居ります故、このまま、高い位について居るのは、この氣持がゆるしませぬ」とあつて、たうとう、

先帝  
第五十五代文  
徳天皇



(病氣でございませう)と申しあげ、ひとへに身を退かれました。  
その後、年名は左大辨になり、音人は右大辨となり、基経は中將となりました。そこではじめて良繩は右衛門督に遷りました。

### 文を尊ぶ三守

藤原三守は、生れつきしとやかな、しかも物ごとの決断力のはつきりした方でした。  
早くから大學に入り、五經を受け教つて居りましたが、だんだんに位があがつて、やがて右大臣にまでなされました。

そして、いつも文士をあつくもてなし、お役所へ行かれる時、途中でそれらの人たちに遇ふと、きつと馬から下りて、禮をなされました。  
時の人たちは、このことを、褒めたたへました。

### 左右の列を譲る話

三浦義村は、義澄の子であります。  
父に従つて度々戦に出て、功をたてましたので、やがて左衛門尉に任じ、駿河守となり、正五位下に叙せられました。

ある時、源實朝が、右大臣で左近衛大将の役を兼ね、鎌倉の鶴岡社におまゐりに行かれる時、義村もお伴に加はつて、長江明義と並んで進むこととなりました。そして、義村は、(左の列を進め)と命ぜられました。  
すると、義村は辭退して、

「ずつと年長者にゐらせられます長江の殿の左には、立ち兼ねますから、どうぞ、お伴の場所をおかへ下さりませ」と申しあげました。すると、明義は明義で、

「三浦の殿には爵がおあります。その上に、三浦黨の長者にござりますから、左を行かれるのが當然でござりませうといつて、兩方とも、お互ひに譲りあつてききません。

それを聞いた實朝は大そう喜んで、

「けふは、己にとつて大事な参詣の日ぢや。その時ふたりが、禮をつくして譲りあふといふのは、實に喜ばしい。考へて見ると、義村はまだ若いが、明義は年とつて居るから、明義よそなた左の列に居つて長く孫子の代までの光榮とするがよからうぞ」と申しわたされたので、ふたりは喜んで御命令に従ひました。

### 一本の矢に武功ふたつ

山内治太夫と進士清三郎は、松平康重の家來であります。



ある時、ふたりは退却する軍のしんがりをつとめました。治太夫は、盛んに矢を射かけたため、たうとう矢だねが盡きてしまひました。

敵兵の山縣源四郎たちは、どんどん追撃して参ります。

その時清三郎は、矢のない治太夫に、矢を一本投げてやつたので、治太夫は踏みとどまつてその矢で敵兵のひとりの胸を射ぬき、うしろにあつた松の樹につきさしました。

そこで山縣源四郎は、その矢を松平康重に送つて、

『實に立派なお腕前でした』と申してやりました。

大さう喜んだ康重が、早速その矢を見ると、進士清三郎の名が刻つてあつたので、褒美をとらせようとすると、清三郎が申すには、

『その矢は、山内治太夫が射たものにござります』と、合戦の有様をお話したので、こん度は治太夫を呼んでおききになると、

『進士清三郎が射たものにござります』と、お互ひに功をゆずり合つて、仲々さまりません。

そこで康重は、ふたりに同様の褒美をとらせましたので、人たちも、感心いたしました。

## 第十一 儉素

人には富める者貧しい者と、いろいろあります。故にその身分々に随つてすべての物をつましくして行く者は天の利を得人の福を得ることとなります。みだりに贅澤をすれば、必ずいつかはわざわひが参りませう。これがためには、身をそこなひ家を潰すやうなこととなります。つつしまなくてはならぬことであります。さうかといつて、ただ物惜しみをして使ふべきものも、使はぬのは吝嗇けんしやくとなりませうから、儉素と吝嗇の區別ははつきりさせなくてはなりません。

教育勅語「恭儉己レヲ持シ」

### 金のかざりした車

第七十一代後三條天皇には、大さう儉素を重んじ給ひ、御召しになるものや宮殿その他凡て御質朴にあそばされました。

さて、第七十代御冷泉天皇の末ころ「紀元一七二〇年頃」には、風俗が大へん派手になつて極く低い位の役人たちも、車に金のかざりをするやうになつて居りましたが、天皇には、それ



山城河原郡  
八幡町にあり  
神社で現存  
八幡宮と申し  
官幣大社とし  
あげます  
八幡宮と申し  
あがります  
天子の召され  
る

をやめさせやうとあそばしたのであります。

御即位のはじめ頃、石清水に行幸せられました時、お行列を拜まうと、大勢の人が出ました。

ところがその中に、金でかざりをした車で来た者があつたので、天皇には、長くも變興をとどめ給ひ、金のかざりをはぎとるようにお命じになりました。

その後加茂に行幸あそばした時には、車に金のかざりをした者は、ひとりもゐなかつた程、質素な風俗となりました。

### 松下禪尼と時頼

北條時頼の母は、松下禪尼と申します。

ある時、時頼の食事を支度してをりました。その時兄義景が来て、いろいろとお手傳ひをして居りました。

禪尼は、紙を小さく切つて、紙格を貼つて居られましたので、義景が

(誰ぞにお命じになられたら)と申しましたが、禪尼は、振り向かれもせず、仕事をつづけられます。そこで義景が、

『そのやうな物をつくるはれるより、新らしいのになされた方が、お手間が省けて却てお得に

ござりませうに』といふと、禪尼ははじめて振り向いて

『それを知らずに居るわけではありませぬ。ただ、物がこはれたら、それを直して使ふやうにこのことを子たちに知らしてやらうと思つてであります』といはれました。

時頼も大そう儉素な人で、食べ物など、決して奢つたことがありませんでした。

ある夜のこと、やすんでゐると、おぼぢぢの大佛宣時おぼぢぢの大佛宣時が來ました。そこで時頼は、自分で酒を持ち出して、

『ひとりで飲むよりは、お前さまとご一しよの方が、どの位楽しいか知れませぬ。ですが、夜がかう更けてしまつたので酒のさかながないのは残念であります』と申しました。

すると宣時は、自分で臺所に行き、あかりをつけて残り物をさがし出し、それでふたりして、ひと晩中面白をかしく飲みあかしました。

その質素なことは、これ程でありました。

### 滑川の十錢

青砥藤綱は、北條時頼と時宗の二代に仕へて、領地が數十ヶ所があり、大そう富有でした。

それでも非常に儉素の念にあついで、食べ物にも身のかざりにも、すこしも構ひませんでした。







「仁兵衛は、まじめな男で、よく命令を守るよ。その褒美として、三百石増してやるがいいぞ。元來唐糸といふものは、あちらの國の百姓たちがいろいろ苦勞して製つたもので、それが大海を渡つて遙々わが國まで來る。それまでに、どれ程大勢の人たちが、手をかけてゐるか。これぬ程ぢや。よつて、たとへ短かいからと申して、それを捨てなぞしては、天下の寶をへらすわけだから、わしはいつもそのことをしまいと心掛けてゐる。今仁兵衛は、よくこの氣持が分かつてくれたものぢや」と笑談にいひ添へました。

「これ程の短い糸の切れ屑で、三百石の祿を取るようになったとは、仁兵衛もなかなか、得をしたものぢや」

### 銀百枚物語

黒田孝高は、豊臣秀吉に仕へて、祿十二萬石までいただくやうになりました。

朝鮮征伐の時、日根野高吉が、三好新右衛門に仲へはいつて貰つて、銀百枚を孝高から貸りて征伐に參りました。そして歸國してからそのお金を持つて新右衛門と一しよに孝高の屋敷へ返へしに行きました。

孝高が會うて話してゐると、丁度そこへ、ある人が鯛を届けて參りました。

すると孝高は、家來に命じて、その鯛の骨で吸ひものを作らせ、酒を出させました。

これをそばで見てゐた高吉と新右衛門は、

(さてさて、十二萬石の大名ともあらうものが、けちなことをされるものだ)と、卑しめて居りました。

さうかうしてゐるうちに、新右衛門は例の銀百枚を孝高に返へし、その他にお金をいくらか出しました。利息の積りなのです。

その時孝高は

「あの時お渡ししたのは、急場のお間に合はせて進ぜたので、決してお貸し申したのではなかつて、(受けとつて貰ひたい)

といはれても、どうしても受けませんでした。ふたりは、ここではじめて、孝高が決して吝嗇な人ではないと感じ入つて、退下いたしました。

### 木綿を着る大名

上杉治憲は、家をつぐと、まづ節儉を行はうと決心いたしました。そこで、木綿着物を着、御食事も、汁もお菜もひと色きりといふこととし、家來にお命じになつて、一同にも、木綿着物を着るやうにと仰せ出されました。

でも、長いあひだ贅澤をしつけて來た下々は、仲々すぐには、御命令に従ひません。治憲は



大そう心配して、

『わし自身に、木綿着物を着ては居つたが、考へて見ると、ただ上へ一枚着ただけであつた。つまり下着はそつくり絹物だ、これでは他の者たちが、命令に従はぬのも無理ではない』と仰せられ、そこですぐに、そつくりのきものを木綿におかへになつたので、それからは、別に命令書など出さなくても、民はすつかり質素儉約になりました。

## 第十二 忍 耐

入は大きな志をいだいて居つても、我慢といふことをしなくては、せつかくの仕事も途中で駄目になつてしまひます。どのやうな苦しみをも耐え、どのやうな恥をも忍び、どのやうな危いおもひをもこらへられる者が、はじめて成功するのであります。これは、丁度深山のちよろちよろ流れが、遠い路を通つて末は海に出られるやうなもので、さうなるのみな、途中で巖や石に行手をはばまれても、決して流れ進むのをやめないからで、忍耐の大切なことも、この通りであります。

教育勅語「恭儉己レヲ持シ」

鎮守府は陸奥  
にない軍監  
でなく軍使  
副将及び軍使  
軍曹及び軍使  
ありつた職が  
あつた。陸奥  
陸奥にありま  
す。衣川にあり  
頼方

## 源頼義の苦心

源頼義は、心をちつき、物ごとに動ぜず、戦のかけひきが上手で、たしかに大將になる資格のあるお方であります。馬に乗つて矢を射る事が巧でした。

永承の時〔紀元一七〇六年以後〕陸奥の豪族安倍頼時が謀叛を起したので、朝廷には頼義を陸奥守に任じ、これを伐たしめられました。丁度この時頼時は、朝廷から謀叛の罪を赦されたので、兵たちを解散して降参し、頼義の家來になりました。

頼義は鎮守府將軍を兼ねました。そのうちに任期が終つたので、京都へ歸らうとしてゐると頼時は子の貞任たちと、衣川に立てこもつて、又々謀叛をいたしました。

そこで朝廷には、再び頼義に伐たせられましたので、二日に亘つて懸命に攻めました。それがため頼時は討死してしまひましたが、残りの兵たちは、まだなかなか降参いたしません。貞任の兵たちは、日に増し元氣づいて來て、官軍は、たびたび利あらず。しかもこの時は、田畑の作物の出來が悪く、糧食が充分に行き渡らなかつたので、頼義は、自分の兵たちが、次第々に逃げてしまふのを、どうすることも出来なかつたのであります。そこで大そう心配して、諸國の兵を召しあげて使ふことを朝廷にお願ひ申しあげ、自分みづから、一千八百餘人の兵を指揮して、貞任を河碕の柵に攻めました。すると折から大雪で、人も馬も、ここへるや



ら餓えるやら、大そうな難澁をいたしました。

貞任は、よりぬきの兵四千餘人をひきゐて打つて出で、鳥海とりうみで戦ひました。

これが爲め頼義は、さんさんの敗け方で、士卒は大ていは討死してしまひ、自分のまわりにはたつた六人しかゐなかつた位です。賊はこれを取り圍んで、矢を雨のやうに射かけます。

でも、頼義の子の義家は、藤原景通たちと、討死を覺悟で大いに働いたので、そのうちに賊もやつと退きました。

頼義は、かうして危い命を助かり、そのことを朝廷へ、

「援兵も糧食も届きませず、その上、出羽守は力を借してくれようともいたさせぬ」とお知らせ申しあげましたので、出羽守はやめさせられ、早速にその代りが参りました。ところが、こん度の出羽守も一向援けに来てはくれませんでした。

こんな風ですから、貞任はだんだんに勢力を得て来て、ついには、勝手に命令書を出して百姓たちから糧食を召しあげたりなどはじめたので、頼義はますます困り切りでしたが、それでも數年間といふもの、がつちりと敵對して居りました。

この前から頼義は、また陸奥守に任せられて居つたのですが、この時になつて、丁度この任期が切れたのであります。そこで朝廷では、高階經重を代りに任せられましたところ、陸奥の

民は、頼義をしたひ、なかなか經重のいひつけをききません。そこで經重は仕方なしに、陸奥國から都へ歸つてしまひました。

かういふ有様だつたものですから、頼義は、

(よし。ではきつとわしの力で、賊を平げて見せるぞ)と固い決心をし、まづ使を出羽國の豪族清原光頼と、その弟の武則に送つて、

(援けて貰ひたい)と申してやりました。

すると武則は早速、一萬人あまりの兵をひきゐて来てくれたので、頼義は、自分の兵三千人を加へ、この軍勢で、小松の柵を攻めて、陥してしまひました。丁度ながあめ時でした。

そこで十日あまりも留つてゐるうちに、磐井から南方の地方は、みな賊方についてしまひ、こちらの糧食を運ぶ道中を、途中で襲はうといひます。

頼義は、まづ兵をわけて、そつちにつかはし、敵をふせがせました。

すると、こつちの兵のすくなくなつたのを知つた貞任は、自分が大將になつて、よりぬきの兵八千をひきゐて攻めて來ました。

それを、頼義は待つてゐてさんさんに破り、逃げるを追つて、磐井川のところまで追ひつめうまい折を見て、賊の本陣を攻めるつもりで、まづ武則に、よりぬきの兵八百をひきゐて、夜追ひかけさせました。



命ぜられた武則は、わきみちから、急に貞任の本營へと攻めこみます。ここで賊軍はちりぢりばらばらになり、どんどん退却して、やつと衣川の關に集りました。

頼義は、一心にこゝを攻めます。

なが雨で、水びたしになり、軍のかけひきが、うまく参りません。

この時武則は、そつと兵を忍びこませ、賊の陣營に火をつけさせました。

貞任はやつと逃げ出しましたが、これを追ひかけて、頼義はどんどん攻め、引きつづいて柵をふたつも攻め落とし、なほも進んで鳥海の柵の他に三つも落とし、たうとう、厨川の柵を圍みました。

この時貞任は、櫓を建てて、その上から矢や石を雨のやうに降らせましたので、官軍は數百人の討死です。

頼義は、百姓家をこわして、これで堀をうづめ、馬から下りるとまづ京都の方を伏しをがんでから、自分で火をつけた木を持つて、

(これぞ神火)といひながら、敵の陣地へ投げこみました。

丁度その時、風が吹きはじめたので、賊の櫓は見る見るうちに焼けはじめたので、

(それ、この時ぞ)とばかり、いち度にどつと攻め入ると、賊軍はなほ、命がけに守つて居ります。でも、武則がたうとうこの一部に攻め入つたので、はじめて逃げ足立つたところを、追

ひかけてみなごろしにし、たうとう、貞任を討ち取りました。

すると貞任の弟の宗任たちは降参し、残つた兵どもも残らず平らぎました。

これを聞かれた朝廷には、頼義を正四位下に叙し伊豫守に任ぜられ、義家その他いづれも、それぞれの官を拜しました。

頼義がはじめて賊を討つた時からこの時までには、もう十何年も経つてゐたのであります。

はじめ、鳥海の柵を攻め落とした時、頼義は、武則に向つて、

『わしの様子は、どうであらう』といひました。すると武則は、

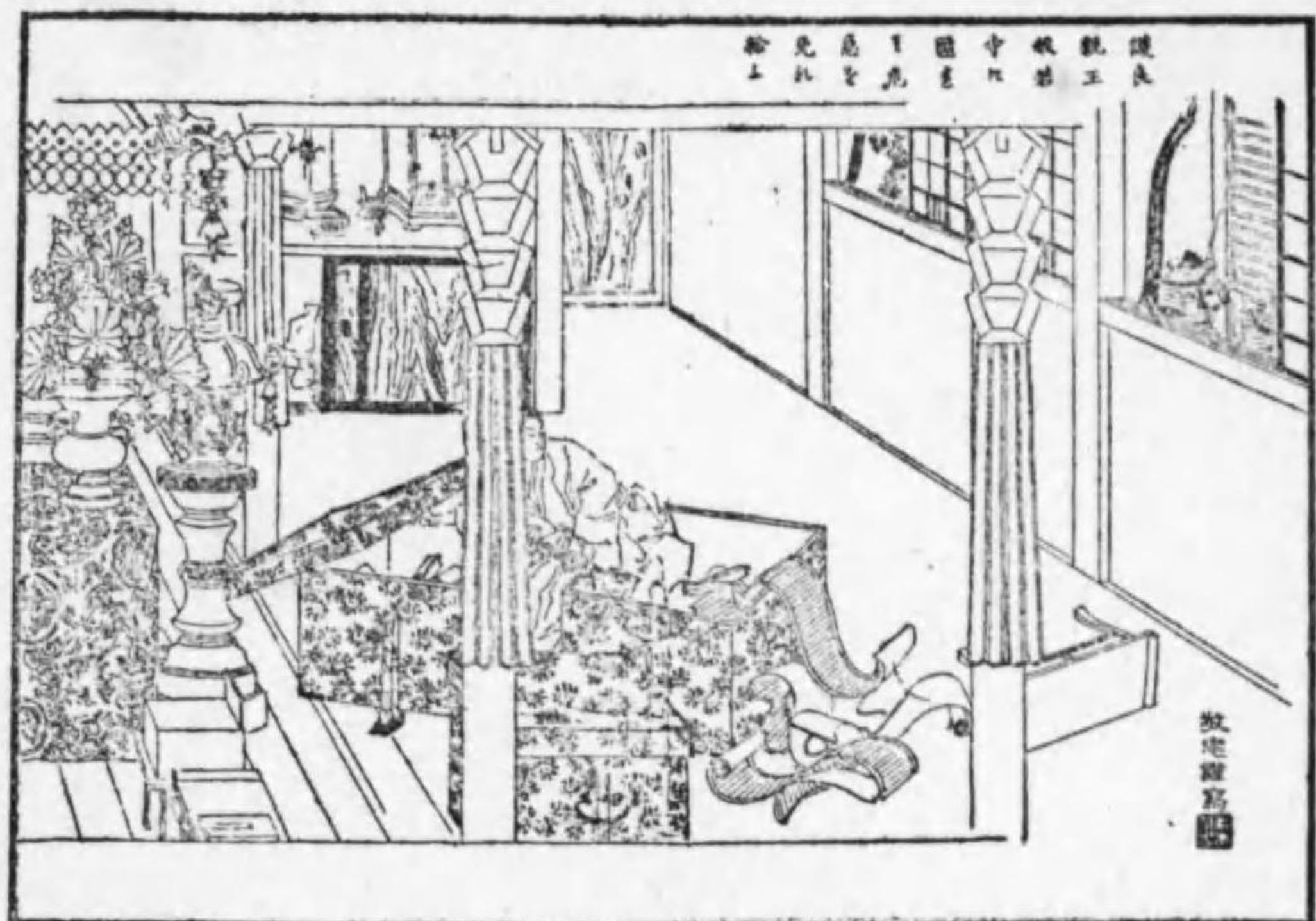
『將軍には、天子に忠をつくす御一心から、この十何年といふもの、戦におつとめになりました。その御苦心のせぬか、お髪は眞つ白になつてゐられましたか、今拜見いたしますと、また半分は元の黒さに戻られました。ですから、もし貞任めが生捕れたら、きつとお髪はまた眞つ黒になられませう』

と答へたので、頼義は大そう喜んで、一心に賊をせめたのであります。

## 大塔宮の御事蹟

護良親王は、大塔宮と申しあげ、後醍醐天皇の第三皇子にわたらせられます。





天皇には、親王と御一しよに北條氏を討たうとなされたところがこの計劃が中途でもれてしまひました。

その時北條高時は大いに驚いて、すぐに天皇を御位からお退かせ奉らうと考へ、兵を京都に送りました。

親王には比叡山延暦寺の座主であらせられました。高時の謀をお知りになると、まつ天皇に笠置山へ行幸あそばすよう願ひ申しあげ、御自身は、御弟の宗良親王と御一緒に兵をひきゐて北條方をむかへ、これを打ち破られました。その後御敗北あそばしました。

そこで宗良親王とお別れあそばし、奈良の般若寺にお忍びになりました。

この時笠置山も落ちてしまつたのであります。賊はやがて般若寺を取り圍みましたが、丁度そ

の時親王の御供の方々は、みなよそへ行つて居られたので、親王には、どうしていいかとお困りあそばし、

(もはやこれまで)と、刀を抜いてあはや御自害あそばさうとなされた時、ふとお氣づきになつたのは、そばにあつた經本をいれた三つの函はこであります。よく御覺になると、そのひとつの函からは、經本の半分ばかりが取り出してあります。そこで、急いでその中におはいりになりあたまから經本をかむり、刀を胸にびたりとあてて、いざといへばすぐにも御自害あそばすやうにしてかくれてゐられました。

賊は、寺中を捜がした末、やつと經函のある所まで來たが、親王のお忍びになつた經函は、蓋が開いてゐたため、別に怪しみもせず引きあげました。

親王には、ほつと息をつかれると共に、(いち度捜がして見つかぬ時は、きつとまた戻つて來るに違ひない)とお考へになり、急いで別の經函におはいりになりました。

賊は、果して引つかへして來て、さつきまで親王のかくれてゐられた。蓋の開いた儘の經函を捜しましたが、親王にはもう別の函に御移りあそばした後なので、そのまゝ引きあげて行きませんでした。

親王には、それから、赤松則祐、村上義光たちと一しよに修驗者の姿となりて、熊野に行かせられました。



山高く谷深く、住む者としてない熊野だけに、飢え疲れ、大そう御困難あそばしましたが、十日あまりもかかつて、やつと十津川におつきになり、お供の者は、やつと粟の粥などを得て、おすすめいたしました。

かうして、やつと土地の豪族戸部兵衛のところへおいでになつたので、近くの土地の者たちは、たんだん親王方におつき申しました。

護良親王には、かうして熊野の戸部兵衛のところ数ヶ月おいであそばしましたが、賊はいろいろと褒美をかけて、親王におそむき申すやうに仕向けたので、十津川や熊野の土地の豪族たちも、次第々々に敵方になつて來ました。

そこで親王には、お供の方々とそつと吉野へお引きあげになると、賊は途中に柵を結んで、喰ひ止めようとしたので、お供の者ふたりをつかはされ、いろいろとお論しになりましたが、なかなか承知いたしません。

お使ひの中ひとりはたうとうその時討死し、もうひとりが歸つて來て、そのことをお知らせ申した時、親王には、

(もはや助からぬ)とお考へになり、御自害あそばさうといふその危い時、紀伊の野長瀬六郎たちが兵をひきゐてお援けに參つたので、賊はそのまゝ合戦もしないで逃げてしまひました。

かうして親王には、たうとう寺を城として吉野で兵をおあげになつたのであります。

その時後醍醐天皇には隠岐におはしましたが、親王は書を奉つて、精しくこちらの様子を申しあげ、その上則祐をつかはして、父則村に、播磨で兵を起すやうにとお論しになりました。

その他、諸國に色々とお命令をあそばしたのでお味方する者はだんだん多くなつて來たのであります。

さうかうしてゐるうちに、賊將二階堂貞藤たちの大軍が來て、せめ立てました。そして戦の結果は、まことに不利でした。

この時親王には、左右に二千餘人の兵をひきゐて、自から敵軍の中におどり込み、大そう勇敢にお戦ひになりましたが、そのうちに傷を負はせられ、血は盛んに流れ出る御ありさま。そこで陣幕の中に御入りになつて、兵たちとお別れの酒をおくみ交はしになりました。

義光は、もう外城が破れてしまつたので、親王を抜け道からお落とし申しあげましたが、その時親王には、途中でまたしても賊兵どもにせめられ、大いにお戦ひあそばした後、やつとお落ちになることが出來ました。

さて、二階堂貞藤は、護良親王が高野山に落ちられたことを知ると、早速兵をよこして、あちらこちらとお搜がし申したが、高野山の僧たちは、いづれもお味方して、親王をおかくまひ



令旨、三宮、  
中宮及び親王、  
の命、令の文書  
で、りやうじ  
とも申します

大和國生駒郡  
と河内國中河  
内郡にまたが  
る山

申しあげたので、どうにもなりません。

するとこの時、新田義貞がそつと使をよこして、

（何卒、令旨をいただいて、勤王の軍を起したう存じます）と申しましたので、これをおさづけになりました。

さうかうしてゐるうちに、後醍醐天皇には伯耆國の船上山（かみのやま）に行幸あそばし、これで官軍の勢ひもすこし盛んになりました。

親王には信貴山（しんぎやま）に行かれて、赤松則村が京都の賊軍をせめたが勝てなかつたとお聞きになり、令旨を延暦寺の僧たちに下して、

（則村を助けよ）と仰せられました。

その頃新田義貞は鎌倉で北條高時を滅ぼすし、足利尊氏たちも京都を賊軍の手からとりかへしたので、天皇には、やうよう京都へお歸へりあそばしました。

ある歴史の本には、親王の御事を、次ぎのやうに書いてあります。

『親王は勇氣あるお生まれつきで、大そう武藝に達せられ、どうぞして天皇にそむき奉る賊を滅ぼさせと御決心あらせられいろいろと御辛苦をあそばしました。そしてそのあひだ、お命をとされやうとなされたことは何度も知れず、かうして吉野に立てこもつて、そこから諸國にちらばつてゐる勤王の軍をお勇氣づけあそばしたのであります。新田義貞や赤松則村

が、東と西に義軍を起し、天皇が京都におかへりあそばすやうになつたのは、たしかに親王のお手柄と申すべきであります』

## 十八里の新川

松平信綱は、武藏國川越の領主であります。

さてその領内に村があつて野火止（のびど）と申しました。地質の悪い、水利の不便な所でした。

そこで代官の安松金右衛門が、

『新堀をほつて、玉河の水を引き土地を田にしたらよろしうござりませう』と申しあげると、信綱は、

『どの位かかるのか』と訊ねられました。すると

『三千金はかかりませう』といふ答です。その時信綱が、

『自分はこゝに久しくゐる者ではない。でも、三千金で後の世の人の爲めにも役立つと申すならそれをさせるのが自分の職分である。直ちに支度にかかるがいい』と金右衛門に仕事の監督を命じました

で金右衛門は、數百人の人夫をあつめて、十六里といふ長い川を小川村から新河岸まで堀りました。ところが、さて川が堀りあがつても、水が來ません。ただ細々と流れてゐるばかりで



あります。

信綱が不思議に思つて、そのわけを訊ねると、金右衛門も困つて、

「わたくしにも、相わかりませぬ。どうぞ明年までお待ち下さいませ」と申しあげました、さてその翌年になつても、新しく堀つた川へは、水が参りません。信綱はたうとう、

「金右衛門よ、そなたは土地の高低といふことを知らぬのであらう。つまり新河岸の方が、小川村よりも高いのではないか」といはれました。その時金右衛門は

「いえいえ、決して左様の儀はござりませぬ。今になつてわかりました。昔からの言葉に、河潤九里といふのがござりまする。この土地は、丁度武藏野の原の中にあつて、土はかわき風は強く、いつも大へんな砂埃で、客人が見える度に、座敷を掃かなくてはならぬ程にござりまする。ところか今年は、左様のことはなく、また、野菜なども大そうよく出来ました。そこで考へまするには、河の水がだんだんに土地へしみこんで参つたからと思はれます。水は、きつとそのうちに來るに相違ござりませぬ。」

さてその翌年のこと、大雨で、ひと晩中降りつづいたが、そのうちに、まるで雷のやうな音がしたかと思ふと、物凄しい流れが、新しく堀つた河を流れ出し、十六里のあひだをただ一とさきで、新河岸にと流れて來ました。

これを見た信綱は大そう喜んで、金右衛門が三年といふもの、決して元氣をなくさずに、ひ

とつの事業につとめてゐた功を褒め、祿をましてとらせましたが、金右衛門はそれから後も、だんだん出世して、後には大そう立派なお役につきました。

### 伊藤仁齋の勉學

伊藤維楨は仁齋と號し、京都の人であります。

代々商人でしたが、維楨の時まづ學問をはじめ、大そう勉強いたしました。すると親戚の者たちが、反對して、

「學者になるよりも、醫者となる方が、樂でその上お金儲けが出来るが」と申しましたが、維楨は決してはじめの志をまげずに居つたので、家がどんどん貧しくなつて行きました。かういふ風ですから、親戚の者たちは、一そう反對して、

(學問などやめてしまへ)といひつづけましたが、いはればいはれる程、維楨はますますはじめの決心をかたくし、たうとうしまひには、大學者となりました。

貧しい頃のこと、歳の暮になつたが、餅を買ふことが出来ません。すると奥方が來て、  
「どんなに貧しくても、わたくしにははじめからの決心がござりますから構ひません。でも、子どもは何も知りませんから、よその家に餅のあるのを羨んで、買つてくれいといひつづけて居ります。これを叱る身の辛さは、申しやうもござりませぬ」と、泣き出してしまひま



した。

その時維楨はだまつて本を讀んで居りましたが、すぐに着てゐる羽織を脱いで渡しました。

## 第十三 貞操

女子は、兩親の家にゐる時はしとやかにまたつつましく、決して不作法な振舞などとしてはなりません。嫁にいつて、妻となつてからは、よく夫につかへ、どんなことが起らうとも夫にそむくやうなことがあつてはなりません。これを貞操といひますが、女子の徳としてこれより大切なものはありません。をとなしなこと、心なごやかなことなど、どれもこれも大切な徳ではあるが、とりわけこの貞操を第一とするのであります。

### 二人音那

家原音那は、左大臣多治比島たぢひのしまの妻、紀音那は、贈右大臣大伴御行おほのともの妻でしたが、揃つて婦徳のあつた人たちでした。そして、和銅年中〔紀元一三七〇年頃〕に、第四十三代元明天皇には次ぎのやうな勅語を下されました。

『家原音那。紀音那。竝ニ夫存スルノ日。爲國ノ道ヲ相勸メ。夫亡スルノ後。同墳ノ意ヲ固守スルヲ以テ。朕彼貞節ヲ思テ。感歎之深シ。各々邑五十戸ヲ賜ヘ』

### 漢部妹刀自賣

今の北桑田郡

漢部妹刀自賣は、丹波國伊鹿郡の人であります。

十四の時秦貞雄はたのに嫁いて、男子ふたり女子ひとりを生みました。その後貞雄が死んでからは三十二年の長いあひだよくその貞節を守り、いつも質素な着物を着ては獨居し、子ども達をそれぞれ立派に育てあげました。

そこで仁和年中〔元年は紀元一五四五年〕に國司がそのことをお上へ申しあげ、そこでみことのりによつて、位二階に叙し、田租をゆるされました。

### 四比信紗の善行

今の北葛城郡

四比信紗は、大和國有智郡の人果安といふ者の妻であります。

果安が死んだ後、長いあひだ節を守り、果安の妾の子を並せて八人ありましたが、それらをすこしも區別せず可愛がり、また、しうと、しうとめにもまめまめしくつかへました。そこで和銅年中〔元年は紀元一三六八年〕にその善い行をお上から褒められました。



## 袈裟と盛遠

雑仕  
者  
下  
つ  
か  
へ  
の

源みなもとの妻袈裟けさは、幼い頃の名を阿都磨あづまと申します。父親の名は、傳はつて居りません。はじめ母と一しよに、陸奥國衣川に住んでゐたが、大そう富み榮えてゐたので、人たちは、衣川殿と呼んで居りました。そこで、女子の阿都磨を袈裟と呼ぶやうになつたのであります。袈裟は、非常にみめかたちの美しい女子で、上西門院の雑仕になりましたが、間もなく、左衛門尉源渡のところへ嫁入り、大そう仲よく暮して居りました。するとここに、衣川の甥に遠藤盛遠といふ者が居りましたが、ある時往來で、ふとひとりの婦人を見たところ、大そう美しいので跡をつけて行つて見ると、渡の妻になつてゐる、いとこの袈裟といふことがわかりました。それからといふもの、盛遠は、どうしても袈裟のことが忘れられないので、たうとう叔母の衣川のところへ行つて、『袈裟を妻に申し受けたい。いやと仰せられるなら、こちらにも覺悟がある』と、おどしつけました。

衣川は大そう驚きおそれ、偽つて、『わしをゆるしてくれるなら、さういふことに計らはう』と申しました。

盛遠は、かたく約束をして、歸つて行きます。

さてその後で、衣川は袈裟を呼んで、小さな刀を渡し、

『どうぞ、わしを殺して欲しい』と、泣きながらいつたので、袈裟はびつくりして、

『滅相もないことを仰せられます。お氣がお狂ひなされたのですか』といふと、母の衣川は、はじめて盛遠の來たこと、その無望難題のことを話し、その上、

『あれは我むしやらかな男故、もしも承知せなんだら、きつとわしを殺すでせう。あれの手にかかつて殺されるより、そなたの手で死にたい』とまで申します。

袈裟もさすがに泣き悲しみましたが、この時（子が親のお身代りに死ぬのがあたりまへのこと）と考へ、さて、母に申しました。

『この上は、わらはがなんとかうまく計らひませう。どうぞ御心配されぬよう』

日がくれるのを待つて、盛遠が参りました。

袈裟はわざと嬉しげにこれを迎へ、やがてそのまま奥にはいろうとすると、盛遠は大そう怒り刀を抜いてをどしつけ、

『あのしがその料簡なら、是非もない。この上はおのしと渡奴を殺してくれるばかりだ』と申します。



この時袈裟は、わざと偽つて、

「決してそんなつもりではござりませぬ。ただ、あなたさまのお氣持が、知りたかつたのでござりまする。このやうに渡のところは居りましても、いろいろと厭なことがかりあるので、逃げて歸らうと思つたことも、今までに何度か知れませぬ。でも、母のいひつけにそむくのも心苦しいので、けふまで辛抱して參りました。あなたさまがそれ程のお志なら、どうぞ渡をお殺しなされませ」といつたので、盛遠は大へんな喜びです。すると袈裟が重ねていふには、

「では、今宵渡に髪を洗はせ、酔ひつぶれる程酒をすすめて寝させませう。その時忍び入つて髪のぬれた者をお殺しなされませ」そこで、盛遠は歸つて行きました。

さてその後、袈裟は何氣なく、夫の渡に向つて、

「このあひだ母上の御病氣故、長らく家をあけて居りましたが、御病氣もおなほりあそばしましたから、そのお祝ひとして、御一しよにお酒をいただきたくござりまする」といつたので渡は大そう喜び、すっかり酔ひつぶれてしまひました。

そこで袈裟は、自分の髪をぬらし、男の着物を着て、寢て居りますと、その真夜中に、盛遠は、果して忍び入つて、ぬれた髪を手さぐりに、その首を斬つて去りました。そして後で氣づい

て見れば、それぞ夫の爲め、貞節の爲め、自分から殺された。袈裟の首だつたのであります。

### 靜 御 前

靜は、源義經の妻であります。

兄頼朝に追はれて京都を立ちのき吉野にかくれた時、義經は、そこまでついて來た靜をさとし、家來に、金を持たせて京都へ送りかへさせました。

するとその家來は、途中で金を持つて逃げてしまつたので、靜は、ただひとり雪の野路に迷ふてゐるところを、山僧に捕へられました。するとこれを聞いた頼朝は、鎌倉に呼び寄せて、「義經のありかをいへ」と責め立て、靜が、

「存じませぬ」といふと、なほも責め立てた上、丁度その時靜は、みごもつてゐたので、そのまま鎌倉に留めをされました。

さて、頼朝の妻の政子は、

(靜は舞が上手)ときいてゐたので、呼んで舞はせようとする、病氣といひ立てて參りませぬ。そのうちに、頼朝と政子が揃つて鶴岡社に參詣をすることとなつたので、この時またもや靜を呼んで、舞はせようといはしました。



静はしきりにことはりを申しましたが、たびたび強ゐられるので、たうとう舞の場へのぼり  
ました。

工藤祐経が鼓、畠山重忠が銅拍子をうちました。

静は、身なりをととのへて進み出て、別れの悲しさを歌つた曲をうたひ、また、義経を慕ふ  
歌をうたひながら、舞つたので、そこにゐた者はみな、貫ひ泣きました。

すると頼朝は、顔色をかへて、

『おのれ、賤しい女め、わしを褒めた、へいで、のめのめと謀叛人を慕ふ歌をうたふとは何  
事だ』

とまで怒つて、殺さうとしましたが、政子がこれを止め、褒美の品を下さりました。

その後、工藤祐経が梶原景茂たちと、静の宿舎で酒盛をした時のこと、酔つた景茂がからか  
ふと、静は

『わらはは豫州公に侍する者、そして豫州公は鎌倉公の本當の弟君ではありませぬか。して見  
れば、そなたたちは家來筋だのにその無禮の振舞は何ごとでせう。もし鎌倉公が兄弟の道を  
お守りになり、御兄弟がああやうに仲たがひあそばさずば、そなたたちは、わらはの顔さへ  
見ることは出来まいぞ』

と、怒りの餘り涙さへ流して罵つたので、景茂は、すつかり恥ぢ入つてしまひました。

豫州公  
義経は甲斐守  
だつたのでか  
ういひます

## 宿屋に忘れた五十兩

静岡縣駿東郡  
に在る

東海道の原町のとある宿屋に、京都生れの下女が居りました。

文永年中（元年は紀元一九二四年）のことです。

陸奥國のある富有な人が、京都へ行く途中、この宿屋に五十兩忘れて行きましたが、京から  
の歸り途に、またこの原町を通ると、その下女は、ちやんとお金を預つてゐて、渡してくれま  
した。

その人は、大そう喜んで、中から十兩出してお禮にやらうとするを、

『もしお金欲しかつたのなら、はじめから五十兩そつくりとつてしまつたわけです。決して

お禮には及びませぬ』

といつて、どうしても受けとりません。そこでその人はすつかり感心し、一しよに國へ連れ  
かへつて、妻にしようと申しますと、

『いやしい女ではありませんが、そのやうな仕方では嫁ぐのはいやでございます』といつて承知し  
ません。

その人は、ますます感心し、そこで人を仲に立ててその下女の兩親に話をし、正式に妻とい  
たしました。



## 安の貞節

安は常陸國那珂郡岩崎村の者で、同じ郡の野上村の興次右衛門のところへ嫁ぎました。嫁ぐとまもなく、夫の興次右衛門は、病氣にかかりかたわ同様になつてしまひました。そこで安にいふには

「そなたは年は若いし、みめかたちも美しい。それだのにわしはこのやうに、かたわになつてしまつた。女が年とつてからたよるのは、子どもだが、かうなつては、それもないだらう。だからどこぞいいところへ、再婚して貰ひたい。わしは決して恨みはしないから」

すると安は、泣き悲しんでなかなか承知する様子もなく、

「わたしが出て行つたら、誰がお母あさまやあなたのお世話をするのです」と申します。

それでも興次右衛門は、安の末々のことを不憫に思ひ、たつてよそへ再婚せよといひますと、安はたうとう、刀を抜いて自殺しようといたしました。

興次右衛門も大そう驚いて、そのことはそのまゝ、やめにいたしました。

さてそれからの安は、一そう身持をつつしみ、夫や姑に一心につかへました。かんじんの男が長いあひだ病みついてゐるので、一家はすつかり貧しくなり下男を雇つたり、馬を飼つたりすることが出来ません。そこで安は、自分から田畑に出てたがやし、それで一家の者を養つ

て居りました。

ある日のこと、領主の徳川光圀が通りがかりに、安が畑をたがやしてゐるのを見ると、

(田畑で女がひとりで働くといふには、何かのわけがあるに違ひない)と、早速お供の者にきかせたので、安は一家のこと、夫の病氣のことなどを、精しくお答へ申しあげました。

光圀はすつかり感心されて、すぐに、わざわざ興次右衛門をお見舞ひ下さつた上、安には褒美の金を賜はり、いろいろの租税をおゆるしになりました。

これを聞いた近所の人たちも、いろいろの物を送つて、一家をなぐさめました。

## 第十四 廉潔

およそ人の道を正しくあゆまうといふには、廉潔でなくてはなりません。廉潔に身をもつて、決して慾に迷はず、その上に義を守り道を行ふべきであります。慾心を起して、してならぬことをしたり、取るべきでない物を取つたりする事は、そこで義はきづつき道はそこなはれます。かうした者は、子としては不孝、臣としては不忠であります。また、そのやうなことをしてどんな手柄を立てたからとて、決して立派なものではありません。廉潔でなくてはならぬわけであります。



## 坂上當道

坂上當道は、齋衡の頃〔元年は紀元一五一四年〕に右衛門權佐で、檢非違使をして居りましたが、職務に公平な人で、いかに身分の高い権力のある人だからとて、へつらうやうなことはありませんでした。

貞觀年中〔元年は紀元一五一九年〕に陸奥守となり、常陸權介を兼ねました。ところがやがて任期が満ちても、代りの役人が來なかつたので、四年も待つた後、任地でなくなりまして、當道は金錢を輕んじ、その反對に義を重んじた人ですから、任地でも立派な政治を行つたため、民たちは實に仕あはせに慕うことが出來ましたのであります。

これ程の人でしたが、大そう貧しくて、いざお葬式を出さうといふ時、家にあつたものは、ただ着物がひとかさねだけだつたといはれます。

それでも任地の民は、長く當道の徳をしたひました。

## 國を治める道

橘良基は、五つの國を治めて、いろいろと功德のあつた方であります。

任期が終つて歸る度に、決して財産など残して歸りません。そして、子どもたちにはいつも清廉であれとおしへました。

子在公がある時、國を治めることを訊ねられると、これに答へて、『國を治めるのはいろいろとござりますが、治める者まづ自身が、身を廉潔にするに越したことはござりませぬ』と申しました。

なくなつた時、家中になんの蓄へもなかつたので、中納言在原行平が、いろいろとお世話をして、やつとお葬式を出すことが出來ました。

## 紀夏井と餞別

紀夏井が讃岐守となつた時、大そういい政治をしたので、民たちは大喜びをいたしました。さて任期が終つたので、京へ歸られようと言われると、百姓たちが大ぜいやつて來て、

（どうぞ、もつといらして下さいませ）とお願ひし、たうとう二年も餘分に勤められました。かうして民たちは大そう富有に、安樂に暮すことが出來ましたので夏井は、その部内に大藏を造つて、ここへ餘分の米麥等をたくわへ、不作の時の用意といたしました。この大藏は、しまひには四十にもなつたのであります。

さて、いよいよ都へ歸られることとなつた時、大勢はいろいろとお餞別を持つて參りました



が、何れとて受けなかつたので、こん度はわざわざ都の家まで届けたが、夏井は、ただ筆と紙を納めただけで、他の物はみな送りかへしてしまひました。

### 一 萬石より家來ひとつの命

天野康景は、徳川氏に仕へて一萬石を頂だいし、興國寺城に居りました。

ある時家を建てようとしてゐると、その材木が盛んに盗まれます。そこで家來に番をさせてをくと、やがて盗人が一團となつて来て、番卒に襲ひかかりました。そこで、番卒は刀を抜いてこれを追ひはらひ、たうとうそのひとりに切りつけました。

さていろいろ調べて見ると、盗人は徳川氏直々の領地の者で、それを笠にきて自分の方から代官に訴へ出て、

「天野様の家來に怪我をさせられました」と申しました。

そこで代官井出甚介が、康景の所へ使を送つて、

「勝手に民を傷けるとは、飛んでもないことでございませう。早く下手人をお出し下されたら」と申してやりました。

すると康景が答へて、

「賊が来た時これを斬り殺すのは天下の法でござる。彼等は盗みに来た。殺しそこねたのが残

念です。わしの家來はわしのいひつけて賊を見張して居つたので、そこへ賊が来たからこそ切つたので、當然のこと。それがなんで罪でせう。それを引渡すなどとは、もつての外のこと」といひました。

そこで切られた盗人はたうとう家康に直々に訴へ出たので、康景甚介を呼んで記いて見ると、前と同じやうな言をいつて、なかなか話がまとまりません。

この時家康には、

「康景は決して嘘を申す男ではない、嘘は、きつと訴へ出た者の方にあるのだらう」と、訴訟ごとをやめさせ、さて本多正純を康景に會はせて、内々で、

「切られたのはわしの領地の者、切つた者はその方のうちわの家來だ。内輪の者が公邑の民を切つたのでは、上の威光がきづつく。だから矢はり下手人は出して貰はぬと困る」といはせまずと、康景はこれに答へて、

「眞つ直な理窟が、曲つた理窟に従ふといふ法はござらぬ。わしの家來は卑しい者ではあるが、罪のない者、それを殺すよりは、わし自身が罪を買つて出よう」といつて、たうとう一萬石の録を捨て、城を明け渡していづこともなく去りました。

### 天命を悟る



京都にあつた話です。ひどくお腹をすかした男が、往來で金を拾ひました。そこで、落し主を尋ねて行つて返してやると、返された人がいふには、

『あなたはそんなにお腹を空かしてゐる時に金を拾はれた。つまり天からさづかつたも同然です。だのにとらずに返へしに来るとは、さてさて見あげたお心です。さうはいふものゝ、心の中ではさぞこの金が欲しいことせう』

その時餓えた人は答へて、

『わたくしは、不仕あはせにも餓え死をしようとして居りますが、これも天命です。天命にそむいて物をとるのは、塵ひと筋でもいけないことです。ましてお金がとれるものですか』と申しました。

## 第十五 敏 智

智といふものは、人にとつてなくてはならぬものであります。でも、智の尊いのは世のことがらの筋みちをわかまへ、何事をするにもよく機を見ることが出来るためであつて、小柄口にまかせ、利慾にばかりはしるやうでは、かへつて害になります。ですから忠信といふことを本根とし、道理でこれを見がきあげ、智を大成したなら、およそ天下のことに、

役立つものであります。

教育勅語「智能ヲ啓發シ」

## 御宴の日

第十二代景行天皇の五十一年〔紀元七八一年〕に、第十三代成務天皇にはまだ皇子におはしませんでした。正月の御宴の日にあつて、皇子と武内宿禰だけは參朝いたされませんでした。

そこで天皇がお召しになつて、そのわけをお訊ねになると、皇子には、

『御宴の日は、誰も彼も御所を護ることをうっかりいたすものにござります。さういふ時は愚者が參つて、なにをいしてかすか知れませぬ故、御門を護つて居りました』

と仰せられたので、天皇には、大いに嘉し給ひました。

## 烏の羽に書いた文字

船辰爾は本姓を王と申します、第二十九代欽明天皇の御代に船長となり、船史といふ姓を賜はりました。

第三十代敏達天皇の元年〔紀元一二三二年〕に、高麗の國から、表をたてまつりましたの



で、係の役人を召して讀ませられるとむづかしくて誰ひとり讀むことが出来ません。その時辰爾が、その意味を解きあかしたので、天皇は大そうお喜びになり、宮中に召し出されました。

その後高麗が、また表をたてまつりましたが、それを烏の羽に書いて來たので、どうにも讀むことが出来ず、いづれも困つてしまひました。

すると辰爾は、まづその羽根をこしきでいち度蒸してから、帛ひへ押すと、文字は帛へはつきりうつりましたのでそれを讀みました。

天皇には、この時も大そうお褒めあそばしました。

### 城壁の修理

豊臣秀吉が、はじめて織田信長に仕へた頃のことです。

時も時、信長のゐる清州の城の城壁が、百歩ばかりのあひだくづれました。そこで役人に命じ、軍卒をつかつて修理させましたが、ひと月以上になつても、なかなか出来あがりません。

秀吉は、この時はまだ身分の軽い者でしたが、修理中のお城を仰ぎ見て、(あのやうなことをしてゐたのでは實に危い話)とつぶやきました。

こしき  
飯などを蒸し  
かかしぐ貝でつ  
かして瓦でつ  
くつてありま  
した

このことが信長に聞えると、秀吉は、早速御前へ召し出されて、いろいろと、叱られました。が、その時秀吉のいふには、

「ただ今のお國の様子を見ますと、東の方には今川が居り、西の方には齋藤、淺井、六角がゐて、毎日々々、こつちの油斷を狙つて居ります。それなのに、お城の修理があつたやうに永引いたのではどうなりませう。役人たちが、わが君さまのお爲めにつくさぬ様子が氣になつた爲め、ああ申したのでござりまする」

これを聞いた信長は、はつと氣づかれ、しばらくは黙つていられましたが、やがて秀吉にその修理工事をお命じになりました。

そこで秀吉は、まづ大勢の人夫どもを集めて、これに酒や御馳走を賜はり、さてそれらを十隊にわけて、ひとつの隊に十足歩くあひだだけのこれをつくるはせ、自分自身ではげしく監督したので、たつた二日で、すつかり出来あがりしました。

これを見た信長は、秀吉のあたまたのいいのにびつくりし、大そう喜んで、俸給をまし、役を引きあげました。

後の世に、割普請わらふしんといふのは、これからはじまつたことであります。

### 石合戦



徳川家康は、幼い頃は、駿河の今川家に人質にやられて居りました。

駿河のならばしとして、五月五日の端午の節句には、子ども達は石合戦をいたします。そして見物の者も、それぞれ敵味方にわかれて、加勢をするのであります。

その時家康は、十歳でしたが、家來にをぶはれて見物に出かけました。

見ると、一方の組は三百人以上も居りますが、片方は半分にも足りません。そこで加勢の連中はいづれもその大勢の方へと参ります。

それなのに家康は、家來にいひつけて、すくない方に加勢させました。

家來が、そのわけを訊ねますと、

『多い方は、人勢に氣をゆるしてゐるから、みんなの心が別々だけれども、すくない方は、負けさうだから一生懸命に戦ふ。だからそつちが勝つのだ』

と答へました。その日の勝負は、たしかにその通りでした。

これを聞いた今川義元は、

『將軍の家柄からは、將軍が出るものだといふが、本當だわい』と申しました。

### 甲賀孫兵衛の智略

甲賀孫兵衛は、稻葉正登の家來でした。

正登は式部といふ弟が居りましたが、行ひのわるいことが度々重つたので正登は怒り、たうとう孫兵衛に弟を斬つて來よといひつけました。

孫兵衛はその時齡十六でしたが、

(わが君がああは仰せられるものの、肉親の御兄弟であつて見れば、なんとかして罪のおわびを申しあげたいものだ)

と考へ、いろいろとおとりなしを申しあげると、正登は怒つて

『その方は、實に臆病な奴ぢや。いひつかつたことが出來ぬからそのやうに申すのであらう。

よし、よし、この上は、誰か他の者をつかはすばかりだ』と申しました、すると孫兵衛は、

『臆病故に御用が果たせぬと仰せられますなれば、参ります。さりながら、うまく行くかぬかは、時の運にござります故、どうぞ、檢分の方をひとりおつけ下されたく存じます』と申しました。

正登は、これを許しました。

さて孫兵衛は、式部の屋敷に行くと、まづ供の者に、

『甲賀孫兵衛、君の重命を奉して參上仕りました。檢分は某にござります』

と申し入れますと、式部は、

『その用向きは、とうにわかつてゐる』と答へ、刀を抜いて大へんな見幕であります。そして



孫兵衛が座敷に入らうとすると、式部は、  
『はいつて来れば、斬つて捨てるぞ』と、叫びます。

そこで孫兵衛は、自分の刀を残したまゝ入つて行きましたので、式部もやつと氣を鎮めた様子その時孫兵衛は、式部の前に兩手をつかへて、

『君は、悪行を重ねられ、その罪はもはやゆるされがたい程にござります。それによつて、

孫兵衛は、兄殿さまの御命令を帯びて、君のお命を頂だいに參じました』

といふより早く、いきなり立ちあがつて式部に組みつき、ねぢ伏せてをいて、ふところから

取り出した七首を、相手の胸に押しあててからに、檢分の者にいふには

『どうぞ、この有様をよく御覽の上、孫兵衛が決して臆病者でないことをわが君にお傳へ下さ

りたい』それから、しづかに式部をたすけ起して、

『かうなつた上は、どうぞお屋敷をお立ちのき下さりませ。孫兵衛めがいづ方までも御供仕りませう』と申しました。

檢分の者も、それをあすすめします。

かうして式部はその場から、孫兵衛を連れて出奔されましたが、數年経つて病死された時、

孫兵衛の智略に感心していられた稻葉正登は、改めて彼を召しかかへたのであります。

## 第十六 剛 勇

人として勇氣があれば、何かことが起つた時も元氣に向へ、屈せずその職分をつくすことが出来ます。臆病な者には、正しい道はわかつてゐても、まづ損得を考へてしまつて、困難ををしきることが出来ません。ですからいつも、義を知り、勇氣をやしなつてをがなくしてはなりません。かうしたなら、弱い者も強くなれるし、臆病者も勇ましくなれます。

教育勅語「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」

### 熊 襲 征 伐

日本武尊は、御名を小碓命、また一名を日本童男と申しあげます。

幼い頃から、英雄豪傑の御氣性でしたが、御壯年になられてからは、おほかたち人並みすぐれて逞しく、身のたけ一丈、大そう力強くあらせられました。

第十二代景行天皇の二十年「紀元七五七年」に、熊襲がそむいたので天皇には日本武尊に命じて、これをお討たせになりました。

尊はその時御年十六でしたが、まづ熊襲國に行き、土地の有様などを、いろいろとお調べに



なりました。

丁度その時、賊のかしら、川上梟帥が、親族たちをあつめて、盛んな酒盛をいたしました。そこで尊には、まづ髪を被つて、童女の姿となり、劔をかくし持つて、女たちの中にまぢつて居られました。

梟帥は、尊を見ると大そう喜び、そばに引きよせて、酒を注がせ申したりして、戯れて居りました。やがて夜も更けて、呼んだ客たちが歸る頃には、酔ひ倒れてしまひました。

尊にはこの時、劔を抜いて、梟帥の胸に突き刺すと、梟帥は、苦しい息の下から、

『何者か』と訊ねました。

そこで尊が、

『われこそ皇子日本童男』とお答へあそばすと、梟帥は、

『われは今まで、力づくでこのあたりを従へて來たが、まだ皇子程勇氣のあられる方を存じませんでした。どうぞ、お名を、日本武尊とたてまつりませう』と申し、尊には、梟帥の言葉が終つた時、刺し殺してしまはれました。

尊を日本武尊と申しあげるのはこの時からであります。

やがて、弟彦たちをわかちつかはされて、他の賊どもを攻め滅ぼされ、熊襲國をすつかり平げられました。

## 伊企儼の剛勇

調伊企儼は、大そう勇氣のある人でした。

第二十九代欽明天皇の御代に、紀男麻呂たちをつかはして、新羅を討たせられました。伊企儼も従軍いたしました。ところが、運悪くも捕へられてしまひましたが、伊企儼は、なかなか降参いたしません。

その時新羅の兵は、刀をつきつけて、伊企儼に（譬を日本の方に向け、日本の大將よ、この譬をくらへと」いへ』

と責め立てました。するとその時伊企儼は、さういふ代りに、譬を新羅王に向けて、大聲で

『新羅王よ、この譬をくらへ』

と叫んだので、新羅王は大へんに怒りさんざんに責め立てましたが、顔色ひとつ變へずに、死ん





で行きました。

そして、その子の舅をこも、父の屍を抱いて、死んだのであります。

## 藤原光頼

藤原光頼は心たけく勇氣ある人でした。

平治の亂に、藤原信頼は早くも御所を圍んで、二條天皇と後白河上皇ををしこめ奉り、自分から大臣大將となり、勝手に勅語をいつはつて、公卿をあつめ會議をひらきました。

光頼はこの時左衛門督でしたが、召によつて、禮服を着て御所にあがる時すつかり武装した乳母の子藤原範能を連れて行き、

『もしことが起つたら、まづわしの首をとれ』といひつけました。

さて、御所へ参り、殿にのぼると、信頼はずつと上坐に居り、他の公卿たちは、みなそれより下の方に並んで居ります。これを見るや、光頼は、

『席の順が、どうしてこのやうに亂れてゐるのか』といひながら、いきなり信頼の上に坐つた勢ひに、さすがの信頼も、すつかりどきもを抜かれ、言葉もありません。すると光頼は坐りなほして、

『けふの會議に参らぬ者は、殺されるとか聞いたが、一體何を相談するのですか』といつても

誰ひとり答へる者とはありません。信頼も、ひと言も申しません。

すると光頼は、

『参るのが間違つた』とそのまま御所をさがりましたが、その時、弟の惟方を呼んで、(決して賊方に仲間になるなよ)といひ渡し、二宮を守らせました。

この時、御所の庭に詰めてゐた兵士たちは、光頼を見ながらお勇ましいお方ではないか。この度のことが起つてから、誰ひとり右衛門督殿にさからうた者はないが、このお方だけが、上坐へお坐はりなされた』と語り合ひました。

ある歴史に、

『惟方が天皇のお供をして、そつと六波羅におうつし申しあげ、そこで官軍が勢力を得ることになつたのも、この時光頼の計らひが大へんな手柄となつてゐる』と書いてあります。

## 奪ひかへした錦の御旗

村上義光は、彦四郎と申します。左馬權頭となりました。

元弘の亂に、護良親王に従つて、十津川に逃げたところ、親王を追ひ奉ることがはげしいので、親王には、十津川から吉野へとわたらせられました。

丁度その時、吉野の芋瀬某あまねといふ者が、賊軍のために、親王をお捕へ申しあげんとしまし



たので、親王には、御家來をおつかはしになり、大義を説かせられたので、芋瀬は、『御無事にお通し申しあげます故、何卒錦御旗か、さもなければお側つかへの方一二人をお残し下されたう存じます。さうすればお通し申しあげた言ひわけも相立ちます』とお願ひ申しあげたので、親王には、錦の御旗を與へて、お通りになりました。この時村上義光は、すこしをくれて通りますと、芋瀬の軍兵どもが、錦の御旗を持って、歸つて行きます。そこで、

『おのれら木つ葉どもの、勿體なくも手をおかけ申せる御旗と思ふか』

といふより早く、いきなり軍兵のひとりをつかみ、かなり遠くへ投げつけて御旗を奪ひかへしました。

これを見た芋瀬の軍兵どもは、すつかり恐れて、追つて来ようとしませんでした。

さて吉野を護つてゐる時のこと、賊の大軍が攻めよせて来て、城もはや落ちるばかりになりました。

その時義光は親王に、おすすめ申しあげて落としまゐらせ、自分は、親王から賜つた御鎧を着、親王と名のつて、城の櫓にのぼりました。

子の義俱も、一しよに討死、と頼みましたが、義光は許さずに、賊が親王のお跡を追ふのを

ふせがせました。

かうして義光は、親王がかなり遠方へ落ちのびあそばしたと思はれる頃を見計らひ、櫓から賊軍に向つて大聲に叫ぶには、

『今上の第三子護良、今こそ腹を切るぞ。汝らゆくゆくは、必ず天の御罰をかうむらん。今わが腹の切りやうを見て手本にせよ』

といふより早く、腹かききり、腸をつかみ出すと、その壁に叩きつけて死にました。

賊は、大急ぎで義光の首をとると、そのまゝ圍みをといて引きあげました。

さうかうしてゐるうちに、賊兵は落ちて行かれる親王に追ひついて参りました。すると義隆は、ただひとり踏みとどまつて、賊兵數人を斬り、自分の身には二十餘ヶ所の劍をかうむつた後、これも腹を切つて死にました。

このすきに、親王には、からくも落ちさせ給ふたのであります。

## 一騎當千

本多忠勝は、平八郎といひ、徳川家康の家來の中でも、その勇氣のあるので有名であります。

小牧山の合戦の時のことですが、家康はじめ豊臣秀吉の前衛隊と、長湫に戦つてこれを打



ち破ると、すぐに自分の兵を退かせて、小幡の砦にはひりました。

(敗けた)ときくと秀吉は大いに憤慨し、數萬の軍を従つて、早速出かけて來ました。

その時忠勝は残つて小牧を守ることとなりましたが、

『敵の大軍が押しかけて來るさうだが、それでは、御主君のお身の上が心もとなら』

といつて、五百の兵をひきゐて秀吉の軍を追ひかけ、しまひには、並んで進むといふ形になりました。双方のあひだは、四百歩ばかりです。

その時秀吉は、

『あれは誰か』と問ひました。』

そこで、わきにゐた者が

『本多平八郎にござります』と答へると、

『なる程、噂に聞いてゐた通り勇ましい男だ』と申されました。

かうして兩方の軍が近よると、その度毎に忠勝は、すぐに鐵砲を射たせましたが、そのうちに、ひとりの兵がうつかり馬を逃がしたものですから、馬は敵軍の中へと走りこみました。

これを見た忠勝は、いきなり馬に乗つて追つて行き、逃た馬を連れ戻し、逃がした兵に渡しました。

秀吉の兵はこの有様を見て、忠勝を討ちとらうといはしましたが、秀吉はそれを許しません

でした。

和睦が出來た時、忠勝は家康のお供をして京都に行き、そこで秀吉に對面いたしました。

その時秀吉は、

『小牧の合戦の時の御身の働きは、たしかに一騎當千といふべきであつたよ』と、忠勝を褒めました。

一騎當千  
ただひとり  
千人の敵にも  
向へる程に強  
いこと

### 濱田彌兵衛のいごと

濱田彌兵衛は、長崎の人であります。

商船にのつて、たびたび外國へ渡り、外國の言葉も話せたし、事情にも通して居りました。

寛永年中に長崎の代官末次平藏の商船が、印度インディアに行く時、臺灣に寄ると、その紅毛人のため、船を襲はれ、荷物を掠めとられてしまひました。その時平藏は大いに怒り、

『これは、決してわしひとりの恥ではなく、わが日本の御國の恥である。どんなことをしても仕返へしをしてやらなくてはならぬ』といつて、このことを幕府に申しました。

幕府は(よろしい)と許してくれませぬ。

そこで平藏は、彌兵衛に仕返へしのことを相談すると、彌兵衛は大いに憤慨し一も二もなく賛成して、早速に弟の小左衛門、子の新藏、それに兵卒數百人を連れて、みんな百姓の身なり

寛永  
その元年は紀  
元二二八四年





になり、蓑笠姿で鋤鎌を持ち、臺灣海口に行つて  
その役人にいふには、

「日本人ですが、臺灣は土地が廣く、その割に人が  
がすくなく、まだ荒れ果てた地も多いと聞いて  
居ります。どうぞここに住んで、土地を耕した  
いと思ひます」

そこで役人が、甲比丹にそれと知らせますと、  
甲比丹はなかなか信用しないで、見張りの船を出  
して、彌兵衛たちの船を嚴重にとりかこみ、上陸  
をさせてくれません。そして家來をよこして、

「その方達の來たのは、決してそんな積りではあ  
るまい。もしそれだけの望みなら、なぜさう大  
勢の人数で來たのか」と訊ねました。

彌兵衛は、

「これはまあ、なんたる疑い深いことを申されま  
す。もし日本が外國の地を攻めとる積りなら、

えらい大將が、強い軍卒をひきゐて参りませう。なんでわたくしめのやうな者をよこしませ  
う」

といつたので、役人がこつちの船中を調べると、數十本の刀と、鋤や鎌といつた物ばかりで  
あります。そこで役人がそのことを報告すると、甲比丹も少々疑ひがとけ、とにかく彌兵衛た  
ちを、上陸させてくれました。

彌兵衛たちはかくしてやつと甲比丹の城に入ることが出來たので、早速甲比丹に會つて、こ  
のまゝ土地の者となりたいたいと頼んで見たが、許しません。そこで、(では、日本へ歸して貰  
ひたいと頼んでもこれも許してくれません。こんな風に五六ヶ月といふもの毎日いろいろと頼  
んでも、矢はり許してくれません。

やがて彌兵衛は、一同に向つて、

「甲比丹は、われわれに、土地を耕すことも、本國に歸ることも、どつちも許してくれぬ。男  
と生れて、かうした土地に渡つて來るからには、一か八か當つて見るに限ると思ふがどう  
か」といふと、一同口を揃へて、

「御一しよに死ぬまでも、ひと戦いたしませう」といひました。

さて翌日のこと、夜のひきあけに、彌兵衛は子と弟の三人と、甲比丹の城に行きました。



他の連中は、みんな城の外で待つて居ます。

三人がいきなり中へとびこむと、この時甲比丹はまだ寝てゐたが、寢室にはいつて来た三人を見て大いに怒り、

「貴さまら、なんだつて無断で他人の寢室に入つて来るのだ。無禮であらう」と、叱りつけました。

この時彌兵衛はいきなり甲比丹にとびかかり、懐から七首を取り出してこれをのど元につきつけて、

「貴さまこそ、ひとの無禮をとがめだて出来る男か」といつてゐるうちに付添の者たちは、刀をぬいて迫つて來ます。すると、小左衛門と新藏も刀を抜いて、喰ひとめ、睨みながら、どなりつけたので、付添の者たちもびつくりして、かかつて來る者もありません。

一方甲比丹はすつかり膽をつぶし、恐れ入つて、

「どうぞ命だけは助けて下さい」と泣いて申します。

「命が惜しいなら、あの太筒を射つのをやめさせろ」

「御命令通りにいたします」

「それから、この前に掠めとつた荷物を倍にして返へせ」

「仰やる通りにいたします」と、甲比丹は一も二もありません。

この時彌兵衛と一しよに來た兵卒たちは、城中の様子を聞き知るや、どやどやと亂れ入つて戦ひはじめましたが、後から來た者は、太筒にやられる者が大勢居ります。そこで彌兵衛は、左の手に甲比丹の腕を掴み、右の手に七首を持つて立ちあがると、小左衛門と新藏はその前後について、外へ連れ出したが隊長を捕へられてゐるので、敵の兵卒たちは手も足も出させん。

かうして甲比丹は、太筒を射るのをやめさせ、更に命令を出して、自分の國の船一隻と日本の船二隻を支度して、これへいつばいに荷物を積みこませたので、彌兵衛はいちいちそれらを検査し、そのまゝ甲比丹を連れて出帆しようとした。

甲比丹は

「この島の者は、みなわたくしのいつけで働いて居ります。今わたくしがゐなくなつたら、どうしていいか分からずなませう。わたくしに、今年十二になる子がござります。これを身代りとしてお連れ下さい」

と申しました。そこで彌兵衛はこれを許しその子と、他に頭だつた者五六人を人質として連れて歸つたのであります。

代官は急いでこのことを幕府に報告し、いろいろと褒美を與へました。かうして彌兵衛の名は、外國まで響き渡りました。



## 第十七 公平

鏡にうつつたのを見て、本物はもつと美しいのだとか醜いとかいふ者はありません。はかりにかかつたのを見て、本物はもつと重いとか軽いとか、いふ者はありません。鏡もはかりも、公平にうつしたりはかつたりするからであります。この公平で國家を治めれば、決して亂れる心配はない道理であります。えこひみをすれば、人は決して信服しません。小さくは怨み、大きくは叛亂を起します。公平といふことを大切にせねばならぬわけであります。

教育勅語「常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ」

### 推古天皇

第三十三代推古天皇の三十一年〔紀元一二八三年〕に蘇我馬子は、葛城縣を賜はつて、封戸といいたうござります。

と願ひあげました。すると天皇には

「朕ハ蘇我氏ノ出ニシテ、大臣ハ朕ガ舅ナリ。請フ所従ハザルハ無シ。然ドモ朕ガ世ニ當テ。

封戸  
こと  
いひ  
まふ  
は  
し  
む  
か  
し  
む  
は  
し  
む  
功  
勞  
の  
あ  
る  
者  
に  
賜  
は  
る  
す  
い  
ひ  
ま  
す

遣ニ此縣ヲ失ハバ、豈唯朕後世ノ譏ヲ受ルノミナラムヤ。大臣亦不忠ノ名ヲ蒙ラム」と仰せられて、これをお許になりませんでした。

### 御門の鐘と箱

第三十六代孝徳天皇には、御即位にあつて、鐘と箱を御所の門前に設け、そして仰せ出だされるには

「凡ソ憂訴ノ人。伴造有ル者ハ。伴造先ツ議シテ後奏セヨ。尊長有ル者ハ。尊長先ツ議シテ後奏セヨ。如シ伴造尊長達セザル者ハ。牒ヲ匿ニ納ヨ。味爽有司執テ之ヲ上ツリ。朕親ラ年月ヲ記シテ。羣卿ト共議シ。其伴造ヲ罪セム。官司或ハ阿黨稽留シテ。割斷直カラザル者アラバ。當サニ鐘ヲ撞クベシ。天下ノ民ヲシテ。咸トク朕ガ意ヲ知ラシメヨ」

それからまた、百姓たちが勝手に土地を賣ることを禁ぜられるお勅語も下されて、兼拜の路を塞がせられましたので、百姓たちは大そう喜びました。

### 藤原隆資の名言

藤原隆資が吉野におはしました後醍醐天皇にお仕へ申してゐた時は、權中納言でありました。



丁度その頃、北國の戦で敗れた脇屋義助は、そつと吉野に歸つて参りましたが、天皇にはいろいろと義助をばげまされ、お褒めのお言葉さへ賜はつたのであります。

その時権大納言藤原實世は、満座の中で、

『義助は戦に敗れ、身をかくす所がなくなつたため、やつて來たのだ。それなのに、あのやうに御褒めのお言葉さへ賜はつたのは、むかし平維盛が敗けて歸つて來たのに、位があがつたのと少しも變らぬ、をかしたものだ』と申しました。

それを聞いてゐた隆資は、

『義助が敗戦したのは、天いまだわが吉野の朝をたすけ給はぬにもよるが、朝廷の御處置がおよろしくないことも考へなくてはなりません。決して義助ひとりが悪いとは申せぬのであります。むかしから武將に出征を命ずる時はこれを厚くお扱ひになりました。そして出征中はいちいちこちらから言葉をはさまず、萬事をその將軍に任せ、その結果を論じ、かうして軍卒たちに將軍の命令を重んじるようになされました。だからこそ敵を敗り、賊を平げることが出来るのであります。それなのにこん度の北國の戦では軍士の不平をいちいち朝廷でおききになり、將軍はてんでどうすることも出來ずこの吉野にゐる侍従の者たちがいろいろと世話をやつた爲め將軍の威力権力といふものは、一日増しに軽くなり、兵共は段々命令をきかなくなりました。かうだつたからこそ戦にも敗れたので、はじめから義助のせむではなかつ

たのであります。こん度脇屋義助が吉野に歸つて來たにつれ、畏くも天皇にはそのことにお氣づきあそばし、あのやうに厚くその勞を嘉せられたのです。むかし秦の孟明視、西乞術。それから白乙丙が鄭を攻めて晉に敗られた時、秦穆はその敗軍を、自分自身のせむだとして孟明視たち三人を責めませんでした。かう考へてまゐりますと、こん度の朝廷の御處置はまことに結構なことで、どうして維盛の時のことと一しよに視ることが出來ませう』と申されたので、實世はなんと答へることも出來ませんでした。

### 板倉父子

板倉勝重は、徳川氏の家來で考へぶかい、そして心の大きな人でした。徳川家康が、濱松から駿府に移つた時、勝重を奉行にいたしました。勝重は、いろいろと御辭退申しあげたが、お許しになりません。すると、

『では歸つて、妻に相談をいたしました上で……』と御返事いたしました。

家康は、（とんだ男だな）と思はれましたが、それをお許しになりました。

さて勝重が家に歸ると奥方は、早くも夫の出世の事を知り、大そう喜んで出迎へをし、なほくはしく伺ひますと、勝重は朝服を脱いでから、奥方に、

『わしは奉行になるやう御命令を受けた。そこでそなたに相談しようと歸つて來たのだが、ど







「わたくしが間違つて居りました」と、重宗が申しました。そして、それから、役所に出る度に、お茶の白を障子のこちら側に持ちこみ、西方を拜してから座につき、自分の手で茶をひきさてその後で障子を開かせましたが、裁判中決して裁かれる者の顔を見ぬようにしました。そこである人が、そのわけを訊ねると、重宗が答へて、

「裁判をする者は、決して私の心を持つてゐてはなりません。ですからまづ西方を拜するのはまづ愛宕山の神に伺ひを立てるためであります。私心があれば、神は必ず拙者をお罰しになるでせう。一體に、心が平らかだと、物事の判断をする力が公平になります。公平になれば嘘と本當がはつきり見はけられます。ですからかうして茶をひいて、自分の心をためしてゐるので、ひいて出て来る茶の粉の、あらいこまかいの區別は、白をひく手の早いことをいふことによるもので、手の早いことをいふことは、つまり心のきまつてゐるか荒立つてゐるかによるからであります。また、凡そ人の面はひとりひとり變つてゐて、その中には、見ただけで、好きになれるのもあり、また反對に、なんとなく憎らしいのもあります。かうして自分の方から、まづその顔を見ただけで、好ききらひを感じるやうでは、どうしてもえこひるきが出來てしまひます。それが爲め障子を閉めるのであります」と申されました。

重宗はかうしてその職に、凡そ四十年も居りましたか、始終公平だったので、賊さへゐなくなつたといはれます。後年裁判のこと政治のことを話す者は、まづきまつて、板倉勝重とその子重宗の話を引きあひに出す位であります。

## 第十八 度量

心の持ち方が大きくて、他人の間違つたこともゆるせるのを、度量と申します。そしてこの度量こそ善をあつめ、多くの友だちをつくれるものであつて、いろいろの徳も事業も、これを基として出來あがります。ですから人は誰しも、つとめてこの徳をみがくやうにし小さな目先の利益ばかりを考へず、小さな手近の成功ばかりを思つてゐてはなりません。かうしてこそ心さまは大きくなり、したがつてその成功も大きくなるわけであります。

### 紅葉を焚く

第八十代高倉天皇には大そう御賢明にましまし、また仁孝のお心高くおはしましたが、御幼小の頃、紅葉を献上した者があり大そうこの樹を大事にあそばし、藤原信成にこれを護るやうにとお命じになりました。



仕丁のお殿所  
お察しに  
御座り  
お勤  
り  
お勤  
り  
お勤  
り  
お勤  
り

貢  
國々から一定  
奉るもの  
今  
の赤磐郡

さてある日のこと、仕丁が、信成の留守を幸ひと、その紅葉の枝を折つて薪代りに酒をあためて飲みました。

間もなく歸つて來た信成がこのことを知ると、大そう驚いて、まづその仕丁を縛りあげ、さてどうしたものかと困つてゐると、やがて天皇には紅葉のことを問はせられましたので、信成は仕丁の粗忽をくわしく申しあげつつしんで御處刑を乞ひ奉りました。

その時天皇には、

『唐詩ニ云フ有リ。『林間煖酒燒紅葉』ト。誰カ仕丁ニ教テ。此風流ヲ作サシムルヤ』と仕丁のしたことについては、何とも仰せ出だされませんでした。

### 盗んだ貢の絹を届けさせる話

藤原保則是貞觀年中〔元年紀元一五一九年〕に備前權守となりました。

その頃安藝國の賊が險阻なところに立てこもり、備後國から奉る貢の絹を奪つて備前國の石梨郡まで逃げ、やがてとある宿屋の主に、

『この國の太守の政治ぶりはどうだらう』と訊ねました。すると主は

『太守さまはまづ仁義といふ人のふむべき道を教へられて、これを國を治める大根としていらつしやいます。ですから國中の者は、みんな我欲の心すくなく、行ひがいさぎよくなりまし

たし、その恩信を感じることは、本當に申分がありません』

と、いろいろと、國を治める道について話して聞せたので、賊はすつかり感激し、その晩ひと晩中、自分のしたことを後悔し、まんじりともしませんでした。夜が明けけるのを待ちかねて、役所に自首して出で、

『申わけないことをいたしました。備後國の貢の絹四十匹を奪ひました。今つくづく悪いことをしたと後悔して居ります。どうぞ命だけはお助け下さりませ』と願ひあげました。

保則是早速その賊を呼び出だして、

『其方はたしかに悪事をなしたが、後悔といふことを知つてゐるからには、決して根からの悪人ではな』

といひ、そこで食事をさせた後、貢の絹を荷作りさせ、手紙を持たせて備後國へ届けるよういひつけました。

これを聞くと部下の者たちは、

『あの賊は、屹度途中でまた悪心を起し、備後國へは参るま』

と噂をし合ひました。でも保則是、

『あの男はもう改心して正しい道に立ち戻つたものだ。どうしてまた悪心を起すことがあらう』と答へました



さて、例の賊は、藤原保則からいただいた手紙を持つて盗んだ絹を備後國まで届けたので、備後守は、大そう喜び、即座に賊の罪をゆるしてやり、自分から備前國へ行つて、保則に厚く禮をいはれました。

### 紀長谷雄の度量

紀長谷雄は、だんだんに出世して、中納言にまでのぼりました。大そう文學に通じてゐたため、その頃の詔勅は、大ていこの人がお書き申しあげたのです。それを菅原道真は、

(元白の生れかはりだ)

とまで讃へて居りました。

すると三善清行は、長谷雄と文學を論じ合ひ、そして

『昔から、無才の博士といふものはゐたことがない。それなのに貴公のお蔭で、それが出来てしまつた』

とまで罵りました。でも長谷雄は、別にいひ返へしませんでしたので、人々は、その心の大きなことに感じ入りました。

### 高松城攻め

豊臣秀吉が、織田の將となつて毛利を伐ち、高松城を圍んでゐた時のこと、吉川元春、小早川隆景は、毛利輝元に随つて高松城を援ひに参りましたが、こん度は信長が大軍をひきゐて秀吉を援けに來るとわかつたので、大そう驚き使を送つて、

(和睦をいたしたい) と申しこみました。

でも、秀吉が承知せずにあるうちに、信長は家來の明智光秀に謀叛され、本能寺で弑されてしまいました。その時秀吉は、このことを發表せずに城を攻め落としてしまひましたが、毛利方はまだ陣を布いて、退却いたしません。そしてまたもや使者をよこして、

(和睦の相談をつづけたい) と申して参りました。すると秀吉は、この時はじめて主君織田信長の弑されたことを話し、

(だからすぐに京都に歸つて御主君の仇を討たなくてはならぬ) といひ、その上で、

『かういふ有様だが、それでも公等はなほ、われと和睦しようとするか。當方を伐たうといふなら、今はいひ折だから、よく考へられるがよい』といつたので、隆景は、その秀吉の心の大きいことにすつかり感心し、輝元にすすめて和睦させました。

そこで秀吉は、急いで京都に歸つて、光秀を討つたのであります。

### 酒井政親のこと

元白  
支那の偉れた  
學者



徳川家康は三河に居つた時、酒井政親を執事にしてをられました。

さてここに、新しく仕へた神谷某といふ侍が居りましたが、ある時往來で政親と行きあつたので、挨拶をしたところ、政親は神谷を知らなかつたため挨拶をかへさずに行き過ぎてしまひました。

それからといふもの、神谷は政親に對して、禮儀を失つた振舞ばかりいたしました。

このことを聞いて不愉快に感ぜられた家康は、それまで神谷に祿千石與へてゐたのに、急に八百石にへらしてしまはれました。すると政親は、しきりに

(元通りにしてあげて下されたい)と乞はれます。その時家康には、

『でもあの者は、其方に無禮の振舞ばかりして居ると申すではないか。だからかうもしたら、自分から身を退いて行つてしまふと思ふのだ。そこで祿をへらしたのに、却て其方が祿をふやせといふのは何事だ』といふと、政親は、

『わたくしめはなんの力も徳もないとはいへ、君のおなさけによつて、執事として重用されて居ります。ですから君の御家來としたら、わたくしめに對して、丁寧に振舞ふのが當然でございます。だのにあの者は、あのやうにして居ります。それを見ても、どうか見どころのある者と考へられます。もし一旦君恩を感じたなら、きつと自身のことを忘れても忠義をつくす者と思はれます。ですからわたくしめは、あの者には二千石賜はつてもと思つて居り

まする』

と申しあげたので、家康は、神谷に千五百石を與へ、政親の言葉をすつかり話して聞かせたので、神谷ははじめて政親の氣持を知つて感激し、御前を退くとすぐに政親の許に參つて今までの無禮を詫びました。

神谷はその後いろいろの手柄をたてて、歩卒の將にまで進みました。

## 第十九 識 斷

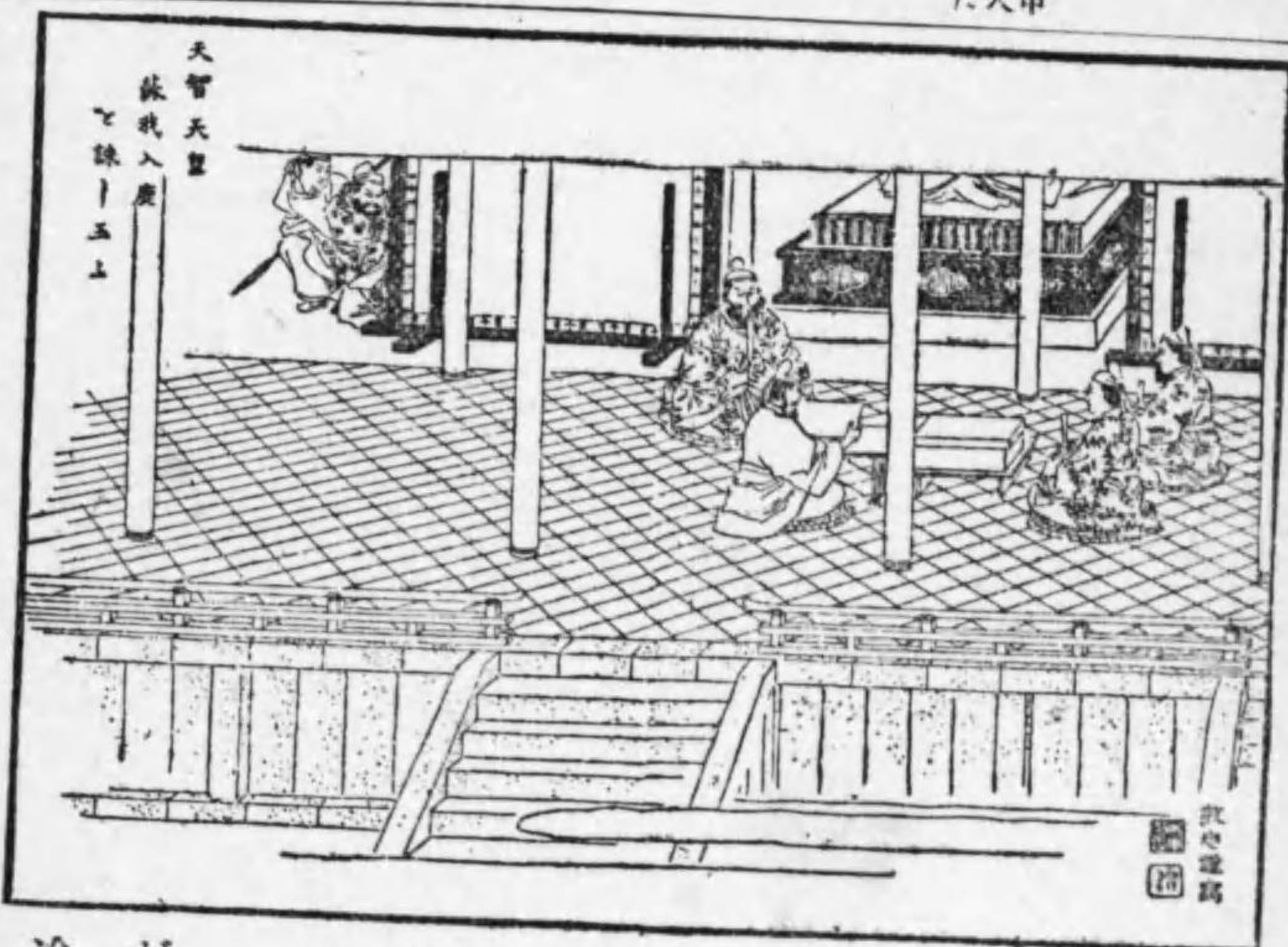
物事の本當のことがわかつてはじめて、その處置を正しくきめることが出来ます。正しく知り善くきめてはじめて、大きな事件も間違ひなく決するわけだからしたら天下にむづかしいことはなくなりませう。それも物事の理をきわめ誠をたづねることでもあります。

### 入鹿を誅し給ふ

第三十八代天智天皇がまだ皇子でおはしました時、蘇我入鹿は大勢力を持つて居り、みだりに皇族をあやめ奉つる程の横暴振りだつたので、中臣鎌足と御相談の上、入鹿を除かうとあそばされました。



大極殿とも申  
し安殿の  
大内裏の  
正殿の名



そこで蘇我石川麻呂、佐伯子麻呂、葛城稚、犬養網田たちを仲間にされたのであります。  
丁度この時三韓から使者が、貢物を届けて参りました。  
そこで第三十五代皇極天皇には太極殿に御し、入鹿が入侍いたしました。  
その時皇子には、石川麻呂に三韓の表を讀む時子麻呂と網田に入鹿を斬ることを命ぜられておりましたが、それと同時に、衛門府の警戒を嚴重にし、諸門を閉めさせ、御自身は長槍をとつて殿の側に立たれ、鎌足がそのおそばに、弓矢を持つておつきそひ申しあげました。  
さて石川麻呂は、表を讀みつづけて参りましたが、終るところになると、手がふるへ、聲がかすれ冷たい汗は背を流れるといふ、さんざんな有様となりました。

天子の御位

入鹿は、不思議に思つて、そのわけを訊ねます。すると石川麻呂は、『長くも近々と天顔を拜し奉つたため、この有様にござりまする』と答へ、一方、子麻呂もこはくなつたので、入鹿を斬らうとはいたしません。その時皇子には、急に出て入鹿をうち、その肩を傷けられたので、これに勇氣を得た子麻呂たちは、襲ひかかつて、足を斬りました。すると入鹿は、御座によりかゝつて、『臣になんの罪がござりまする』といつたので、皇極天皇には大そう驚かせ給ひ、皇子に『卿何ヲカ爲サムト欲スルヤ』と問はせられましたので、皇子には、地に伏して奏上せられるやう、  
『入鹿は、皇族をことごとく滅ぼして、天位を傾けようとして居ります。どうしても誅すべきでござりまする』  
そこで天皇には、急に入御あそばしましたので、子麻呂たちは、たうとう入鹿を殺してしまひました。  
天皇には、法興寺に入り、急變に備へ入鹿の屍は父の蝦夷に賜ひました。すると漢直たちが、仲間をあつめ、蝦夷をたすけて、亂を起さうとしましたので、將軍巨勢徳太古をおつかはしになり、ことの道理をお諭しあそばされたので、賊徒はちりぢりになり、やがて蝦夷も誅に伏しました。



## 葛野皇子の御識斷

葛野皇子はあ心さま雄大に、御手腕もすぐれ、淨大肆に位し、治部卿に拜せられました。さてここに、高市皇子が薨せられるに及んで、第四十一代持統天皇には、諸卿を集めて皇太子を立てむことをはかられました。

するといづれも自分の都合のいいやうな言分ばかり通さうとし、なかなか極まりません。その時皇子には、進み出られて、

『わが國家は神武天皇以來、子孫相うけて天位をつぎ奉ることに、なつて居ります。もし子孫の他に兄弟までその天位をつぐこととなつたなら、亂はこのあたりから起るでせう。かうなつたら、天意もはかり知ることが出来ませぬ。議論するまでもなく、御あとは定まつて居り、何を今更に申すことがござりませう』

と、御聲強く仰せられたので、今までの議論は、びたりとやみました。ここで、薨せられた高市皇子の御子が立つて皇太子とならせられました。後の第四十二代文武天皇であります。

この時持統天皇には、皇子がただ一言で國のもとを定められたことを嘉し給ひ、特に正四位を授け、式部卿となし給ふたのであります。

## 藤原長方

藤原長方は、次第に官位があがつて、やがて權中納言にまでなられました。生れつき心つく物ごとに屈せず、いひたいことは眞つすぐにずばずばといひ、厭なことも決して避けたりなぞされぬ方でした。

平清盛が、都を攝津國福原に遷した時、天下の者はいろいろな點で難儀をいたしました。ある日清盛は多くの公卿を集めて、

(京都と、福原と都としてはどちらが便利か)

と訊ねました。すると公卿たちはいづれも、清盛の氣持にさからひたくないと思つて、

『福原の方が便利でございます』と申しましたが、ただひとり長方だけは、  
『京都の方が便利でございます』と答へました。

これを聞くと清盛は、かつと怒つて、そのまま奥へ入つてしまひました。そこで大勢は、  
(あのやうなことを平氣でいつた長方は末にはきつと何か悪い目にあふだらう)

と心配して居りました。でも、さうかうしてゐるうちに、清盛は福原の都をまた京都に戻したので、天下の者は皆大喜びをいたしました。その時、ある人が長方に向つて、

今の神戸市の  
西部にあたり  
ます







して一心に兵備につくしました。

かうしてゐる時、元の使がまた太宰府に來たので、これも斬つてしまふと、忽必烈は大いに怒り、范文虎に十萬餘人をつけて水城に攻めて來ました。そこで實政以下大いに防ぎ戦つたので、さすがの敵兵も、上陸することが出來ません。たうとう退へて鷹島たかしまに據りました。

この時時宗は、宇都宮貞綱に實政を援けに行くようにと命じましたが、まだ行きつかぬうちに、大風雨が起り、敵艦はめちやめちやになつてしまひました。その騒ぎにつけ入つて少貳景資たちは小舟で漕ぎよせ、力いづばいに戦つたので、敵の屍體で海も埋まるといふ有様、無事に本國に逃げ歸つた者はたつた三人でありました。

時に弘安四年〔紀元一九四一年〕で、これからといふもの、元は二度とわが國を狙はなくなりました。

## 脇屋義助

脇屋義助は新田義貞の弟であります。

義貞が北條高時を討たうと考へてゐると、その時高時は兵糧を徵發してゐたので、軍資金を差し出せと使者をよこしました。すると義貞はその使者を斬りその首を晒しました。そこで高時は大いに怒り、新田氏を討たうとしました。

そこで新田方では大ぜいして、會議を開くと、ある者は、

『利根川で防がう』といひ、また別の者は、

『越後に行つて、一家一門皆して敵にあたらう』と申しました。この時義助は進み出て、さて

『どちらの説も駄目でせう、ちつとして敵の來るのを待つてゐると、様子がいろいろと違つて見え、それが爲め軍中には自づと臆病風が吹き起り、敗戦の憂目を見るものであります。もしさうでもなると、世間では新田は使者を斬つて捨てた爲め、罰せられたといふでせう。どうせ死ぬなら、君の御爲めに死にませう。どんな小人數であらうとも、まづこの氣持を國內の者に示し、その上で附いて來る者があつたなら、鎌倉を攻め、出來なかつたらその時こそいさぎよく討死するまでです。ちつとしてゐて殺されるより、その方がどれ程いいか知れませぬ』

そこで一同も、それに賛成したので、義軍を起し、鎌倉を攻めてこれを陥れることが出來たのであります。

## 小早川隆景の智略

小早川隆景は、毛利元就の第三子で、すぐれて賢く、その上に心落ちつき物ごとに動ぜぬ人



で、その智その勇は誰れにも立ちまさらつて居りました。

織田信長が、豊臣秀吉に命じて元就を討たしめた時、隆景は兄の吉川元春と一しよに毛利輝元を奉じて、秀吉の軍を備中國に防ぎました。するとそのうちに、信長自身が大軍をひきゐて攻めて來るといふことを聞いたので、使者を秀吉のところへ送つて、和睦しようかと相談いたしました。でもその話がまだ成就しないうちに、信長は京都で明智光秀の爲め弑されてしまひました。でも毛利方ではまだこのことを知らずにゐたので、使者を送つて和睦の話を進めて居りました。

その時秀吉は、自分の方から京都の變事をくはしく語つた上、こん度は秀吉の方から、和睦をしないと申しました。

これを聞いた輝元は大いに喜んで、諸將にどうしたらよろしいかと相談をすると諸將は一齊に、

「わが軍は信長と和睦しようとしてゐるので、秀吉とではない。今聞くに信長は死んでゐるさうだ。だから軍隊の内部には、元氣がすつかりくだけ、てんでに疑ひ合ひ狙ひ合つてゐる。この際むかへ撃つなら、きつと秀吉を生捕りにすることが出來ませう。信長の死んだのは、わが毛利家にとつては實に仕あはせなことでした」すると隆景がいひました。

「自分の考は、丸つきり違つて居ります。信長の死んだのは、わが家に仕あはせであつたので

はなく、ひとり秀吉にさうなのです。と申すのは應仁以來國々は互ひに戦ひ合ひ、合戦は跡から跡からと起り、今日ではいちばんひどくなつて居ります。そこで天は豪傑をひとり與へて、亂れた天下を統一させようとしてゐるらしい。今秀吉の振舞を見ると、どうやらその豪傑らしく思はれてなりませぬ。信長の死んだ跡に、秀吉以上の人物が居らうか。和議をかけ合つてゐる最中、内方に變事が起つたとしたら、普通の者なら、きつとその變事をひし秘しに秘して、急いで和議を結びかかるでせう。それにも拘らず秀吉は、平氣で變事を知らせて和議については、當方任せにして居ります。その心持がどこにあるのか、全く以て測り知ることが出來ませぬ。こつそり敵の陣をさぐらせたところ、いつもの日と變つたことが見えませんでした。今このまま戦ひをつづけるなら、當方が曲、先方が正であります。そこで當方を讐として怨み、攻めて參りませう。その時必ず秀吉を討ちとれるかどうかはわかりませぬもし彼を討ち漏らしたなら、いつの日かきつと攻めて來るでせう。どう考へて見ても、今日は前からの掛合ひ通りに和睦するより他に方法はありませぬ。自分の災難の時、わが軍が約束に違はなかつたと知つたら、彼はきつと我を厚くもてなし、これからはきつと榮達が出來ませう。これはきつと、彼の喜びと同じだからであります。聽いてゐた輝元は、

（それに違ひない）といひ、そこで人質を送つて秀吉と和睦し、同時に織田信長の死を弔つたのであります。



## 第二十 勉 職

凡そ人として、畏くも上は天子より、下は庶民に至るまで、職のない者はありません。ですから職のある以上、これに怠けるのは、この世に生きてゐる者として、罪を作ることになります。一心に職にはげまなくてはなりません。人たちが皆んなして、それぞれの職分につとめて居れば、國家は安らかになり、人たちは皆そのお蔭をかうひります。結構なことでありませんか。

### 崇神天皇の御事蹟

第十代崇神天皇には、お生まれつき御聰明にわたらせられ、御幼少の頃から御大望をいだかせ給ひました。

御壯年になられるや。廣く御知識を求め、御身持をつつしまれ、神々をうやまひ、いつも日本國の爲め、いい御政治をあそばさうとお心懸け下されました。

御位に即かせ給ふや、勅を下されて、

「惟レ我ガ皇祖諸ノ天皇。宸極ニ光臨ス。豈ニ一身ノ爲ナラム。蓋シ人神ヲ司牧シ。天下ヲ

經綸スル所以。故ニ能ク世々玄功ヲ闡キ。時ニ至徳ヲ流ク。今朕大運ヲ奉承シ。黎元ヲ愛育ス。何ヲ以テ聿ニ皇祖之跡ニ遵ヒ。永ク無窮之祚ヲ保タム。羣郷百僚。爾ノ忠貞ヲ竭シ。共ニ天下ヲ安セヨ。」  
と仰せられました。

時も時、疫病がはやり、民百姓たちはあちこちと四散し、苦しみのあまり叛く者も出て参りましたので、天皇には深く御心を勞させ給ひ、神々に祈つて罪を請ひ奉り、いろいろと祭典を行はせられました。

そこで、疫病もやうやくやみ、五穀のみのも豊かになつたので、民百姓もはじめて自分々の暮しに安んじることが出来ました。

そこで、勅語を下されて、

「民ヲ導ク之本。教化ニ在リ。今既ニ神祇ヲ禮シ。災害悉トク息ム。然レトモ遠荒之民。未ダ王化ニ霑ハズ。其レ羣郷ヲ選テ。四方ニ遣シ。朕ガ意ヲ知ラシム。」

と仰せ出だされ、大彥命を北陸に、武渟川別を東海に、五十狹芹彦命を西道に、丹波道主命を丹波にそれぞれにおつかはしになり、命ぜられるは、

「教ヘテ受ケザル者有ラバ。兵ヲ擧テ之ヲ伐テ」

とて、印綬をさづけて將軍となさせ給ひました。



間もなく、四道將軍には、それぞれに四方を平らげたことを申しあげここで國內ははじめて安らかにになりました。

この時またもや勅語を下されて、

「朕初メテ天位ヲ承テ宗廟ヲ護ル。明蔽ハル所有。德綏スルコト能ハズ。是ヲ以テ陰陽謬錯シテ。寒暑序ヲ失ヒ。疫疾大ニ作テ。百姓災ヲ被フル。故ニ今罪ヲ解キ。過ヲ改テ。敦ク神祇ヲ禮シ。教ヲ垂テ荒俗ヲ綏シム。吾ヲ舉テ以テ不服ヲ討ズ。是ヲ以テ官ニ廢事無ク。下ニ逸民無ク。教化流行シテ衆庶業ヲ樂ム。異俗譯ヲ重テ。海外歸化ス。宜ク是時ニ當テ更ニ人民ヲ校シ。知ラシムベシ。長幼之序次。課役之先後ヲ及」

この時はじめて人民のことを調べ、その上調役を課しました。ですから神祇和享し、風雨時に順つて、田畑の作物はよく實り、家々はゆたかになり、人は誰も彼も満足し、従つて天下は太平でありました。

天皇にはその上にも勅語を下されて、船を作つて運輸の便を益し、池や溝を掘つたり、農業を御奨励あそばしました。

その頃、人民は天皇のその功德をたたへまして、御肇國天皇と申しあげました。

## 武内宿彌

武内宿彌は、第十二代景行天皇の御時お仕へ申し、第十三代成務天皇の御時大臣を拜し、第十六代仁徳天皇の御時薨ぜられました。かうして、五代の天皇に仕へまつり、官にあること二百四十四年ですが、薨ぜられた時の年齢は、わかつて居りません。

## 神に祀られた道首名

道首名は、幼少の頃から、律令を學び、官の勤めむきのことに通じました。

かうして筑後守となりましたが、肥後國も、兼ね治めて居りました。かうして、いろいろと生業をすすめたり、耕作のことを教へたり野菜や果樹を植えさせるとか、雞や豚を飼はせるとか、かずかずのことで實によく民を教へ導きました。

そして、ただ教へるばかりでなく、自分から先だちになつて働いて見せ、教へにしたがはぬ者があると、條理をつくして叱りつけました。

かういふ風でしたから、はじめのうちは誰も彼も、しきりと道名を怨んだり、悪口をいつたりして居りましたが、いはるる通りに働いてゐるうちに、収入がふへて來たので、みな一も二もなく、心服し、大喜びをいたしました。

道名はその地に、池や川を掘つて田畑の灌漑の便を益したので、この人の仕事のお蔭をかう

律令  
今の法律であ  
ります

灌漑  
水を井地に使  
つて耕作に便  
ふ



むらぬ者はなかつたので、その頃役人のいちばん傑れた人となりました。かうして、なくなられた時は、人たちはこれを神に祀りました。

### 大暴雨をついて朝参

藤原在衝はだんだんに出世して、第六十二代村上天皇の御時、右大臣に任ぜられました。職にあるあひだ、ただのいち度も朝廷に出仕するのを休んだことがありませんでした。さて大へんな大暴雨のある日のこと、右衛門の告上が皆して、

『在衝さま程のお方でも、けふといふけふは、参内せられませう』

と噂してゐると、その言葉がまだ終らぬうちに、蓑と着笠をかむつて来る人があります。見るとそれぞ、藤原在衝その人でありました。

そこで、當時の人たちは、いづれもこの人の勤勉ぶりを褒めたたへました。

### 源親房の倅

源親房は、出世を重ねて正二位大納言にまでなりましたが、第九十六代後醍醐天皇には、北條氏のため流されておはしました。隠岐から還幸あそばすと、従一位を授けられ大臣に準ぜられました。

一般に北畠親房と稱します

この親房の子の顯家が、陸奥守となり、義良親王を奉じて陸奥出羽を治めることになつた時、親房もこれを補けに行かれました。

やがて足利尊氏が謀叛を起し、京都を犯し奉つたので、天皇には吉野に行幸あそばしました。その時顯家は、兵をひきゐて來た、攝津國安倍野で討死してしまひました。

そこで勅によつて顯家の弟顯信が陸奥介鎮守府大將軍に任ぜられ、義良親王を奉じて出かけました。この時も親房は補けに行かれました。すると海を渡る時大風が起り、親王と顯信とに別れわかれになり、親房の船は常陸の東條浦にただよひつきました。そこで、阿波崎神宮寺の二城に據つたところ、賊兵が攻めて來て、陥されてしまひました。





身をのがれた親房は、小田治久に小田、甲達行朝に伊佐、藤原實寛に駒城に、それぞれ據らしめ、東北諸國に勤王の軍を援けるようすすめました。

丁度その時、海上お別れ申しあげた親王には顯信を伴つておかへりあそばし、伊勢に到られました。丁度その時、御醍醐天皇には崩御あそばされたのであります。

そこで義良親王には、御位におつきあそばしました。即ち第九十七代御村上天皇に亘らせられます。ですが天皇にはまだ御幼少であらせられたため、御身づから政ごとを御覽になることが出来ませんため、親房は權大納言藤原實世と權中納言藤原隆資を補佐となさしむるやう奏請いたしました。

さうからしてゐるうちに、賊將高師冬は、駒城を陥れてしまつたが、間もなく官軍はまた勢力を盛りかへし駒城を奪ひかへし、勝つた勢に乗じて賊の據つた城五六を陥れたので、師冬は逃げ去つてしまひました。

親房は、陸良親王をお迎へ申しあげました。すると、一たん逃げ去つた師冬は、改めて大軍をひきゐて引つかへし、小田を攻めたので、親房は兵を出してこれを打ち敗り、一方結城親朝に加勢するように申してやりましたが、親朝は、賊軍に通じてゐたため、援けに参りません。かうして、賊軍と睨み合つて陣を布いてゐること數ヶ月に亘るうち、小田治久もたうとう賊

に降参してしまひました。

そこで親房は退却して、關城に據つたが、この時源顯時は、大寶を保つて居りました。

師冬は、親房の軍と顯時の大關と、このふたつの城のあひだに陣を布いたので、親房と顯時は一時にうつて出てこれを破りました。そこで賊は、長いこと城を圍んでしまふつもりで、それぞれ支度をしはじめたのであります。

これより前に、親房は結城親朝にたびたび援軍を求めましたが、諾いてくれないので、大さう困つて居つたのであります。そこで改めて使を送つていろいろと諭しましたが、それでも承知しません。

かうした折柄、賊將結城直朝は、自から先だちになつて攻めて來たので、親房は兵を出して應戦し、たうとう直朝を討ちとつてしまひました。

すると、この時まで敵味方どつちにもついてゐなかつた親朝は、たうとう賊に降つてしまつたので、親房は吉野に歸りました。

この時天皇には、勅語を下しをかれて、親房を三宮に準ぜられたのであります。天皇には男山に行幸し給ひ、兵をつかはして足利義詮を討たせられました。この時義詮は敗れて逃げてしまひました。そこで親房とその子顯信に命じて京都に行くいろいろのことを、



賀名生 大和吉野郡  
名生村にあり  
ます。後村上  
天皇の御座所  
のあつた所を  
世人はこれな  
し黒木御所と  
上げます

總決せしめられたが、その後賀名生が薨せられたのであります。  
親房は、はじめ賊軍の謀叛のため、長くも皇統があはや絶えんかと思ゆるを深く歎き哀し  
み、皇祖のわが日本を建國あそばした、その精神を傳へるため『神皇正統記』を著はしまし  
た。この本が、こまかいところまで明らかにし、正を扶けてゐることは、たしかに春秋の遺旨  
にあつたことと讃へられます。

結城親朝に送られた書には、下のやうに書かれてあります。

『夫レ戦ハ危事。變呼吸ニ在リ。之ヲ援スルコト時ニ及バザレバ。則兵多シト雖モ、何ヲカ  
爲ムヤ。今日ノ事務。急ナルコト星火ノ如シ。其ノ願フ所ハ瞬息之頃。持スル所ヲ喪ハズ。  
餘命ヲ以テ先皇ニ報ズル也。大義心ニ著シ。死シテ後休ム。願フニ身前朝ノ遺老ト爲リ。今  
上ヲ間關ニ奉ジ。願命ヲ彌留ニ受ケ。方ニ孤城ニ據テ。以テ八州ヲ控ス。恐ラクハ一旦命ヲ  
墮サバ。四方潰散セム。親房死後。與ニ事ヲ濟ス可キ者誰ゾ。今日足下異圖有ラバ則已ム  
矣。忠貞ヲ全セムト欲セバ。豈ニ遠慮無ラムヤ。昊天爰ニ臨シ。鬼神靈有リ。惟々天下ノ爲  
メニ言フ。敢テ餘命ヲ愛スルニ非ル也』

ある歴史の書は、親房についてかうした意味のことを書いてをります。『親房は皇運恢復の  
志をたてて、何度失敗しても決して參らず、ただひとり招討を自分のつとめとし、御幼少の  
天皇を補佐し奉り、南朝の元老となつたその意氣は、丁度諸葛亮の偉がある。』(終り)

昭和十年二月二十八日 印刷  
昭和十年三月五日 發行

定價 五十錢  
送料 十二錢

東京市本郷區駒込動坂町九十四番地

著作兼 發行者 幼學綱要刊行會

東京市牛込區早稻田鶴卷町三七一

印刷者 後藤 一

不許  
複製

東京市本郷區駒込動坂町九十四番地

發行所 幼學綱要刊行會

振替東京四四三二八番



終

